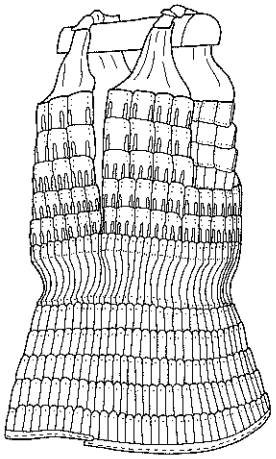
南墳の調査



V　南墳の調査

1　墳丘と外表施設

南墳は、北墳の南に接して造られており、墳丘南側は自然の丘陵斜面へと続いてゆく。調査前は雑木が茂り、一辺30ｍ程の方墳状を呈していた。墳丘西斜面には２段にわたって石垣が組まれており、墳頂から北斜面にかけて溝状の大きな盗掘壙が認められた。

調査前での墳頂部標高は71.2ｍ程である。

A　墳形と規模

南墳の墳形については、昭和43年に宇治市教育委員会より発行した『宇治二子山古墳』では円墳としている。この部分を引用する。[註51]

「墳丘は著しく破壊を蒙り、旧状を示さない。墳丘の西斜面裾部に近いところに、南北方向の一直線に走る２段の石積列石があるため、方墳とも考えていた。ところが、それは近世以後のものであることが推定できるので、方墳の根拠にならない。南墳の東北部墳丘斜面は損傷をほとんど受けず、円墳の形状を残していた。墳丘東側試掘溝で検出した墳丘裾部の空濠状のくぼみは、この古墳を画するものである。それによって推定すると、直径約36ｍの円墳となる。」

「調査の経過」で記したように、調査時では、方墳説と円墳説の二者があり、最終的に円墳と判断している。円墳の根拠となる「墳丘裾の空濠状くぼみ」は、第64図中の溝SD01のことである。これを南墳の空濠と判断している。

しかし、南墳の墳形については方墳の可能性がやはりあるのではないかと考えるため、以下に根拠をのべる。

まず測量図からである。測量図での等高線の動きは、円墳である北墳と比べると、著しく不整円形と言わざるをえない。これは、「破壊を蒙り、旧状を示さない」ためであろうが、破壊され方墳状となったと考えることができると同時に、方墳が破壊を蒙り不整円形状となったと考えることも可能である。等高線の動きを見る限り、後者の可能性は捨て切れない。

また、弧状の溝SD01が南墳の空濠か否かについてであるが、調査日誌の３月６日を見ると次のような記載がある。

「南墳をめぐる堀のあったことを確認でき掘底部より刀が１振出土。同じレベルより埴輪片及び磁器・鉄くぎ・土師器・須恵器出土。混在しているのでもとの位置とは思えない」。

この文面より判断すれば、空濠底では明らかに磁器が出土しており、溝SD01（空濠）が磁

第64図　南墳調査全図

器の示す時代まで埋没せず旧状を留めていたこととなる。これは、現実的に不自然の感を否めない。この磁器がどの個体を示すのか確認できないが[註52]、いずれにしても溝SD01を直ちに空濠とするには不安をおぼえる。

調査現場を知らないため、軽々しく論じられないが、前述報告書での調査当事者の見解とともに、方墳の可能性を考える編集当事者の推測を併記しておきたい。

方墳と考えた場合、その規模は、南北28m、東西34m程の長方形を推定したい。高さは、いずれを採用しても4.3m程となる。明瞭な段築は現状では認められない。

B　墳丘の築造

墳丘は、自然地形の切り土と盛土とで造られている。地山は、墳頂部より約1.7m程下で認められ、北墳で検出した地山面とほぼ同じ高さとなる。盛土は、この地山上に行われている。また、南斜面での盛土はかなり下まで認められる。

C　外表施設

外表施設については、後世に行われた墳丘表面の改変により全く確認できない状況である。

埴輪については、墳頂・墳丘斜面・墳丘裾部において流土中より破片が出土している。但し、墳丘表面の改変が著しいため、この埴輪が南墳に使用されていたものなのか否かは断定できない。南墳出土という埴輪は、現在、個体確認ができない。[註53]

葺石についても、確認されていない。しかし、墳丘西斜面の石積使用石が南墳の葺石である可能性は考えられる。

2　主　体　部

主体部は、墳丘のほぼ中心の表土下30cmで検出した。1基である。墳頂全域の精査において他に埋葬施設を思わせる変化はないため、盗掘壙で完全消滅したものがない限り、主体部はこの1基と判断できる。

A　構　　造

盗掘により主体部西北部を失うが、ほぼ旧状を留めていた。

墓壙掘方は、全長5.13m、幅1.6mを測る長方形を呈し、深さは検出面より0.3m程である。墳丘盛土を穿つ。

棺は、墓壙のほぼ中央西寄りに置かれている。木棺直葬であり、木口板等を支える礫・粘土等は認められない。木棺痕跡は、全長41.8m、東端での幅0.8m、西端での推定幅0.6mを測る。木棺主軸は、東より10°南へ傾く。断面形状から箱形木棺(組合式)と思われる。

棺内には赤色顔料が認められた。また、棺材の一部と思われる木質残片が後述する鏡の上で出土している。

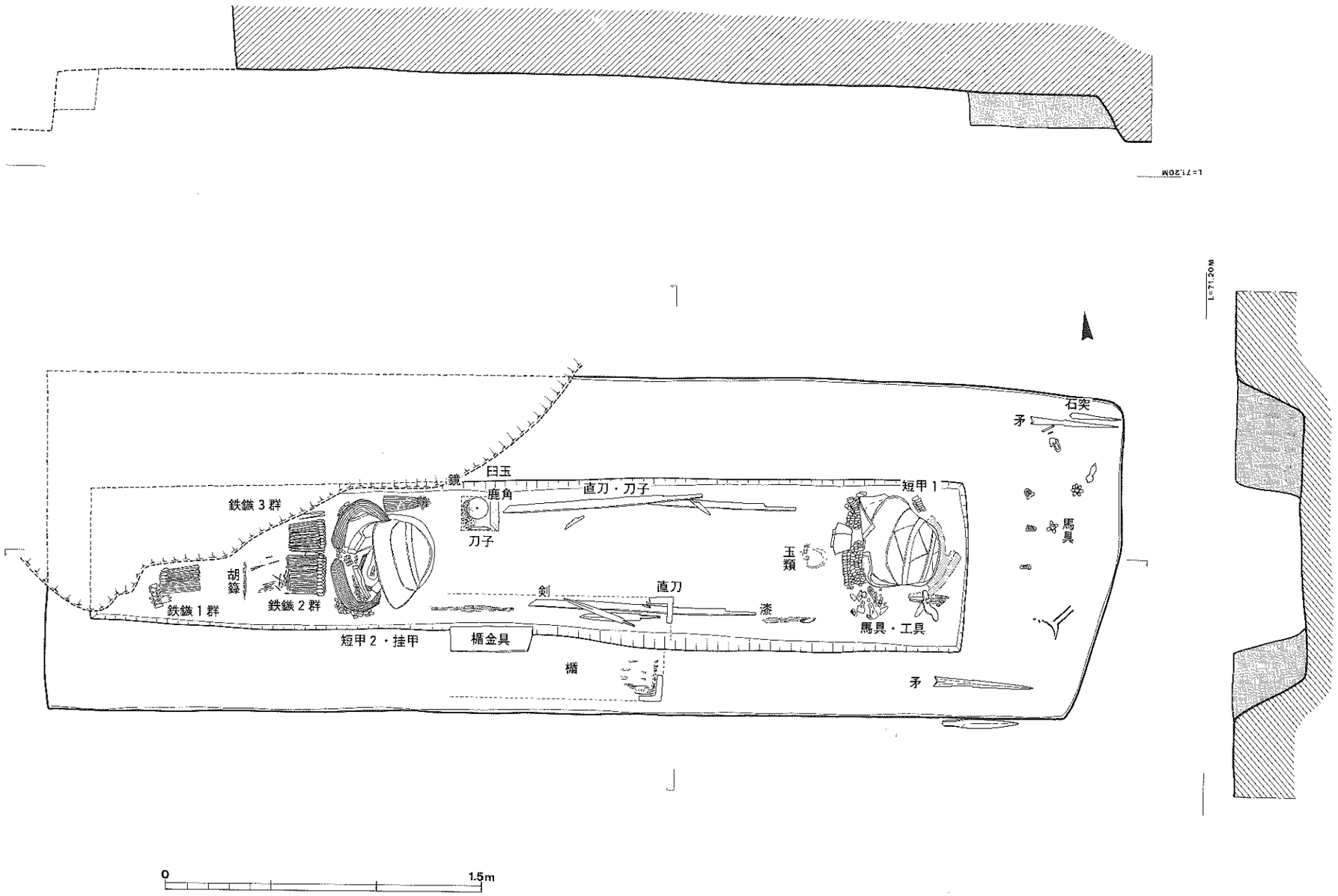
B　遺物の出土状況

遺物の出土位置は、大きく棺外と棺内に分けられ、棺内は更に東端部・西端部・中央部に分けられる。以下に出土状況を出土位置別に説明をする。

棺外　棺外での遺物は、墓壙東端部と中央部から出土した。

墓壙東端部では、南側に矛2本が刃を東に向けて置かれており、北側には矛1本と石突1本が同じく刃・先端を東に向けて置かれていた。両者の間部分に、鞍(くら)と鞦(しりがい)を中心とする馬具が認められた。

中央部分では、棺南辺ぞいに楯が1張置かれていた。楯は、革製漆塗りのものであったらしく、一部に漆膜が残り、綾杉文を認めることができた。この楯は、下辺両端に隅金具と中央部に長方鉄板の金具を装着しており、北側隅金具は、棺の陥没によって棺内に転落をしていた。


L=71.20M
L=71.20M
石突
矛
鏡
臼玉
鹿角
直刀・刀子
短甲1
鉄鏃3群
刀子
馬具
玉類
胡籙
剣
直刀
漆
鉄鏃1群
鉄鏃2群
馬具・工具
短甲2・挂甲
楯金具
楯
矛
0
1.5m

第65図　主体部実測図

棺内　棺内の遺物の配置状況は、東端部・中央部・西端部に分けられ、以下順に説明をする。

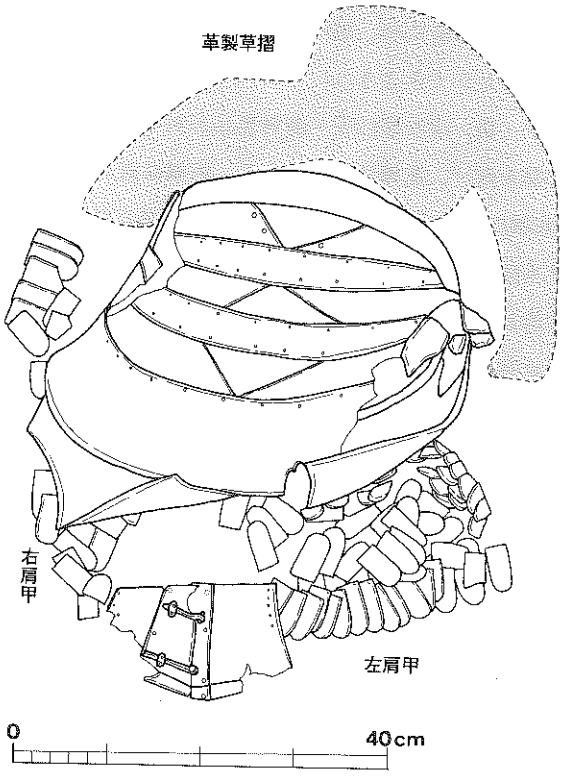
東端部では、短甲一式・三環鈴・馬具・農工具類・玉類が出土している。

短甲(1号短甲)は、前胴を棺内側に向け、棺陥没による土圧で内倒れした状態で検出された。また、頸甲と小札肩甲も、棺内側に転落をしていた。状況的に、頸甲・小札肩甲は、短甲に装着された状況で埋葬されていたものと見てよい。短甲取り上げ時に、短甲内より三環鈴が1個出土した。

短甲後側の棺底には、所々に細い鋸歯文を配す漆膜が広範囲に検出でき、ここに革製漆塗草摺と思われる付属具が置かれていたことが理解できた。しかし、漆膜の遺存状況は良好とは言い難く、いかなる形状のものか判断できない。

短甲の南側、すなわち左側胴に接して、馬具と農工具類が検出できた。

馬具は、やや東寄り(棺端側)にf字形鏡板を持つ轡(くつわ)一式が折りたたんだ状態で置かれており、西寄りに組合式辻金具等が複数まとまって置かれていた。面繋(おもがい)を中心とする馬具が棺内に副葬されたものと考えられる。



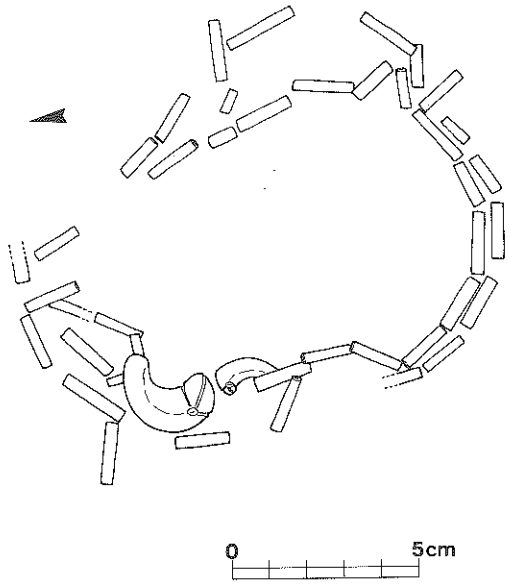
第66図　1号短甲出土状況実測図

農工具は、辻金具のまとまりといっしょに出土した。鉄斧4個・鉋2本・鎌5本が認められる。いずれも小型品である。

上記のものが置かれた本来の範囲は、東西40cm、南北50cm程と思われ、棺東端に寄せて副葬されていたものと理解できる。

玉類は、1号短甲のやや西側、すなわち棺内側で検出された。短甲前胴裾板と玉類中央部分との距離は、約30cm程である。

玉類は、勾玉2個と管玉38個からなり、直径12cm状の不整円形を描くように検出できた。管玉の穴どうしが向い合って弧状となる個所が認められるため、本来は紐に通されていたことはまちがいない。



第67図　玉類出土状況実測図

玉どうしの連なりを見ると、2連に配されたことが理解できる。勾玉は2個がまとまって西寄りで出土している。

状況的には、被葬者に着装されていた首飾りが、余り本来の位置を変えることなく遺存したものと考えてよい。

復元できる首飾りの直径は、12～13cm程である。これは、ほぼ現代人(身長155cm)の首直径に近い。したがって、この首飾りは胸に垂れることなく、被葬者の首周囲を飾っていたと判断できる。

前述したごとく、玉類の中心と1号短甲の前胴裾板までの間は約30cmである。被葬者の頭部はここに置かれていたこととなるため、棺内での被葬者の位置は、東を枕に、東側に寄せて横たえられていたとみることができよう。

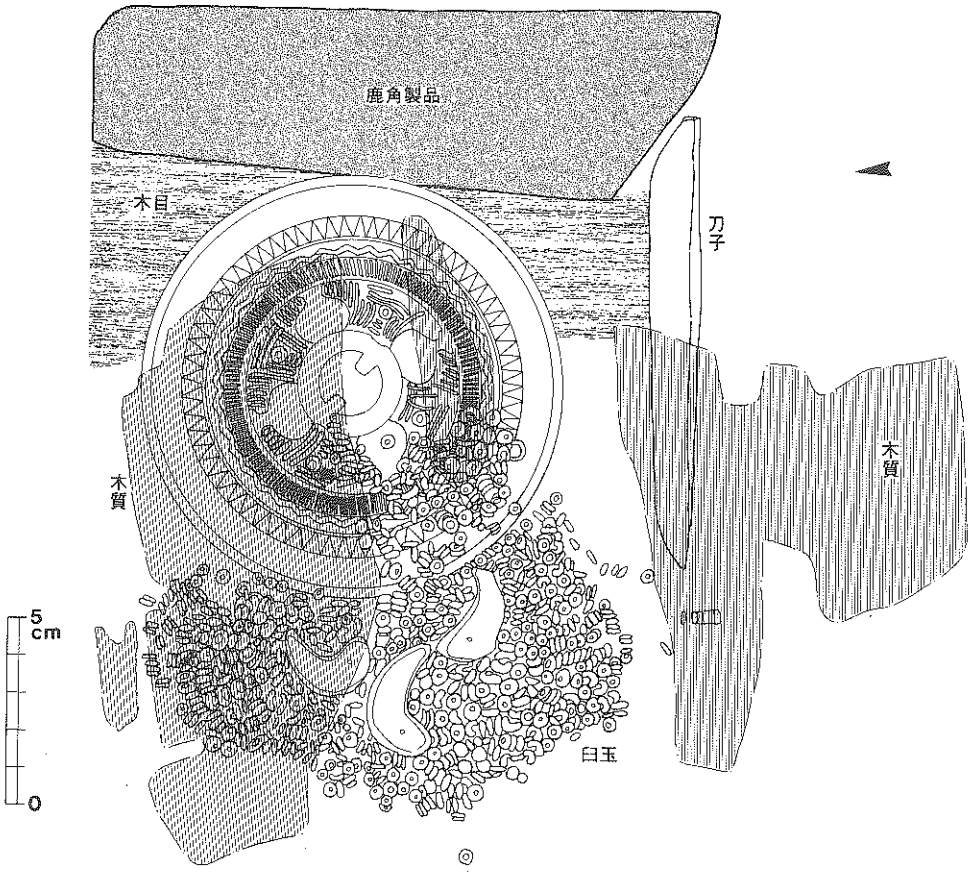
棺中央部での副葬品は、直刀・剣・刀子・鏡・滑石製臼玉・鹿角製品がある。

直刀・剣類は、人体が置かれた棺中心部を避け、北側に直刀2本が、南側に直刀1本と剣2本が切先を西に向けて置かれていた。北側の直刀2本には、それぞれやや大型の刀子が伴っており、南側の直刀には小型の刀子が2本伴っていた。直刀の刃は、すべて北向きである。

北側の直刀の切先側には、鏡・刀子・滑石製臼玉・鹿角製品が南北16cm、東西21cmの幅の中に集中して置かれていた。この一群の遺物は、鹿角製品と刀子の長軸が直角になることと、鏡下に遺存した木目が棺長軸に対して直行するところから考えて、四角い木箱に収納されていた可能性が高い。また、鹿角製品も、長方形の薄板状を呈しているところから、何かの道具というよりは、木箱の部材と考えた方が良い。木箱の大きさを遺物の状況から推測すると、一辺15cmの方形木箱となる。

鏡は、木箱の中央に鏡背面を上にして置かれており、鏡の上・下及び周囲には多量の滑石製臼玉と滑石製勾玉3個が認められた。臼玉の出土状況を詳細に見ると、穴どうしが密着して連なる部分を認めるため、本来は紐に通されていたことがわかる。刀子は、木箱の南辺にそって置かれていた。

鏡の上面、及びその周囲には、木質が遺存していた。木目は、棺長軸と並行し、遺物はその下で出土しているところから、木棺材の一部と見てよい。

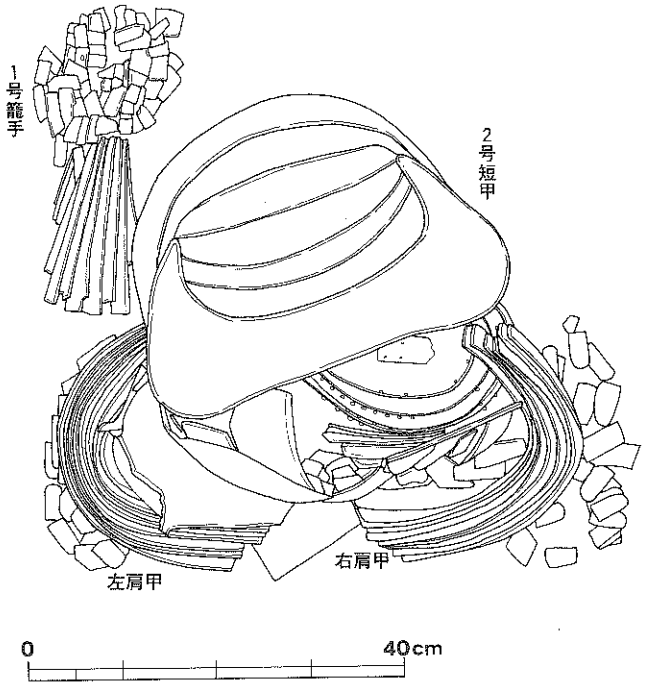


第68図　鏡付近遺物出土状況実測図

棺西端部での副葬品は、短甲一式・衝角付冑・挂甲・籠手・鉄鏃・胡籙・刀子・針などがある。

短甲(2号短甲)は、前胴を西側、すなわち棺外方に向け正立されていた。棺陥没による土圧で後胴が前倒れしており、短甲に装着されていた頸甲・肩甲は、それぞれ左右に転落をしていた。短甲内には衝角付冑と挂甲が収納されており、その状況については、京都大学で整理を行っていた中村徹也氏が既に報告をしているので、引用をしたい。[註54]

「さてこの短甲であるが、出土した時点では短甲の中に衝角付冑がすっぽりと入り込んでおり、そのうえ短甲の後胴が前方へ傾むいていたため短甲の胴内を詳しくみることが出来なかったが、遺物を整理する段階で衝角付冑を取り出してみると胴内に多数の小札が各段かなり整然とした状態でつまっていた。復元を考慮しながら小札をとりはずすと挂甲の腰部の段を構成する湾曲した長い小札の列が検出され短甲の胴内に挂甲1領をすっぽりとおさめたことが判明した。(中略)。この挂甲は少なくとも3種の小札で構成されている。湾曲した長い



第69図　2号短甲等出土状況実測図

小札の湾曲部に尾錠と方形の金銅製帯金具が原位置を保って残存しており、その資料的価値は高い。」

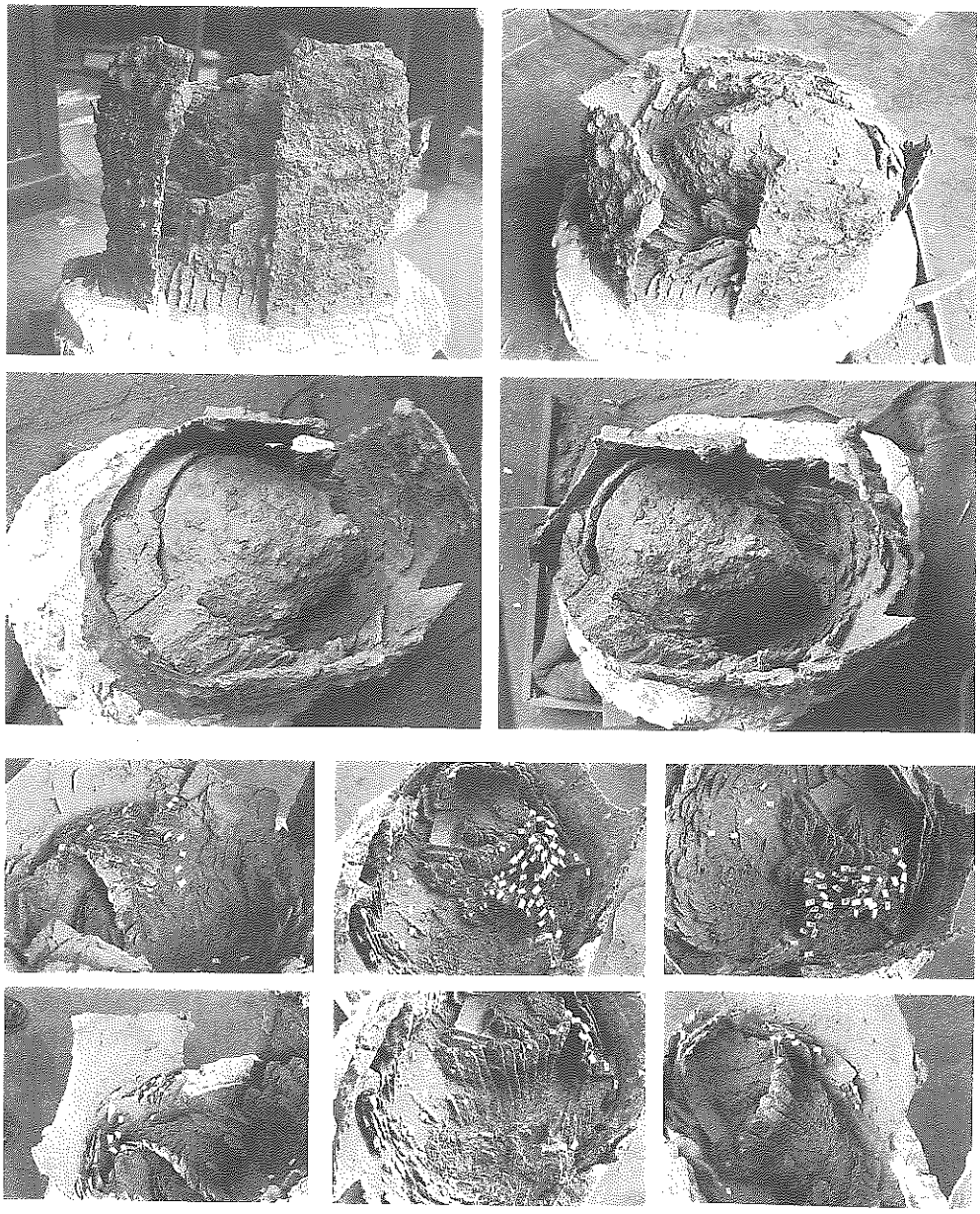
挂甲の出土状況については、上記の報文を報告にかえる。

籠手は、2号短甲の右側胴のやや東寄りに1号籠手が2個一対を一巻きにして置かれており、転落した右肩甲の下に2号籠手が2個一対を一巻きにして置かれていた。

鉄鏃は、2号短甲の西側に3群に分けて検出がされた。ちょうど鉄鏃の部分は、棺内まで盗掘が及んでおり、鉄鏃の配置状況からは、かつては4群の鉄鏃が副葬されていた可能性を充分推測できる。

鉄鏃1群は、棺西端に先端を西に向けて置かれており、平根式と長頸式とで構成されている。平根式は、南側にまとめて置かれている。北側については、盗掘で一部が失われている。1群での鏃数量は、約30本である。

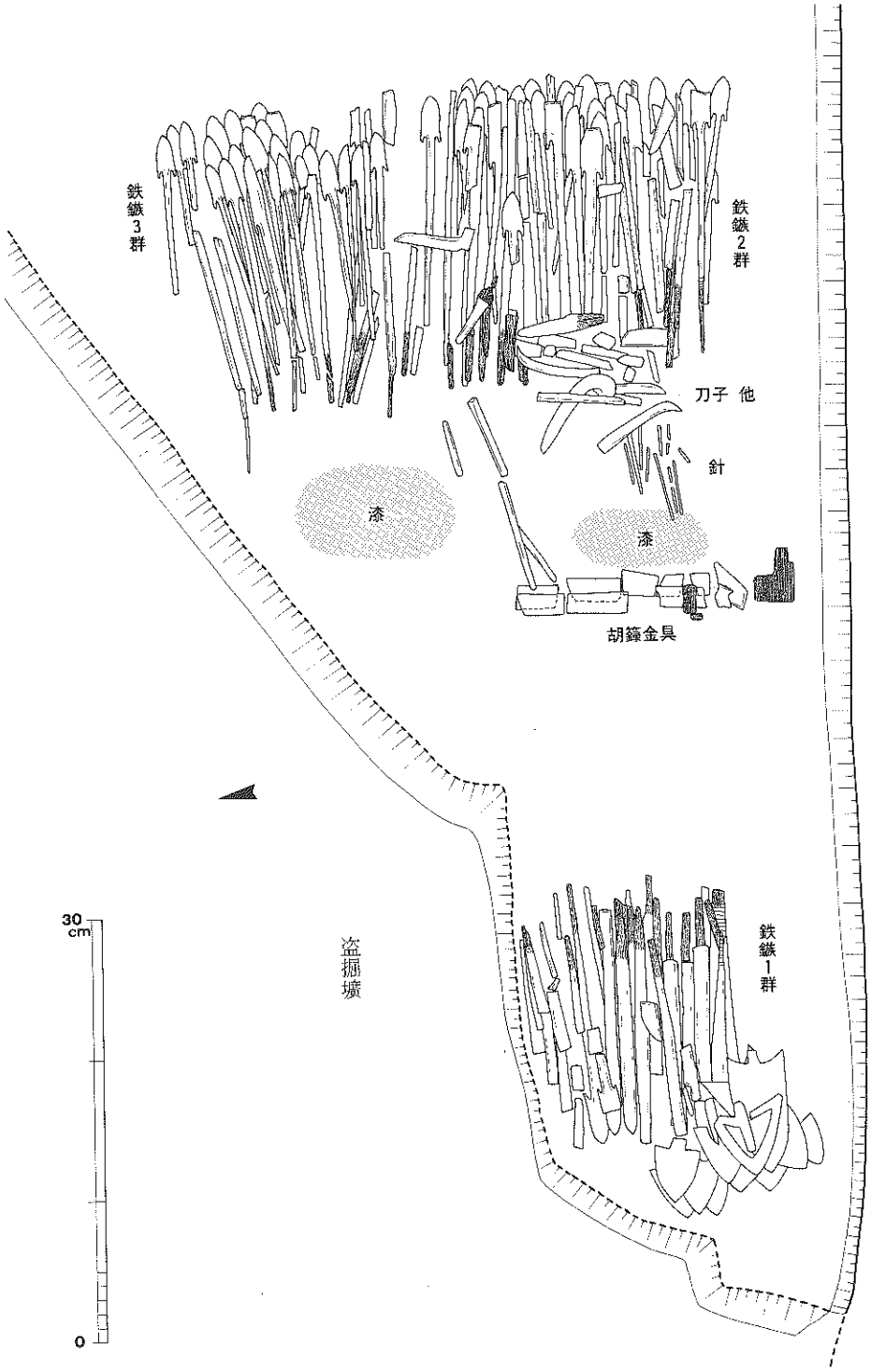
鉄鏃2群は、1群の東側に先端を東に向けて置かれており、長頸式のみにおいて構成されている。数量は判然としないが、概ね50〜60本の間と思われる。2群の茎先端前方には、鉄地金銅張りの胡籙金具が認められた。また、2群の茎から胡籙金具の間にかけては、刀子・ワラビ手刀子・針・不明鉄器が置かれていた。



第70図　2号短甲内の冑と挂甲

鉄鏃3群は、2群の横に同じく先端を東に向けて置かれており、長頸式約40本によって構成されている。

これら、3群の鉄鏃は、状況的にはすべて矢筒に装着されて副葬されたと判断して良く、鉄地金銅張りの胡籙金具が2群に伴うところから見て、他群も革製漆塗りの胡籙に入れられていたのであろう。部分的に残る漆膜は、その痕跡を示すと思われる。



第71図　鉄鏃出土状況実測図

3 遺　　物

本章では、南墳より出土した遺物について報告をする。出土場所は、主体部と墳丘斜面とがあるが、墳丘斜面出土の埴輪については、個体が不明であり、主体部出土遺物について説明を加えることとなる。また、近世陶磁器類[註55]については割愛する。

南墳主体部の遺物は、一部を除いてほぼ埋葬時の状況を留めていると判断してよい。

A 遺物の品目と数量

出土位置	名　称	出土数	現存数
(棺　内)	四葉文鏡	1 面	1 面
	硬玉製勾玉	2 個	2 個
	碧玉製管玉	38 個	20個他残欠
	滑石製勾玉	3 個	3 個
	滑石製臼玉	2348個	2348個
	鹿角製品	1 個	0
	三環鈴	1 個	1 個
	短　甲	2 領	2領　残欠共
	挂　甲	1 領	1領(小札629枚及び残欠)
	衝角付冑(錣付)	1 領	1 領
	頚　甲	2 領	2領　残欠共
	肩　甲	2 組	2 組
	籠　手	2 組	2組　残欠共
	革草摺	1 領	取り上げ一括
	直　刀	3 本	1 本
	剣	2 本	2 本
	鉄　鏃	約120本	取り上げ一括
	胡籙金具	1 個	1 個
	轡	1 式	1 式
	辻金具	7個？	7 個
	鉸　具	1個以上	1個他残欠
	鉄　斧	3 個	2 個
	鎌	5 本	4 本
	鉇	2 本	2本　残欠共

出土位置	名　称	出土数	現存数
(棺　内)	針	8本以上	12片
	刀　子	7　本	7　本
	ワラビ手刀子	4本以上	8本　残欠共
	不明鉄器	不　明	4　本
(棺　外)	矛	3　本	3　本
	石　突	1　本	1　本
	楯	1張(金具3付)	取り上げ一括(金具2)
	鐙	2　個	2個　残欠共
	杏　葉	1　個	1　個
	雲　珠	1　個	1　個
	辻金具	1　個	1個(環状式)
	鞍金具	2　個	2個　残欠共
	鉸　具	2　個	2　個
(不　明)	馬具(釣舌金具)	不　明	1個(棺内か)
(そ の 他)	鉄　片	若　干	若　干

B　鏡

四葉文鏡(第72図)　棺内木箱中より出土した青銅鏡で、倭鏡である。

鏡背の文様は、内区には鈕周囲に葉文を4個所配し、葉文の間に乳を施す。外区は、櫛歯文、複線波紋、外向陽刻鋸歯文の順に施文され、斜縁の外縁に至る。

鏡面は外反りし、凸面鏡状となる。鈕は、半球形で不整円形の鈕孔をもつ。

鏡の直径は11.0cm、内区径5.3cm、高さ1.2cm、縁の厚みは0.5cmを測る。

錆により鏡背文様が一部不鮮明な部分はあるが、概して残りは良い。

C　環　鈴

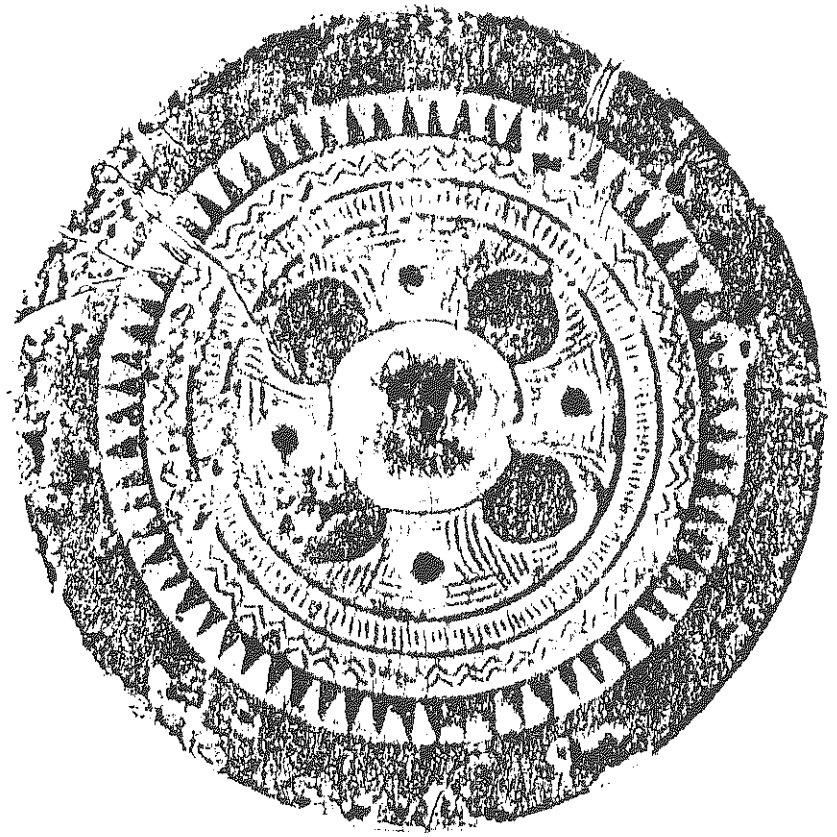
三環鈴(第73図)　1号短甲胴内より出土した。青銅環に3個の銅鈴を付すものである。

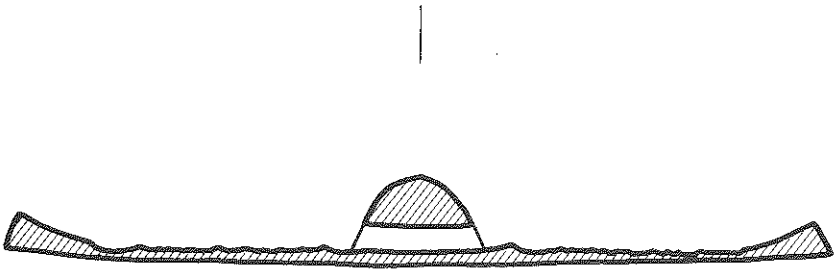
環は、外径5.4cm、内径3.0cmを測り、断面は隅丸の菱形を呈する。

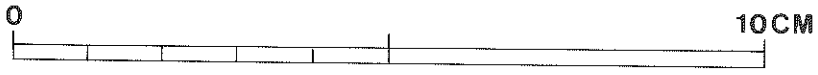
鈴は、直径5.2cm程のやや偏球形のもので、環を三等分した位置に、環中程まで食い込み付されている。鈴には、幅0.6cm程の割れ目が入れてあり、鈴内部に直径2cm程のチャートの小石が認められる。

鈴の一部に錆化による欠損を認めるが、概して残りは良い。

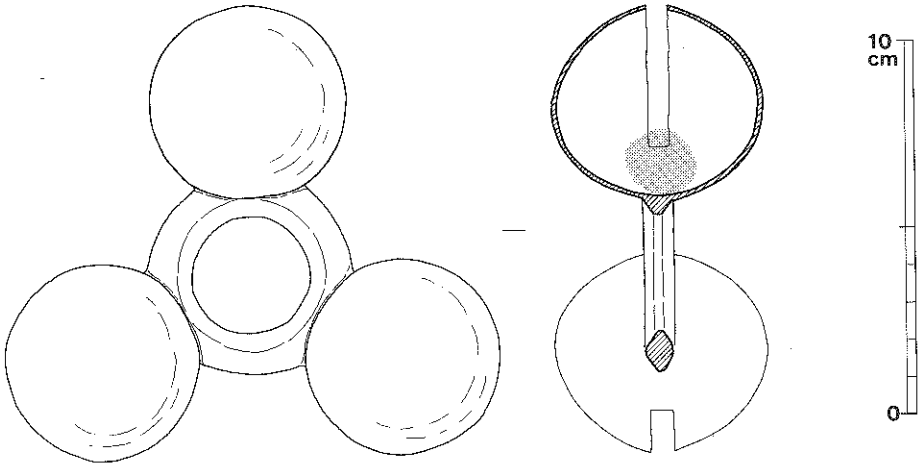
三環鈴を振り動かすと、「ガラガラ」という金属音を発する。低音気味の音色で、現代の鈴の音色と大分違う。



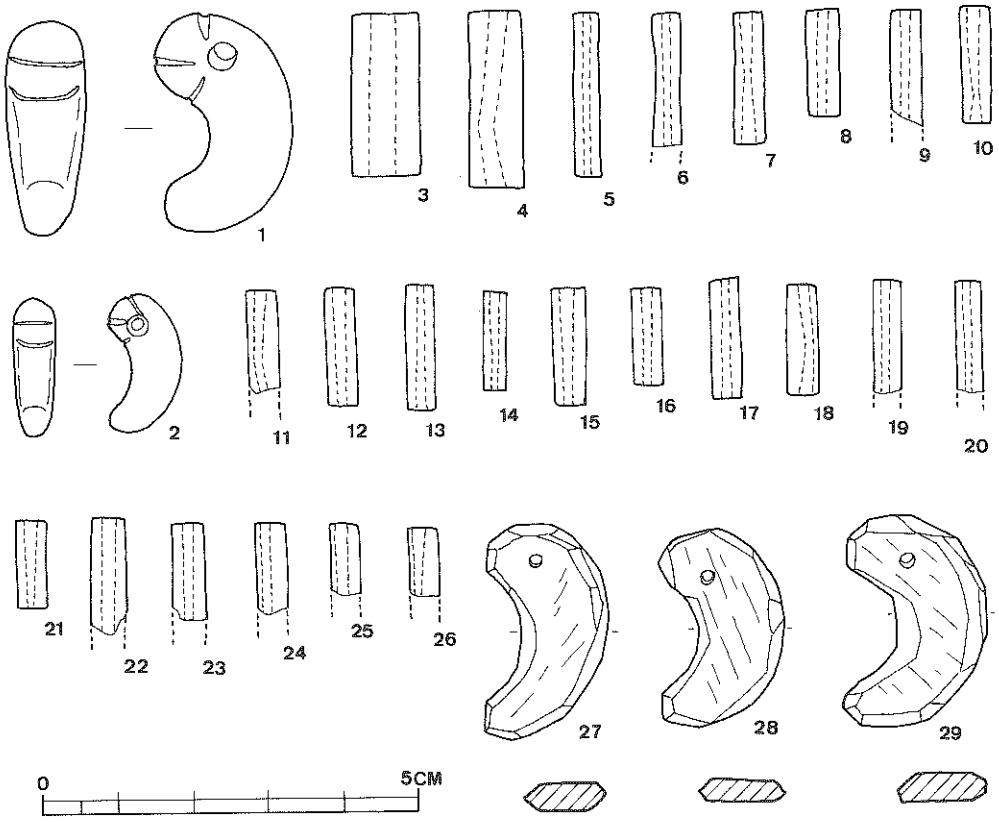




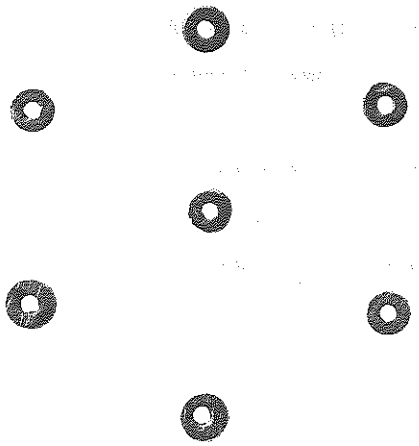
第72図　鏡拓影・断面図



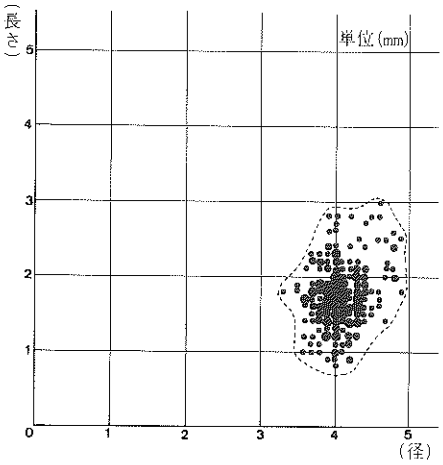
第73図　三環鈴実測図



第74図　玉類実測図



第75図　滑石製臼玉



第76図　滑石製臼玉法量分布図

D　玉　　類

南墳出土の玉類は、硬玉・碧玉を使用した装飾品としてのものと、滑石を使用した非装飾的なものとがある。前者は、被葬者の首飾りとして用いられたものであり、後者は、棺内木箱中より鏡と伴に出土した。

硬玉製勾玉(第74図１・２)　硬玉の勾玉が２個出土している。１は、長さ2.9cm程のもので、丁字頭である。紐孔は、0.3cmを測る。表面は平滑に仕上げられており光沢をもつ。色調は、淡青色である。

２は、長さ1.8cm程の小型のもので、丁字頭である。紐孔は、0.2cm程を測る。表面は平滑に仕上げられており光沢をもつ。色調は、透きとおった淡緑色に白い斑文をもつもので、ヒスイの良質な部分を使用した勾玉である。

碧玉製管玉(第74図３～26)　碧玉の管玉が38個出土しており、実測可能な個体が23個、現在一連としてあるものが20個である。

管玉は、径0.9cm程の太いものと、径0.4cm程の細いものがある。

太いものは、１・２の２個体で、長さは２cm程である。淡青色を呈し、表面を平滑に仕上げられている。硬質な石材を使用している。両面穿孔である。

細いものは、５～26で、長さは1.5cm程のものが多い。淡青色を呈し、硬質な石材を使用するものと軟質なものの２者がある。両面穿孔である。

滑石製勾玉(第74図27～29)　滑石の粗製勾玉が３個出土している。いづれも偏平で、側面に整形痕跡をよく残す。また、表面にも磨きの細かい傷を留める。長さ３cm程を測る。

滑石製臼玉(第75・76図)　2348個が出土した。径は４mm程のものが多く、長さは１～２mm程のものが多い。偏平な不製円形な玉である。中央に直径１～２mm程の孔をもち、表面に荒磨きの傷を残す。

北墳西槨の臼玉に比べて、法量の集中度が高い。

E　甲　　冑

衝角付冑１、錣１、短甲２、挂甲１、頸甲２、肩甲２、籠手２、革製草摺１が出土している。錣は冑に、肩甲は頸甲にそれぞれ装着され一体となって機能する付属具であるが、ここでは個別に取り扱うこととする。

横矧板鋲留衝角付冑(第77図)　２号短甲胴内に挂甲とともに収納されていた鉄製の冑である。

冑の鉢は、伏板・腰巻板・胴巻板・二段の地板・竪眉庇の各部で構成されている。鉢の全長27.0cm、幅18.8cm、高さ16.8cmを測る。各部は、鋲によって固定されている。鋲は、脱落したものが幾分か認められる。

伏板は、全長22.5cm、頂部最大幅11.0cm、先端部幅4.9cmを測り、柄子状を呈する。伏板頂部中央には小孔が４孔穿たれ、三尾鉄が装着されている。

腰巻板は、幅3.7cmを測る２枚の鉄板からなり、衝角部と後ろで留められている。

胴巻板は、腰巻板と同幅の鉄板で同様に固定される。

地板は、第一・第二段とも横矧板であり、巻板に下重ねされ同様に留められている。地板の幅は、各段とも4.5cm前後を測る。

竪眉庇は、衝角底板と一体的に造られており、腰巻板に上重ねされ留められている。竪眉庇の幅は２cm程、長さは推定12cm程である。

鋲は、径0.5cm程の半円頭部をもつもので、概ね1.5cm間隔で配されている。

本冑の鉄板使用枚数をまとめると、地板４枚・伏板１枚・腰巻板(２)枚・胴巻板２枚・竪眉庇１枚の10枚となる。そして、これに三尾鉄と後述の錣が付く。

錣(第78図)　上述の冑に装着され折りたたまれた状態で出土した錣である。鉄板を馬蹄形に曲げたもので、４段重ねである。

現在は、折りたたまれた状態で錆着し、右側の３分の１を失う。

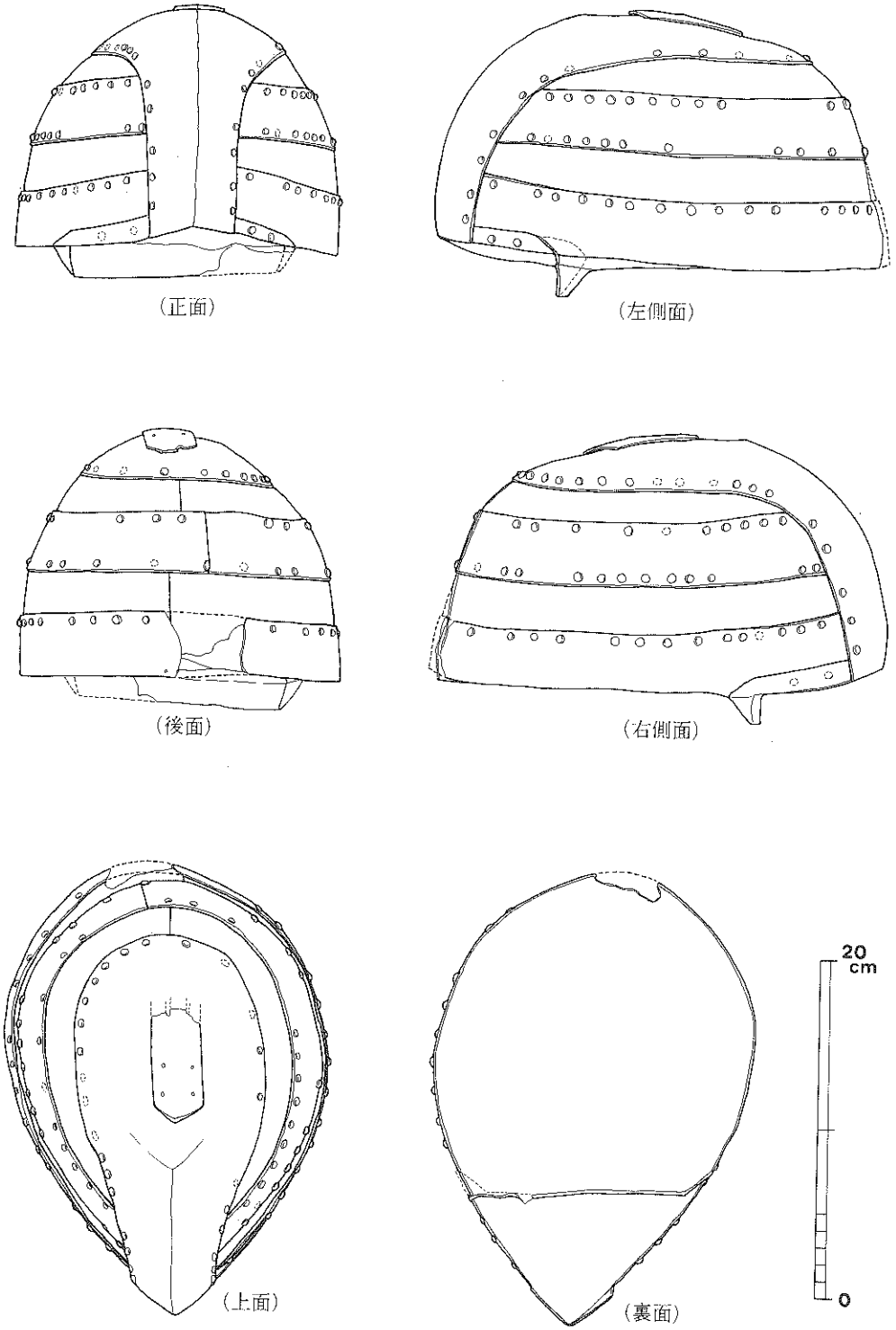
第一段目は、最下段(外側)に付けられるもので、一部しか遺存しない。幅は4.5cmを測り、下端が外方に折り曲げられる。また、後部中央下側には、浅い弧状の穿り込みをもつ。

第二段目は、幅4.2cm程を測り、先端部を外方に折り曲げる。先端部には、縦に小孔が５孔穿たれている。

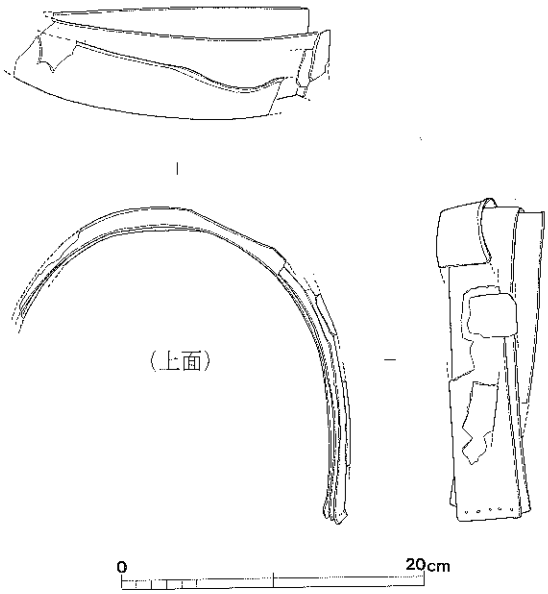
第三段目は、幅4.2cm程を測り、同じく先端部を外方に折り曲げ、先端部に縦に小孔を５孔穿つ。

第四段目は、幅4.5cm程を測り、各段より若干幅広い。また、先端部を外方に折り曲げる点や縦に小孔を５孔穿つ点は各段と同じである。

錆化が著しいため、各段を綴じた紐孔は確認できない。



第77図　衝角付冑(2号短甲内)実測図



第78図　衝角付冑付属鐙実測図

三角板横矧板併用鋲留短甲(第79図上)　棺内東端より出土した短甲であり、1号短甲と仮称する。錆化のため、前胴裾部と後胴長側3段目の大半を失う。全体的にも錆化による破損が認められたが、現在は、前胴の左右と後胴及び裾板の4部分に分けて保存処理・復元を行い、台に固定している。実測図は保存処理前のものである。胴内より三環鈴が出土した。

復元高は、前胴で37cm程、後胴で44cm程を測る。幅は、前胴押付板部で40cm程、後胴押付板部で46cm程を測る。前胴に横矧板、後胴に三角板と横矧板を使用する。

前胴は、竪上3段、長側4段からなり、右前胴が開閉する。竪上第一段は、幅7cm程の鉄板で、右前胴は脇で蝶番板(ちょうつがいいた)に下重ねされ、左前胴は後胴押付板に上重ねされる。

竪上第二段は、幅5cm程の小型の鉄板で、ワタガミ受緒を結ぶ小孔が2孔認められる。

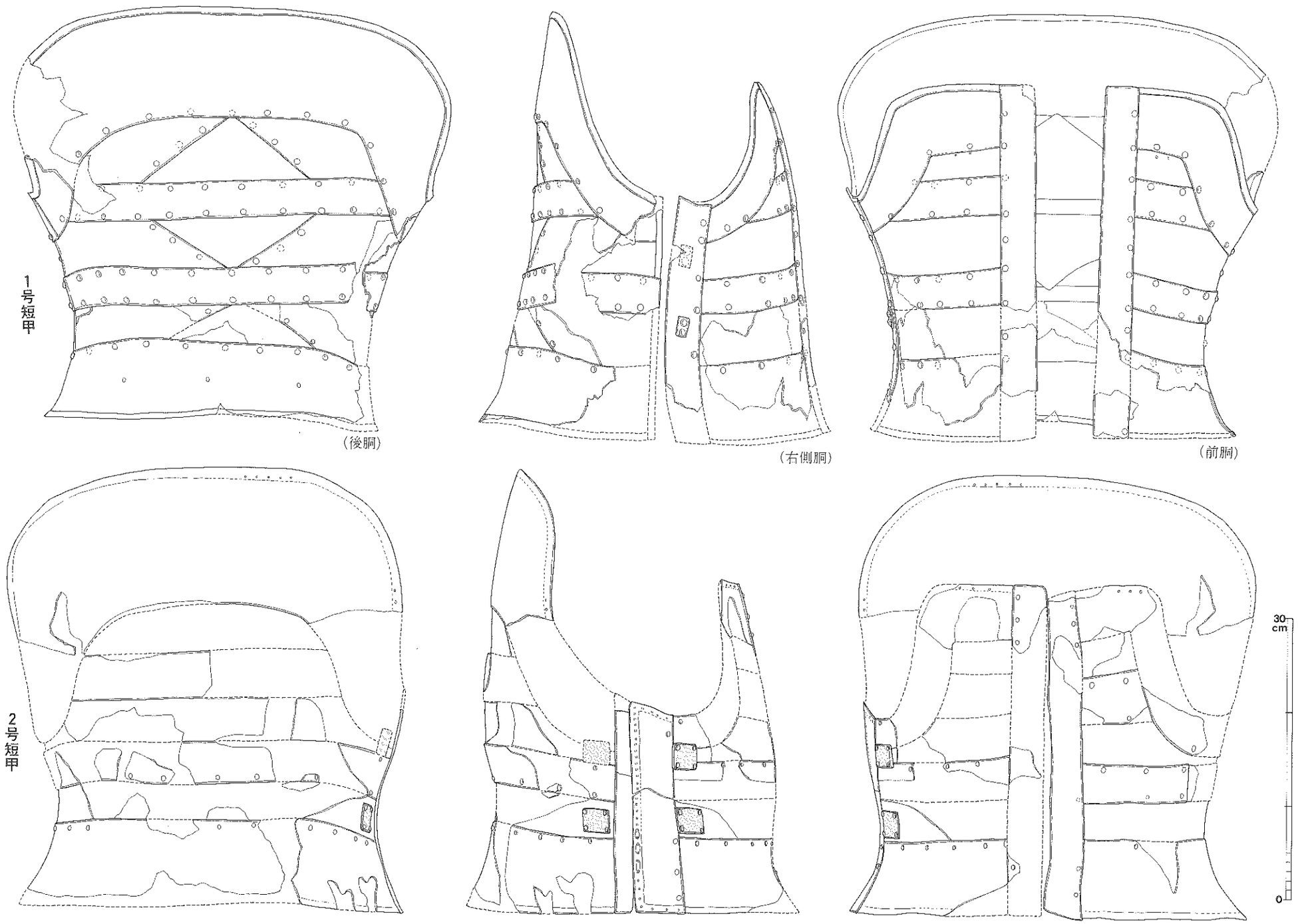
竪上第三段は、幅4cm程の帯金である。左右脇での重ねは第二段に等しい。

長側第一段は、幅8cm弱の横矧板で、右前胴では脇で蝶番板に下重ねされ、左前胴では、後胴長側板に上重ねされる。

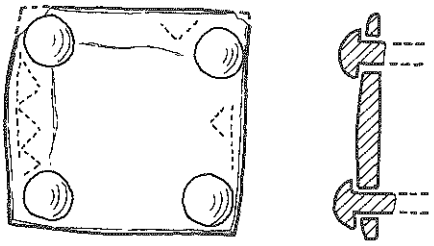
長側第二段は、竪上第三段と同様な造りであり、長側第三段は、長側第一段と同様な造りとなっている。長側第四段、すなわち裾板は、大半を失う。

引合せ板は、幅3.7cm程の鉄板で、蝶番板も同幅の鉄板である。後者には、長方形2鋲式の蝶番金具を付す。また、竪上第一段には鉄包覆輪を施す。

後胴は、竪上3段、長側4段からなる。竪上第一段は、幅12cm程の鉄板で鉄包覆輪を施す。後胴竪上第二段・長側第一・三段(地板)は、それぞれ1枚の三角板と横矧板2枚で組み合わ



第79図　1号・2号短甲実測図



（原　　寸）

第80図　2号短甲蝶番実測図

されており、本例の特色となっている。三角板は、他2枚の地板に下重ねされる。

竪上第三段・長側第二段の帯金は、幅4㎝程を測る。

長側第四段、すなわち裾板は、幅7.5㎝を測り、下開き気味に外反りする。端部は鉄包覆輪を施す。また、中程には小孔が一定間隔で3孔見られる。本例に伴う革製草摺を装着した孔と思われる。

部分は、すべて鋲留めされ、鋲は半円頭形のものである。

このような、三角板と横矧板を併用する鋲留短甲は、類例が少なく、大阪府岬町西小山古墳、奈良県大宇陀町後出3号墳、長野県飯田市新井原11号墳、千葉県君津市八重原1号墳を含め5例程を知るにすぎない。[註56]

横矧板鋲留短甲（第79図下・第80図）　棺内東側で出土した短甲で、2号短甲と仮称する。2号短甲内には、挂甲と衝角付冑が収納されていた。

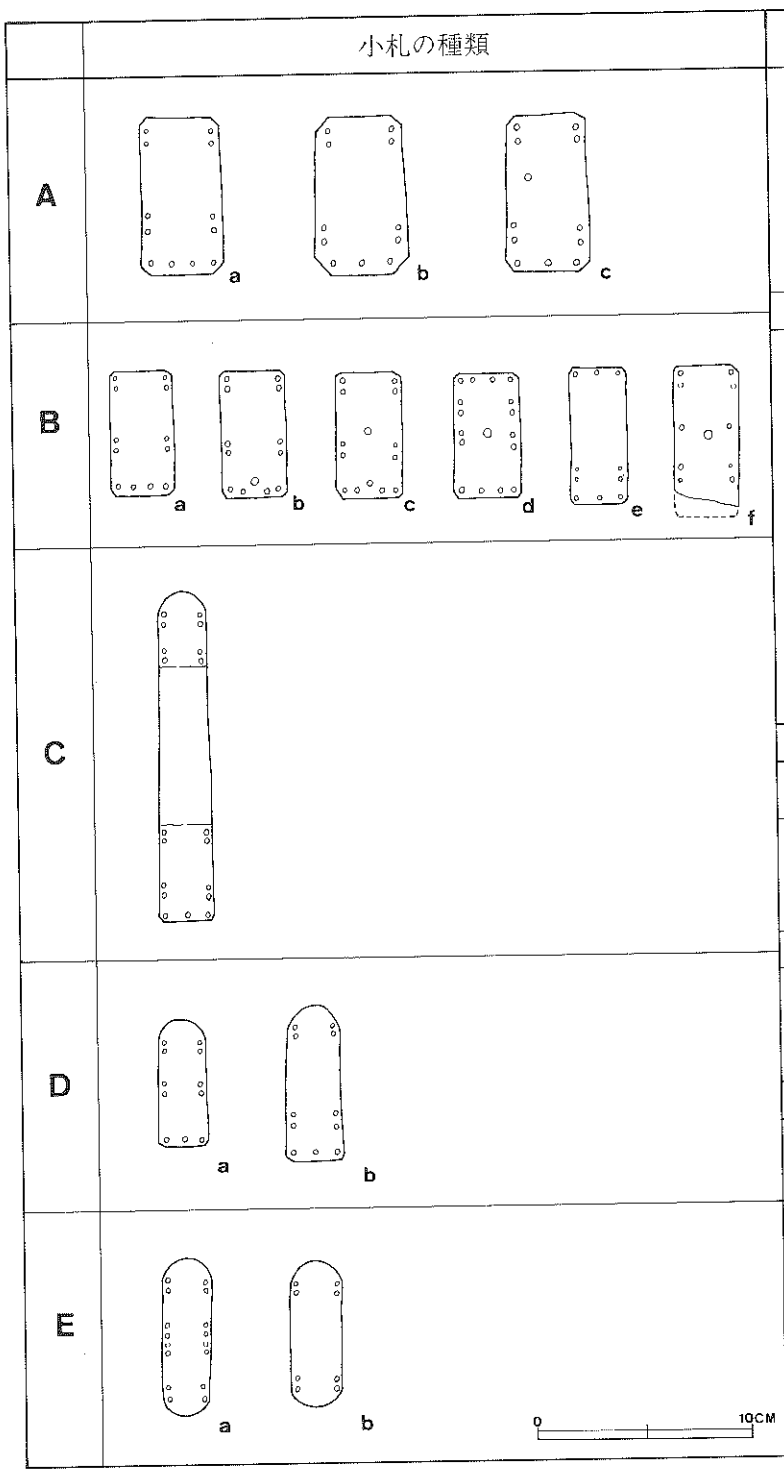
錆化が著しかったことから、取り上げ時の石膏取りはずしと、挂甲の取りはずしの作業時に破片化した。[註57]現在は、破片を樹脂で固定し保存処理を行い、概ねの旧状に復元をしている。

2号短甲の復元高は前胴で37㎝、後胴で47㎝、前胴押付板幅26㎝、後胴押付板幅42㎝を測る。図示した実測図は、復元後の実測である。

本例は、右前胴開閉式の鋲留短甲で、地板は横矧板である。各部は鋲留めされるが、錆により鋲の位置はほとんど判読できない。前胴は、竪上3段、長側4段、後胴も竪上3段、長側4段で構成されている。蝶番（ちょうつがい）は、列点鋸歯文を四辺にめぐらす鉄地金銅張方形4鋲式金具を2対装着する。その内2個は、短甲本体に付着しており、1個は脱落している。[註58]第80図に図示した蝶番金具は、脱落しているものである。他1個は不明。

押付板・蝶番板の端には小孔が穿たれており、覆輪が施されている。覆輪の種類は確認できないが、一部に残る痕跡から考えて、革包覆輪の可能性が高い。

挂甲（第81～83図）　2号短甲の胴内に折りたたまれて収納されていた。京都大学内での整理作業時に、一部の小札（こざね）の取りはずしが実施されたが、小札の錆着が著しく、塊となっている状態から整理作業を再開した。保存処理にあたっては、錆の進行をおさえることを主目的とし、まず2号短甲と挂甲とを分離し、挂甲に関しては、塊から小札をなるべく切り離すようにした。小札は、かなり錆化していた。



種類		枚数
A	a	73
	b	17
	c	1
	不明	31
計		122
B	a	24
	b	16
	c	6
	d	3
	e	3
	f	1
	不明	121
計		174
C		44
D	a	169
	b	64
計		233
E	a	1
	b	1
計		2
円頭片		51
合　計		626

※他に破片品が約1.5kg有り。

第81図　挂甲小札分類図

挂甲の小札を種類別に分け、それぞれの現状で確認できる枚数を数えたのが第81図である。

小札A類(第82図1～8)は、幅4㎝程、長さ7㎝程の四隅を切り落した長方板で、上辺・側辺を内に打ち返し、下辺を外に打ち返している。穿孔の数・位置によって、さらにa～cの3種類に分けられる。量的に最も多いのは、下辺が4孔のAa類である。Ac類は、Ab類に、もう一孔を穿ったもので、おそらく引合せの紐を通した小札と思われる。A類の確認数は122枚である。

小札B類(第82図9～16)は、幅3㎝程、長さ5.5㎝程のA類より一回り小さい長方板である。辺の打ち返しはA類に等しい。穿孔の数・位置によって、さらにa～fの6種に分けられる。確認できる中で、量的に多いのは、Ba類とBb類である。しかし、銹の進行や破損で小分類が不可能なB類が圧倒的に多いため、この量が、直ちに本来の小分類別の使用割合を示すと判断するには危険である。B類の確認数は174枚である。

小札C類(第83図17～21)は、中程が湾曲するもので、腰札と見てよい。単品で全体を窺えるものはなく、破片化するか銹着し塊となっている。上辺が円頭形となる細長い小札である。全長15㎝程、幅2.5㎝程を測る。腰札の一部には、金銅製方形帯金具(21)が付着している。[註59] 帯金具の三辺には波状文が確認できる。C類の確認数は44枚である。

小札D類(第83図25～32)は、上辺が円頭形となるもので、幅2.5㎝程、長さ6㎝程を測る。D類には、同様な形でやや長いもの(32)があり、これをDb類とした。D類の確認数は233枚である。

他に上・下辺とも円頭形となる小札が少数あり、E類とした。また、破片化したり、銹着し銹塊となっているものが整理箱1箱(1.5㎏)ある。

さて、このような小札の状況と短甲収納状況とを考え合わせると、各類小札は挂甲の下記部位を構成していたと想定できる。

A類……竪上を中心。

B類……長側を中心。

C類……腰札。

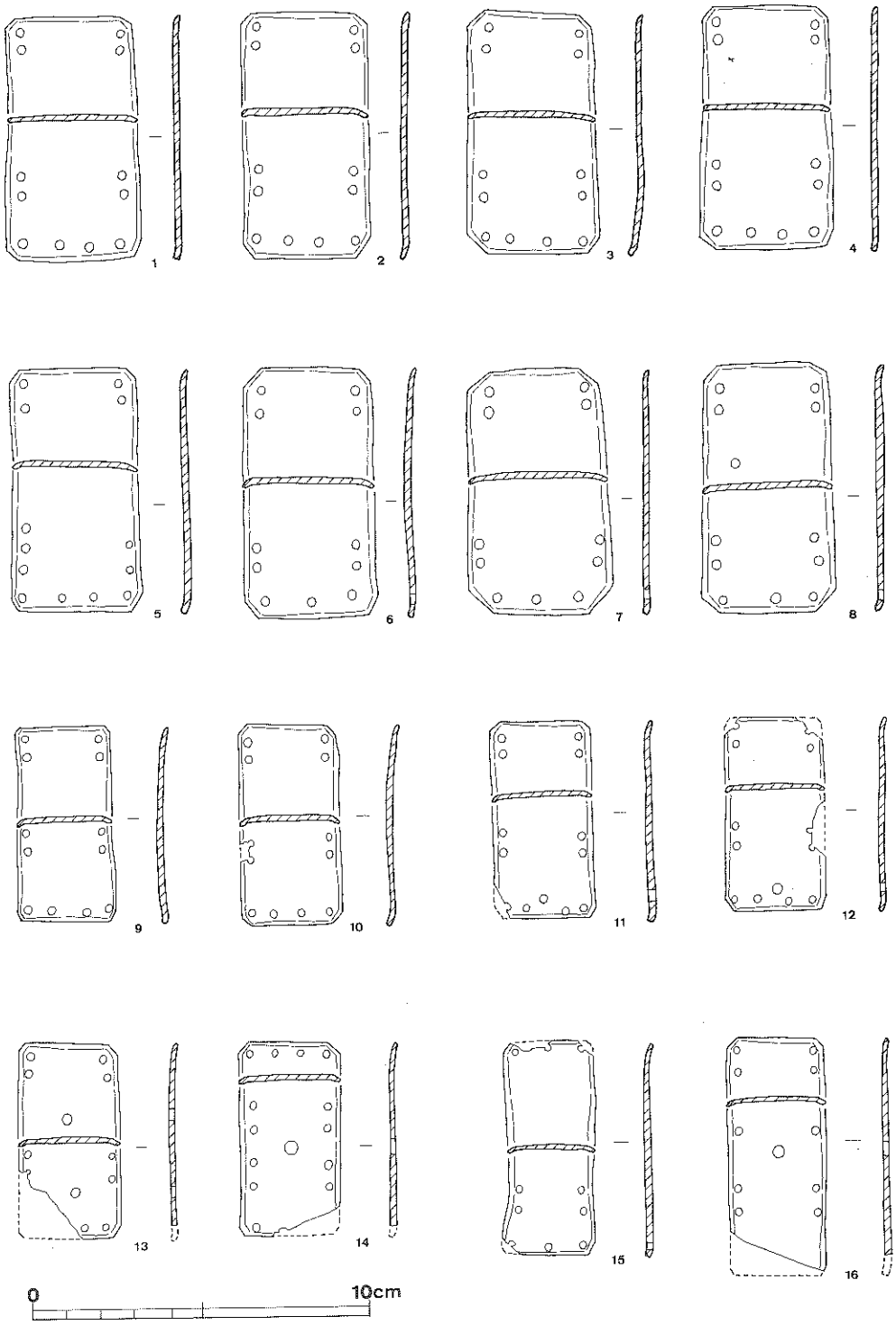
Da類……草摺。

Db類……草摺裾。

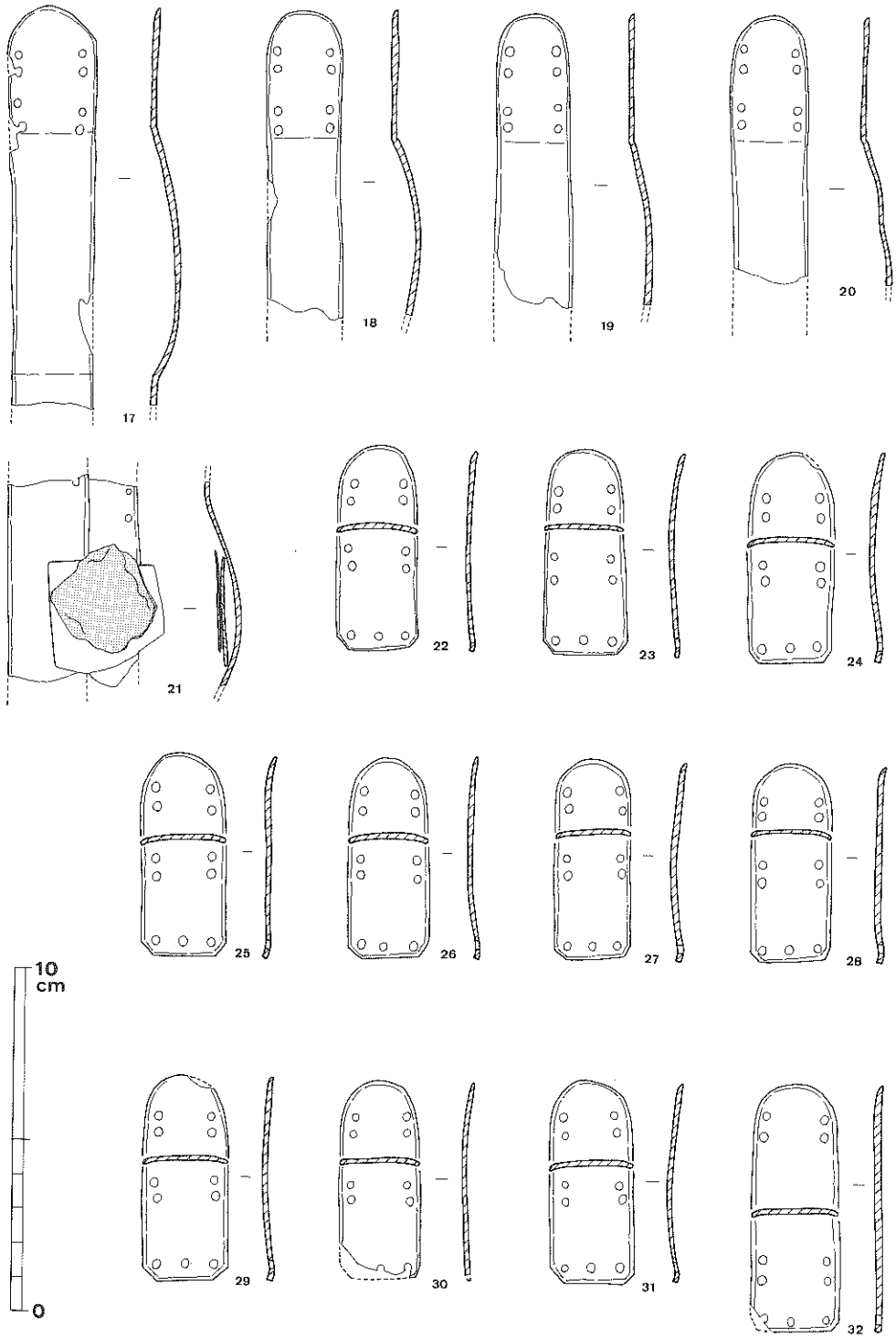
E類……不　明。

A・B類については、多くが京都大学内での整理時に取りはずされており、概ね本来の枚数に近いと判断できる。C・D類については、銹化の進んだものが多く、分類不可能な小札片中にまだ多くの枚数が含まれる可能性は高い。

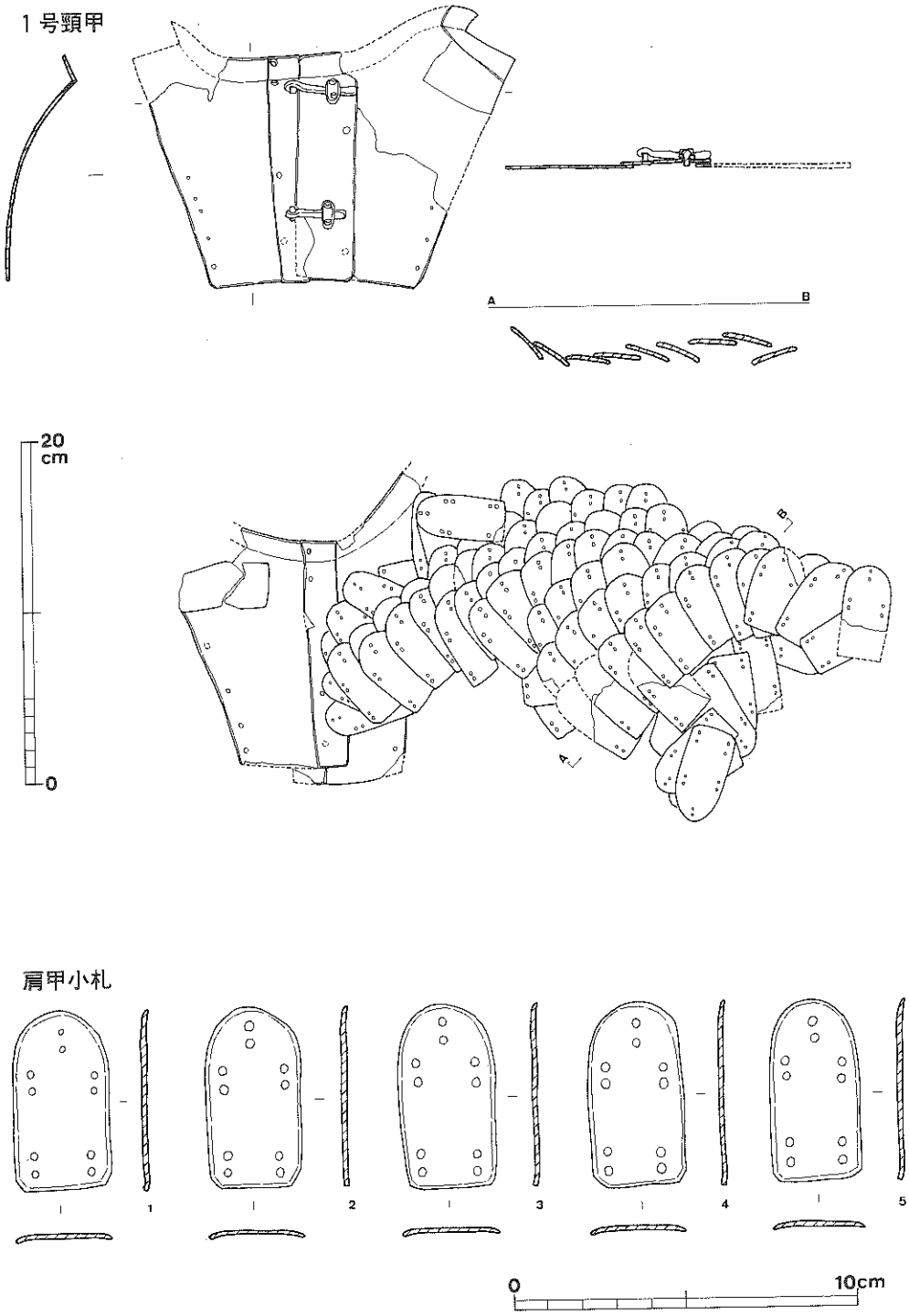
以上の小札の状況をみると、本例は、胴丸式挂甲1領分を想定できる。



第82図　挂甲小札A・B類実測図



第83図　挂甲小札C・D類実測図



第84図　1号頸甲・肩甲実測図

1号頸甲・肩甲(第84図)　1号短甲に付属する。頸甲と肩甲は、多くの部分が出土状態のままで石膏にて取り上げられている。[註60]

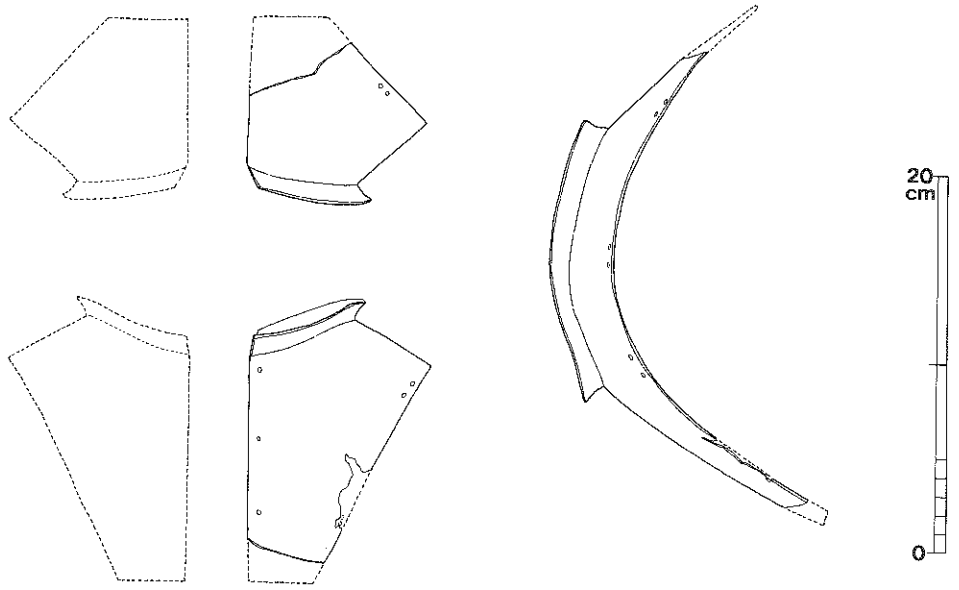
頸甲は、鋲留打延式頸甲である。破損により全形を窺うことができない。正面形状は、逆台形となり、上部中央に首通しの円孔をもつ。円孔周囲は、高さ1㎝程の襟となる。前後に鋲留された引合せ板をもつ。片面の引合せ板には、長方形2鋲式金具に留められた鍵壷をもち蝶番としている。

肩甲は、頸甲の左右にそれぞれ装着されており、小札を綴じた小札肩甲である。左肩甲が出土状態のままで現存する。出土状態から肩甲の小札使用状況を見ると、小札は片側12枚9段で構成されている可能性がある。小札は、上辺を円頭形に、下辺を隅切りした直線にするもので、幅3㎝程、長さ5㎝程を測る。小札の構成が上記のとおりとすると、小札の総枚数は216枚となり、現存数もこれにほぼ近い。

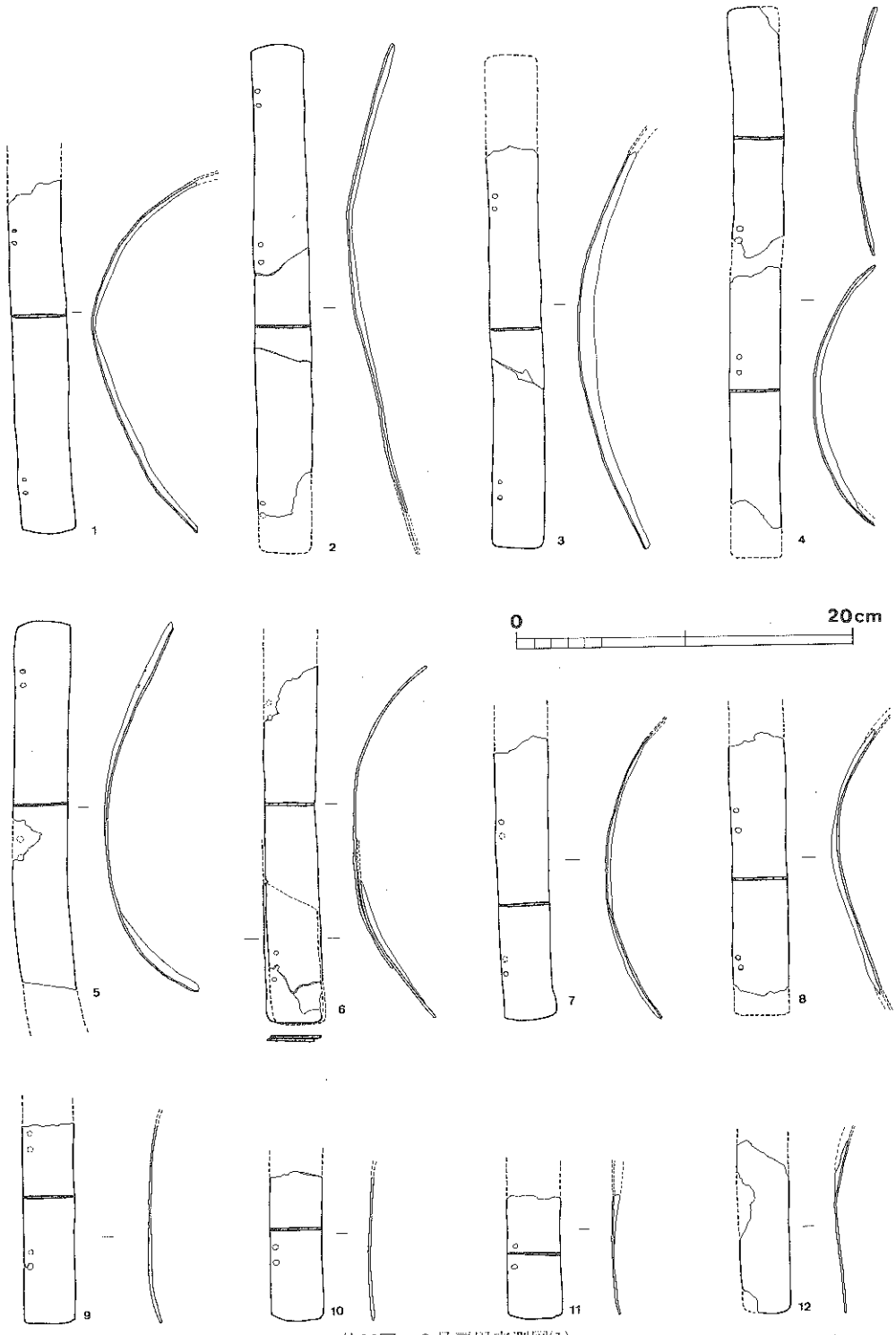
2号頸甲・肩甲(第85～87図)　2号短甲に付属する頸甲と肩甲である。

頸甲は、打延式のもので、左側の一部が現存する。正面形状が逆台形となるものである。襟の高さは1㎝程であり、側辺に肩甲を装着する小札を穿つ。

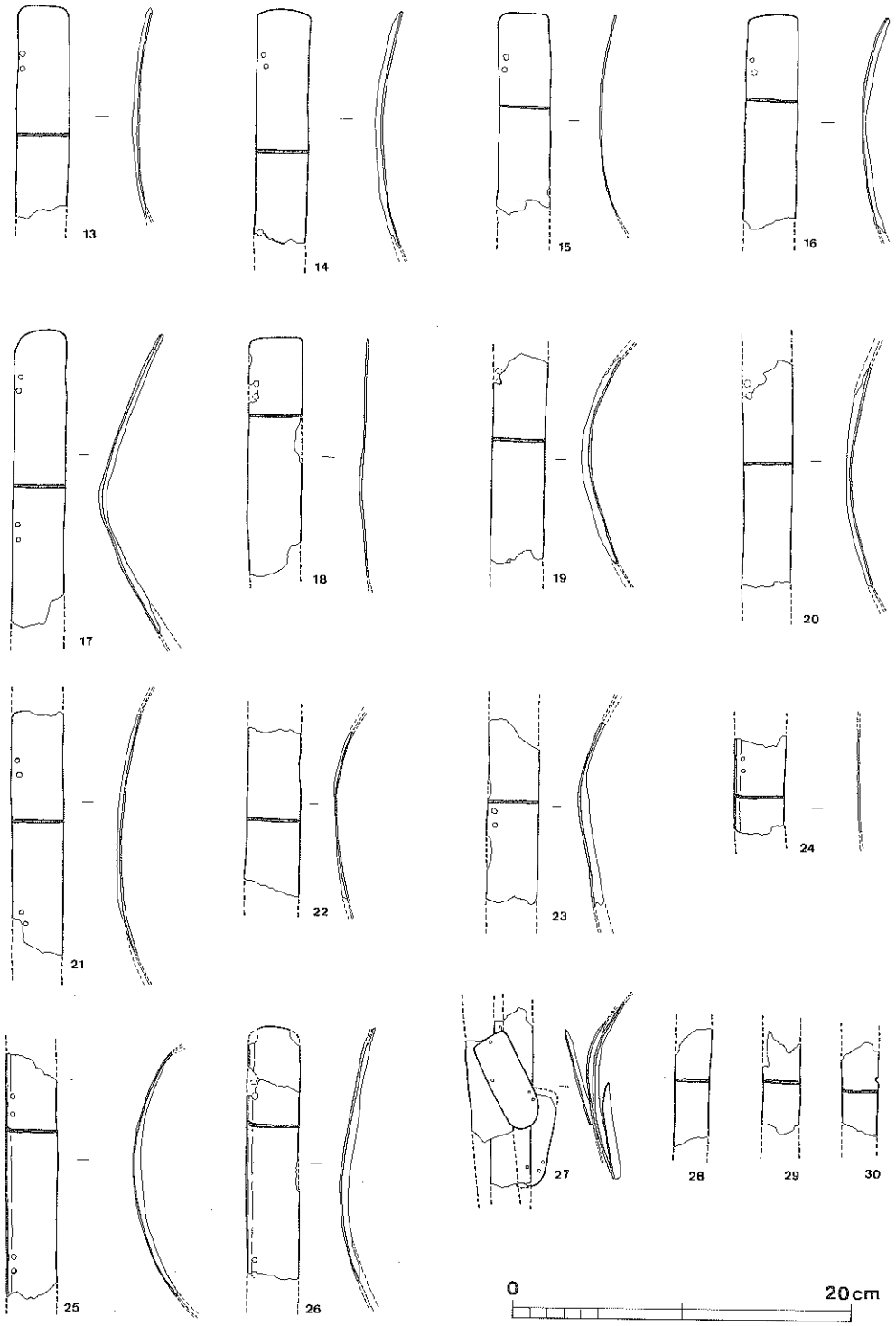
肩甲は、幅3㎝の細長い鉄板を湾曲させたものを革で綴じており、段数は10段と思われる。肩甲は、銹化が著しく破片化しており、全形を残すものはない。片辺に綴じ合わせの小孔2孔一対を4対もつ。



第85図　2号頸甲実測図



第86図　2号肩甲実測図(1)



第87図　2号冑甲実測図(2)

1号籠手(第88図)　2号短甲横で出土した篠籠手である。石膏で取り上げたのを、整理時点で取りはずした。

籠手を構成する板は、上端幅2㎝程、下端幅1.2㎝程、長さ18.7㎝程を測る細長いもので旧状を留めるもの現存7本、破片が20本分程ある。上辺はすべて直線となっており、隅切りをする。下辺は、長軸に対して直角になるものを主体として、斜めに切り落されるもの(4)と両隅を切り落し先尖りとなるもの(5)が認められる。また、片側辺が内に打ち返されている状態が看取される。

12は、端に位置した個体であり、側辺に革包覆輪の痕跡を留める。また一部に布の付着もある。現状で観察する限り、明らかな覆輪痕跡は側辺にしか認められない。

本例は手甲を伴っている[註61]。手甲は複数の小札(13～21)で構成されるが、主体となるのは、幅1.8㎝、長さ3㎝程の小型方形小札である。手甲小札は、破片化しており枚数を確定しえないが、現存で20枚程はある。2の細板先端には、手甲を綴じた革紐が遺存している。

革紐は、ところどころに遺存をしているが、綴じ方を復元するには至らない。

細板の枚数と大きさから見て、二個体一組として巻かれ、副葬されていたと想定できる。

2号籠手(第89図)　2号短甲横の肩甲下から出土した篠籠手である。石膏で固めて取り上げられており、そのまま保存処理をした。図中1は、その状態での実測図である。

本例は、上端が山形となるものである。細板の最も長いものは全長24㎝程を測り、最も短いものは全長16㎝を測る。下辺は長軸に垂角に切り落され、上辺は斜めに切り落されている。幅は、上辺で2.5㎝、下辺で1.8㎝程を測る。片側辺は内に打ち返される。

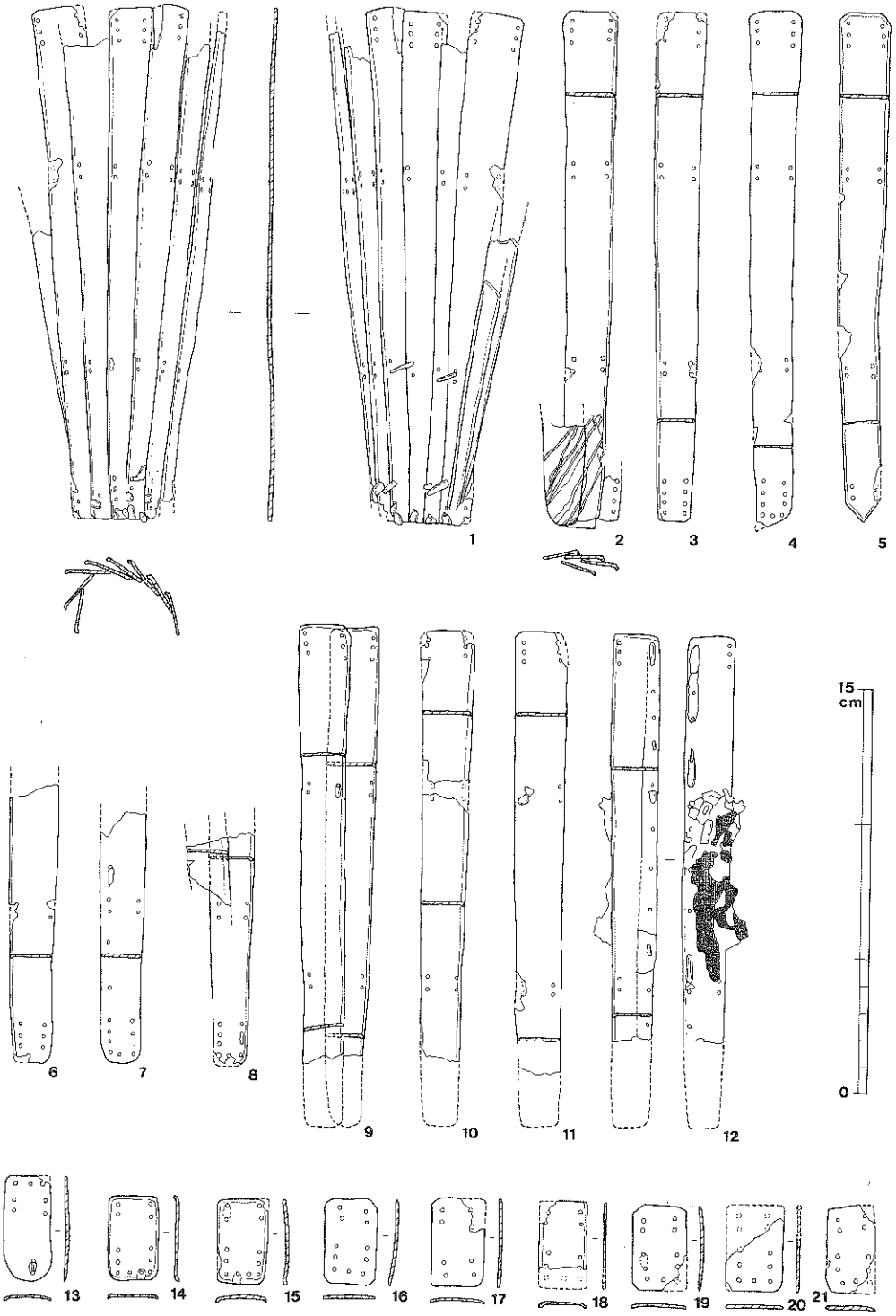
籠手の上辺及び側辺は革包覆輪を施す。細板側辺に革包覆輪が認められる個体は、1の石膏取り上げ塊中に2個体、及び脱落した個体(3)に1個体が認められるため、左右の籠手が一組として巻かれ、副葬されたことが理解できる。このことが、前述した1号籠手も2個一組であった可能性を補強する。

細板の枚数については、石膏による取り上げのために正確に把握できないが、概ね30枚程と見てよい。

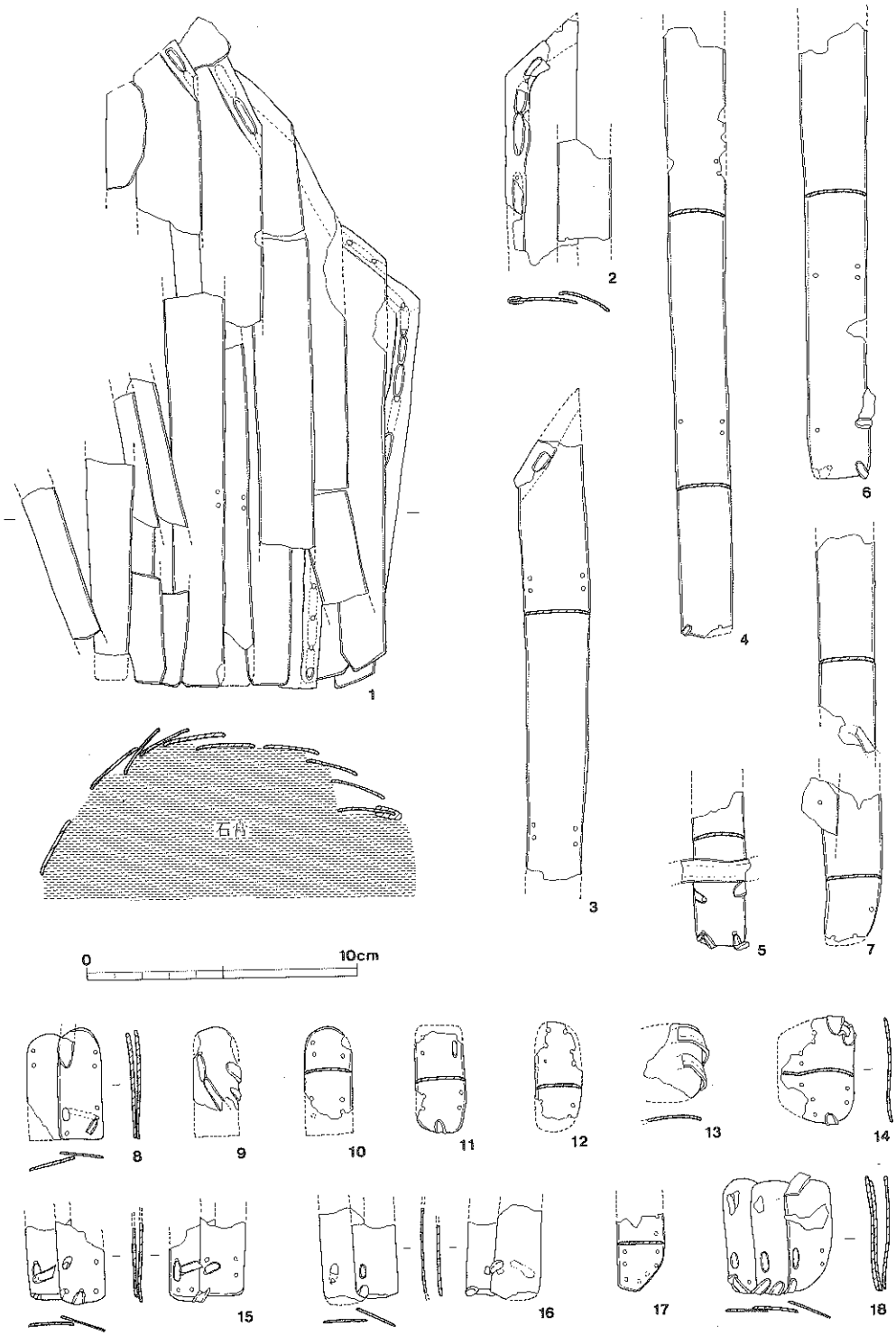
本例も1号籠手と同じく手甲を伴う。手甲は、1号籠手に比べて各種の小札(8～14・18)を使用している。手甲部の本体も石膏で取り上げられているが、銹化・銹着が著しく観察が難しい。

革紐の痕跡は、所々に残っている。

革製漆塗草摺　1号短甲に伴う草摺である。短甲後胴近くで出土した。漆膜のみが棺底に遺存しており、石膏で取り上げられている。部分的に細かい鋸歯文を認めることができるが、他についてはよくわからない。



第88図　1号籠手実測図



第89図　2号籠手実測図

F　楯

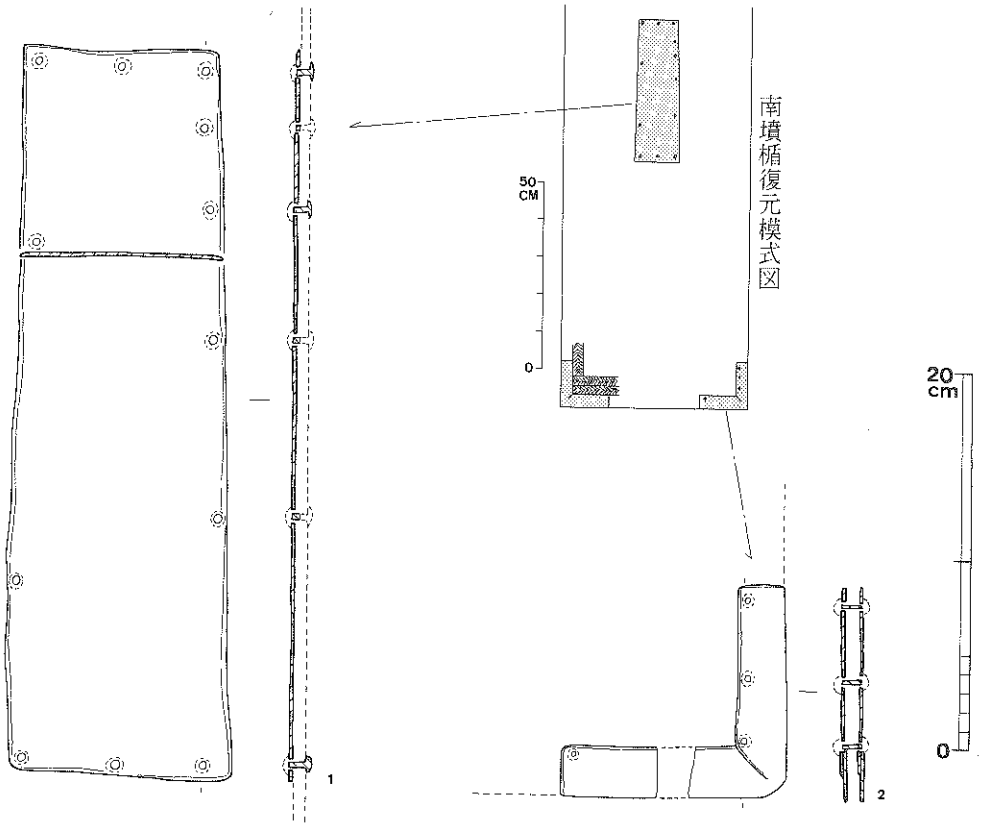
革製漆塗金具付楯(第90図)　棺上に置かれていた楯である。漆膜はごく一部にしか遺存せず、楯の形状・大きさを確認することは難しい。金具を付す。漆膜遺存部では、綾杉文が一部で認められた。

金具の出土位置から想定できる楯の規模は、下辺幅50cm程、高さ105cm以上である。

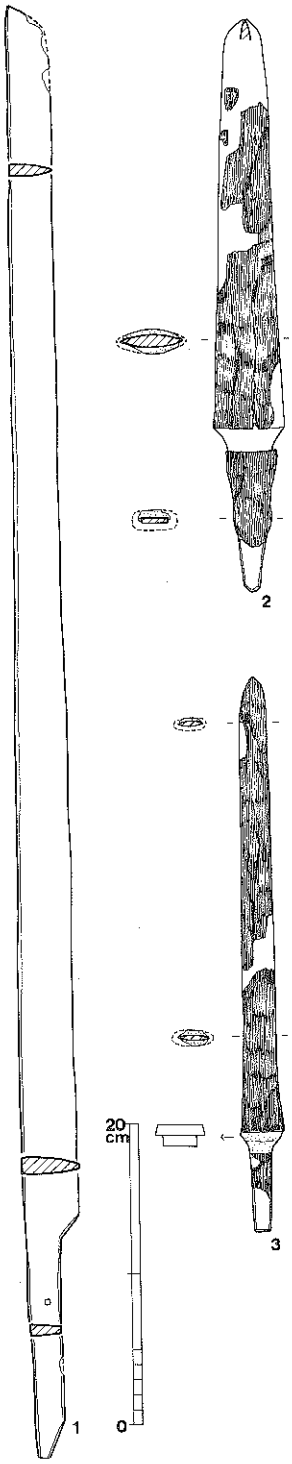
金具は、楯中央部と下辺両端の計3個所に装着されている。

中央部の金具(1)は、上端幅10.5cm、下端幅12.0cm、長さ38.5cmを測る長方形鉄板で、四辺に小孔を穿ち、楯本体に鋲留めされる。鋲軸の内長は0.7cm程であり、鋲が本体を貫通し金具を固定していたならば、楯の厚みは薄いといわざるを得ない。

隅金具(2)は、楯本体隅を覆輪状に覆い補強するものである。本体に鋲留めされる。隅金具から想定できる楯の厚みも、やはり0.6～0.9cm程と薄い。隅金具については、2個のうち1個体が現存する。



第90図　楯金具実測図



第91図　直刀・剣実測図

G　武　　器

武器には、直刀・剣・鉄鏃・胡籙・矛・石突があり、矛・石突は棺外から出土し、他は棺内から出土した。

以下に、その内容を報告する。

直刀(第91図１)　棺内中央部から３本が出土し、１本が現存する。１は、棺内中央部南側で出土したものである。

全長96.5cm、刀身長80.5cmを測る比較的長い直刀である。刃の内反りはほとんどない。切先の一部を銹により失うが、遺存状態はよい。

平峰・片関である。茎は、先尖りとなり平造りされる。目釘穴が１個所認められる。

現存しない他２本の直刀も、出土状況実測図と写真を見る限り、本品と同様なものと思われる。

剣(第91図２・３)　上記直刀と伴出した剣２本である。

２は、全長37.7cm、剣身長27.0cmを測る。剣身及び茎には、鞘と把の木質が遺存する。鞘口と把頭部には木質を認めない。茎は平造りされ、先尖り気味となる。

３は、全長36.5cm、剣身長30.2cmを測る。剣身幅は2.2cm程を測り、細身である。関部が尖り気味に広がる。茎は平造りされる。剣身と茎には、鞘と把の木質が遺存する。把頭部は鹿角を用いる。

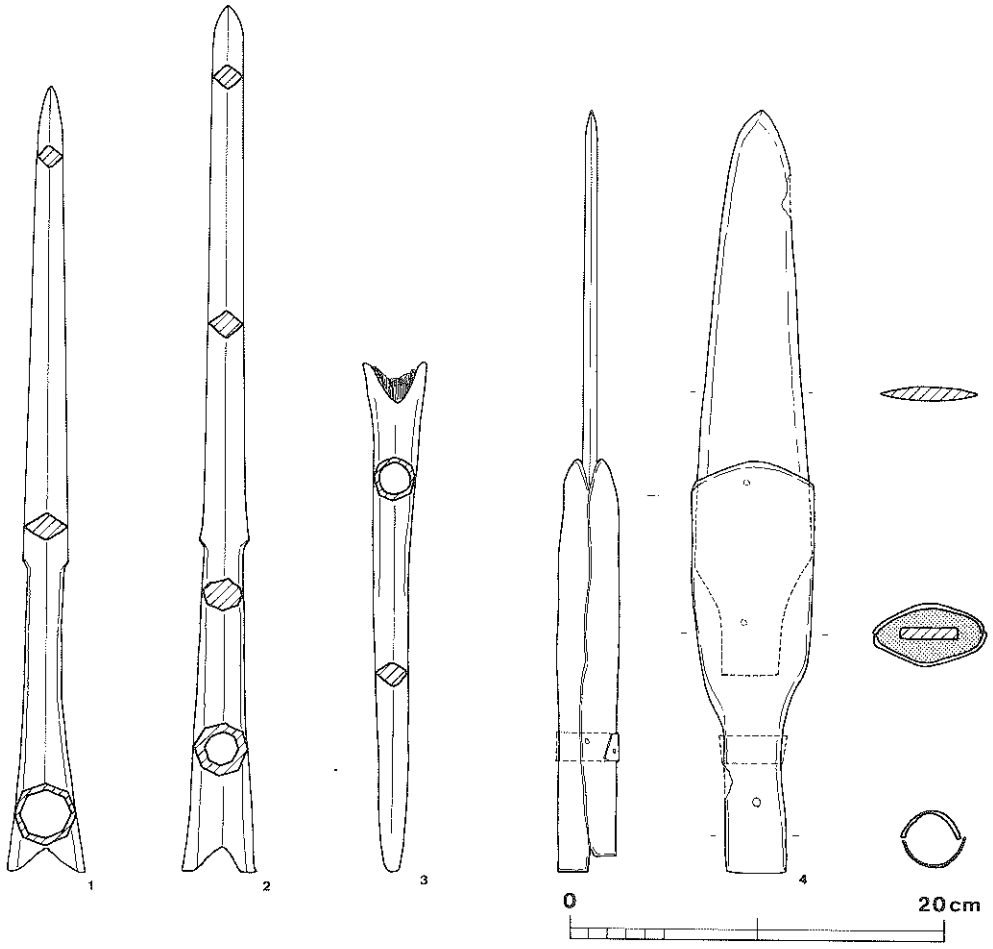
矛(第92図)　いずれも棺外より出土した。図示した実測図は、出土後早い段階で測図されたもので、現状は銹の進行により形状が変わっている。[註62]

１・２は、袋状の柄装着部をもつ通常の矛で、１は棺東端部北側から、２は同じく南側から出土した。

１は全長41.5cm、矛身長25.3cmを測る。矛身は断面菱形を呈し、袋状柄装着部は８角形に造られる。

２は、全長46cm、矛身長28.5cmを測る。矛身は断面菱形を呈し、袋状柄装着部は８角形に造られる。

３は、平たく造られた槍身状の刃部を、２枚別造りの装着部で挟み込み、柄と固定するもので、装着部は鉄環で留められて



第92図　矛・石突実測図

いる。

柄の装着部を袋状とするものを「矛」と分類し、茎に柄を装着するものを「槍」と分類する現状に則せば、本例は矛となる。

槍状の本体部は、全長30.0cm、刃部23.8cmを測り、茎を有す。鎬はなく、平たく造られている。

装着部は、全長22cmを測り、本体を装着する部分は幅広に、柄を装着する部分を狭く造る。ところどころに目釘と思われる小孔が穿たれている。

本例のような矛は、類例が少なく珍しい。

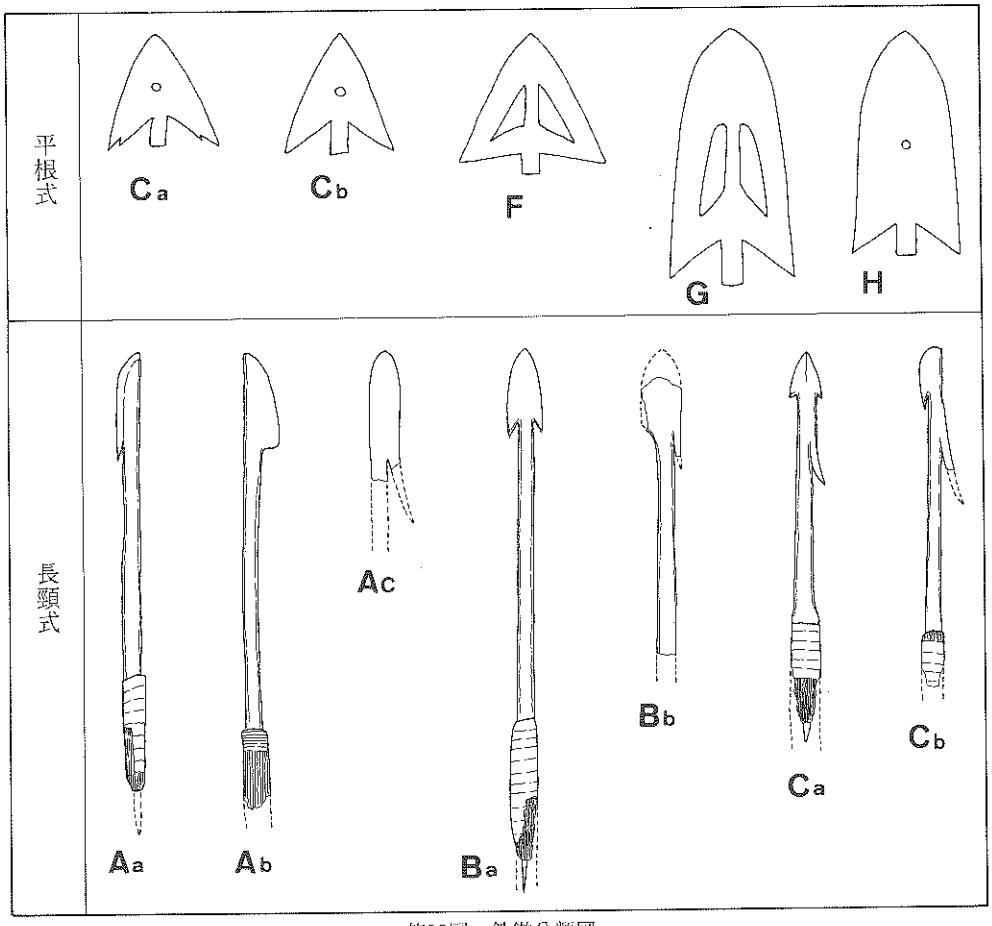
石突(第92図3)　形状から見て、石突(いしづき)と思われる[註63]。棺外東端部北側で出土した。柄装着部は断面8角形に、先は菱形に造られた。装着部内に木質が残る。

鉄鏃（第93～97図）　棺内西端部で３群にまとまって出土した。長頸式を主体に少量の平根式を伴う。石膏で取り上げられていることと、銹化が進み破片化しているものも多いため、正確な出土本数は確認できないが、概ね、１群が30本、２群が50本、３群が30～40本程の計120本程となろう。

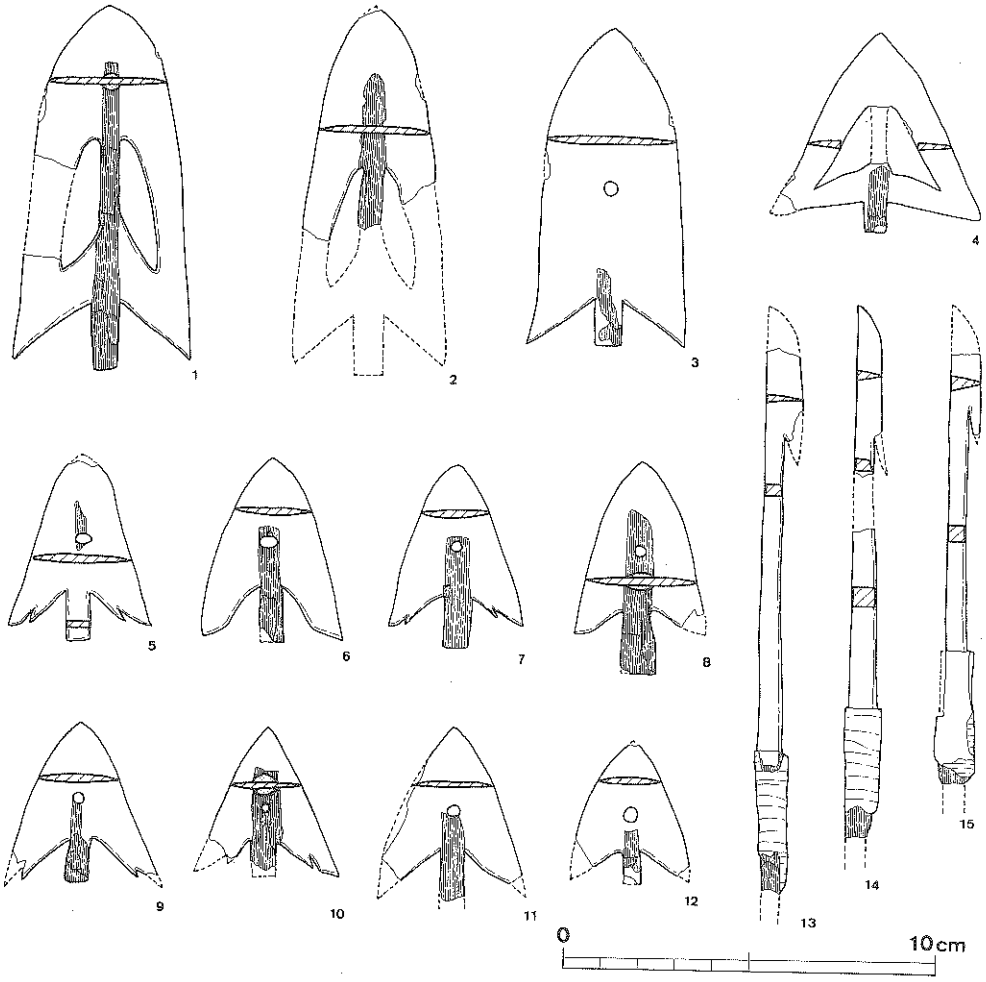
まず、南墳出土の鉄鏃の種類を、知り得る中で分類したのが第93図である。

平根式では、北墳中央槨でも出土しているＣ類が認められ、他に大型のＦ・Ｇ・Ｈ類がある。Ｃ類は、北墳のものに比べ、鏃身中央部に孔を穿つ特色がある。逆刺を有すものとないものがある。Ｆ類は、大型の三角形鏃で鏃身に透しをもつ。Ｇ・Ｈ類も大型鏃で、形も類似している。但し、Ｇ類は透し孔をもつのに対して、Ｈ類は中央部に小孔を穿つ。

長頸式は、長さ15～22㎝程を測り、長頸化した鎧被をもつ。鏃身の形状によって大きくＡ～Ｃの３類に分類できる。Ａ類は、鏃身が片刃となるもので、逆刺をもつAa類と、逆刺のないAb類に分けられる。Ac類は、破損により全形を知り得ないが、状況的には逆刺が長く



第93図　鉄鏃分類図

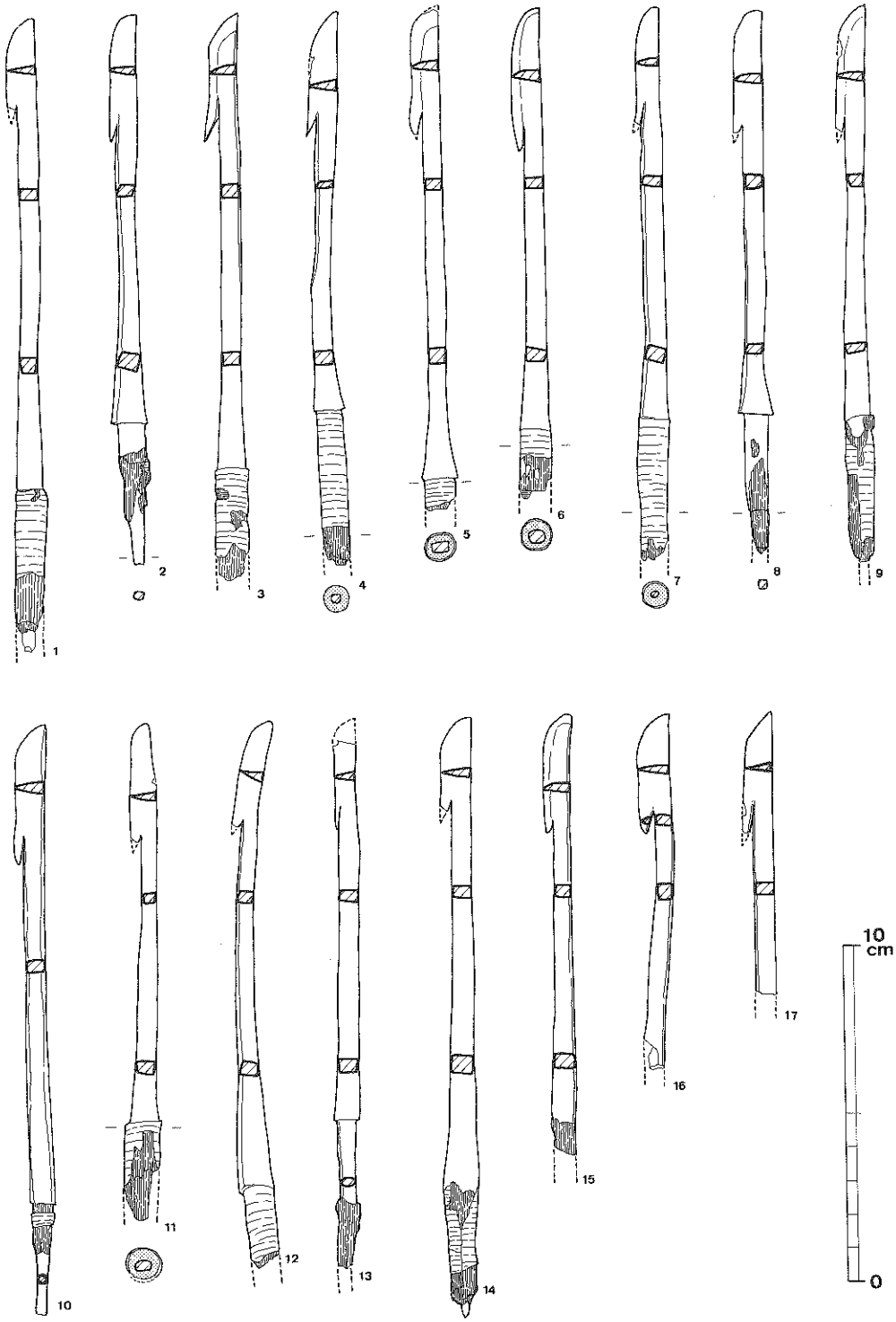


第94図　1群鉄鏃実測図

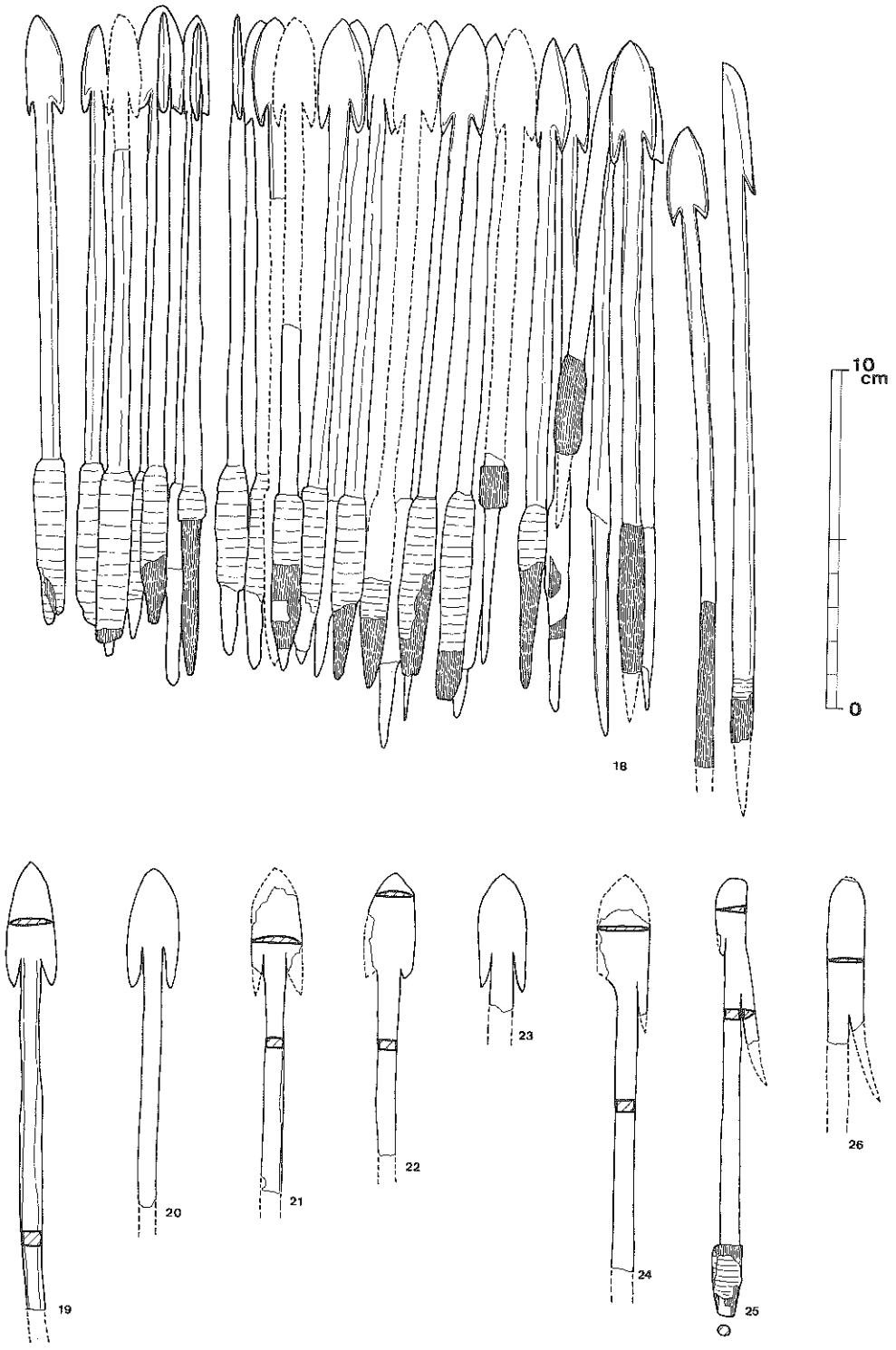
かつ外反りする可能性がある。B類は、柳歯腸扶のもので、両方に逆刺をもつBa類と片方のみに逆刺をもつBb類がある。C類は、三角形状の鏃身と篦被にさらに逆刺をもつもので、鏃身が小さな逆刺を両方にもつCa類と、片爪形のCb類に分けられる。

次に各群ごとの鉄鏃の構成を概観する。

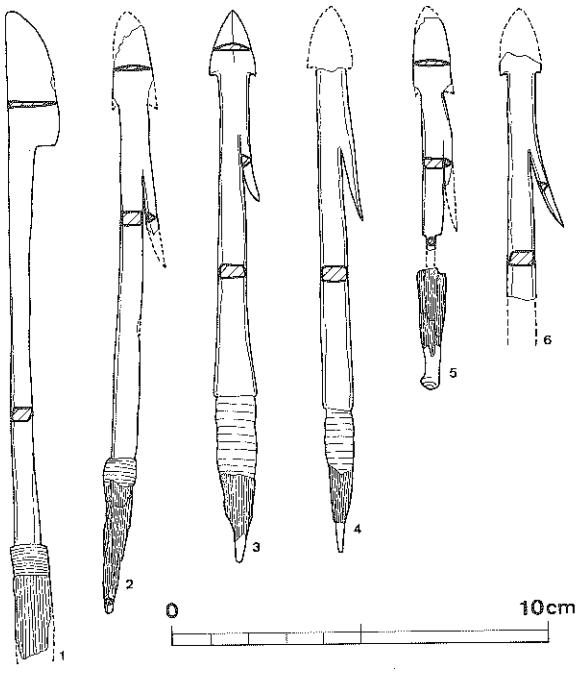
1群(第94図)は、平根式(1～12)と長頸式(13～15)とで構成されており、出土状況を見る限り、長頸式を主体に一部平根式を伴っていたと判断できる。平根式をもつ群は、この1群だけである。平根式は、Ca類(5・7・9・10)4本、Cb類(6・8・11・12)4本、F類(4)1本、G類(1・2)2本、H類(3)1本の計12本が認められる。長頸式は、銹化・破片化のために内容を正確に理解できない。一部に残るものは、いずれも片刃式のAa類である。1群は、盗掘により一部を失うため全体を知り得ないが、出土本数は概ね30本程と思われ



第95図　2群鉄鏃実測図(1)



第96図　2群鉄鏃実測図(2)



第97図　3群鉄鏃実測図

る。

2群(第95・96図)は、長頸式のみによって構成されている。2群は現在、石膏で取り上げられているものが25本程、脱落しているものが25本程ある。脱落しているもの(1～17・19～26)は、片刃のAa類を中心にBa類が認められ、Ac類・Bb類・Cb類が少量伴う。一括で石膏で取り上げられているもの(16)は、ほぼBa類に限られている。この状況から2群を復元的にみると、Aa類とBa類をほぼ同数、矢筒に装着しており、その入れ方も種類ごとにまとめられていたことが充分想像できる。2群は、後述の鉄地金銅張りの帯金具をもつ胡籙に装着されていたものである。

3群(第97図)は、2群と同様に長頸式のみによって構成されている。現在、石膏で取り上げられた状態のままとなっているが、銹化が著しいため、種類の確認が難しい。脱落したものを見ると、Ca類を中心にAb類が1本のみ認められる。石膏での取り上げのものを詳細にみると、Ca類のみによって占められている可能性は高い。本数についても、良くわからないが、状況的には40本前後と思われる。実数はもう少し多いかも知れない。

このように、1～3群の鉄鏃のまとまりは、各群によって鉄鏃の構成を異にしており、その中心となる種類を群ごとに整理すると下記のようになる。

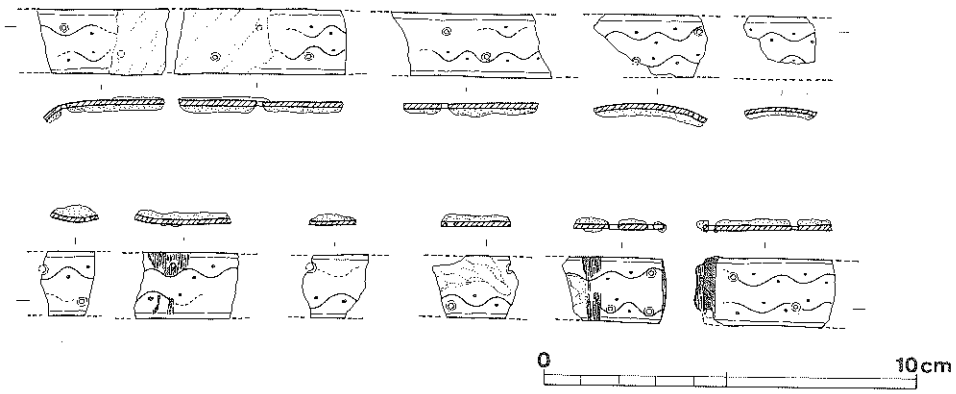
1群……平根式12本・長頸式(Aa類主体)18本＋α本。

2群……長頸式(Aa類・Bb類各25本)50本。

3群……長頸式(Ca類)40本＋α本。

全体を通してみると、片刃式のAa類が長頸式の主要種類となり、次いでBb類・Ca類となっている。他のものは、ごく少量に留まる。

上述した南墳での鉄鏃の群分けは、「遺構」で述べたように、各矢筒(胡籙)における鉄鏃の状況と読みかえることができ、盗掘によって完全に失われたであろうもう一群を含めると、4組200本程の鉄鏃が副葬されたと想定できる。



第98図　胡籙金具実測図

H　矢　　筒

前述の1～3群の鉄鏃は、状況的にいずれも矢筒に装着されていたと判断して良い。但し矢筒がいかなる形状であったかは、実物が遺存しないため不明であるが、2群に伴う矢筒には胡籙金具が伴っていたため、その一端を知ることができる。

胡籙金具(第98図)　鉄地金銅張りの胡籙金具であり、2群鉄鏃を装着した胡籙に付けられていた金具である。胡籙の箱形矢入れの中程に付けられた横帯形の飾金具と判断できる。

箱形矢入れ及び吊り紐は遺存しない。但し、前者については革製漆塗りと思われる。

飾金具は、幅1.8cm程の帯状鉄板に金銅張りしたもので、現在は11片に破片化している。本来は、箱形矢入れを一周させ、一個所で綴じ合わせていたようで、綴じ合わせ部両端が現存する。箱形矢入れへの装着は、鋲で行われていたようで、表面の上辺・下辺ぞいに交互に小孔が穿たれている。裏面には、箱形矢入れの一部が付着する。

表面の上辺・下辺には、波状文と点文の組み合わせによる文様を施している。

胡籙の大きさについては、金具が破片化し正確な復元が困難ではあるが、出土状況とを考え合わせるならば、幅16～18cm程、厚み3cm程が妥当なところとなろう。

鉄鏃1・3群に伴う矢筒についても、2群が胡籙である以上、ともに胡籙である可能性は高く、漆膜の存在から革製漆塗りと判断できる。

I　馬　　具

馬具が棺内と棺外より出土している。出土場所別の馬具の種類は次のとおりである。

棺内……f字形鏡板付轡(くつわ)・環状辻金具・組合式辻金具・鈒(かこ)具。

棺外……剣菱形杏葉・鞍(しおで)金具・木心鉄板張輪鐙・環状雲珠(うず)・環状辻金具・鈒具。

その他に釣舌金具が出土しているが、出土位置が不明である。概ね馬装一式と判断できる。以下に、その内容を報告する。

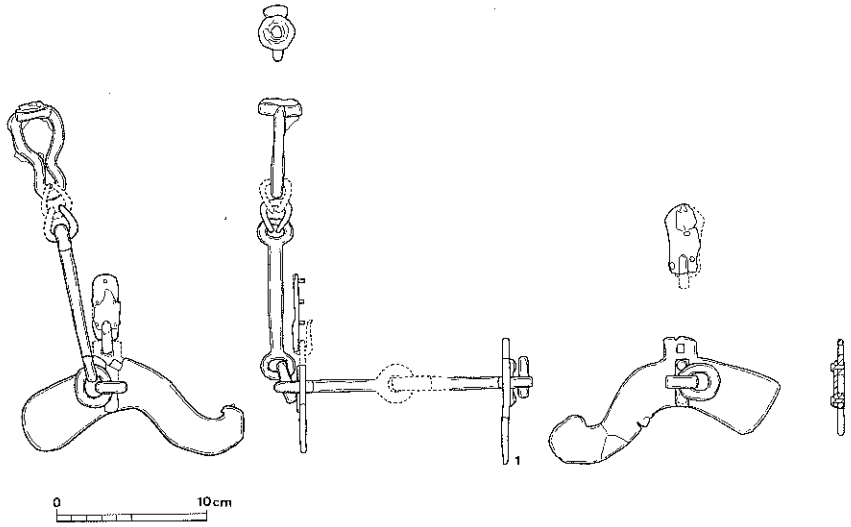
f字形鏡板付轡(第99図)　第99図は、調査後実測したものを一部修正して整図したものである。連結形態は、鏡板の外側で遊環を介して引手が付くが、現在ではこの遊環は確認できない。引手壺を持ち、引手と引手壺の連結には2連以上の兵庫鎖が図化されているが、この兵庫鎖も確認できない。

鏡板は長さ14.8cm、幅2.5cm～4cmの小型のものである。鏡板には金銅を張るものが一般的であり、それを留める鋲の数が編年の指標ともなっているが、その痕跡は認められず、また調査後の実測図でも表現されていないことから、金銅が張られていなかったのかもしれない。銜との連結には楕円形の窓を開け、長方形の鉄板を渡してそこに銜環を搦めたものと思われるが、その形状は不明である。方形立聞を持ち、この立聞には長楕円形の釣舌金具がつくようであるが、これも遺存していない。

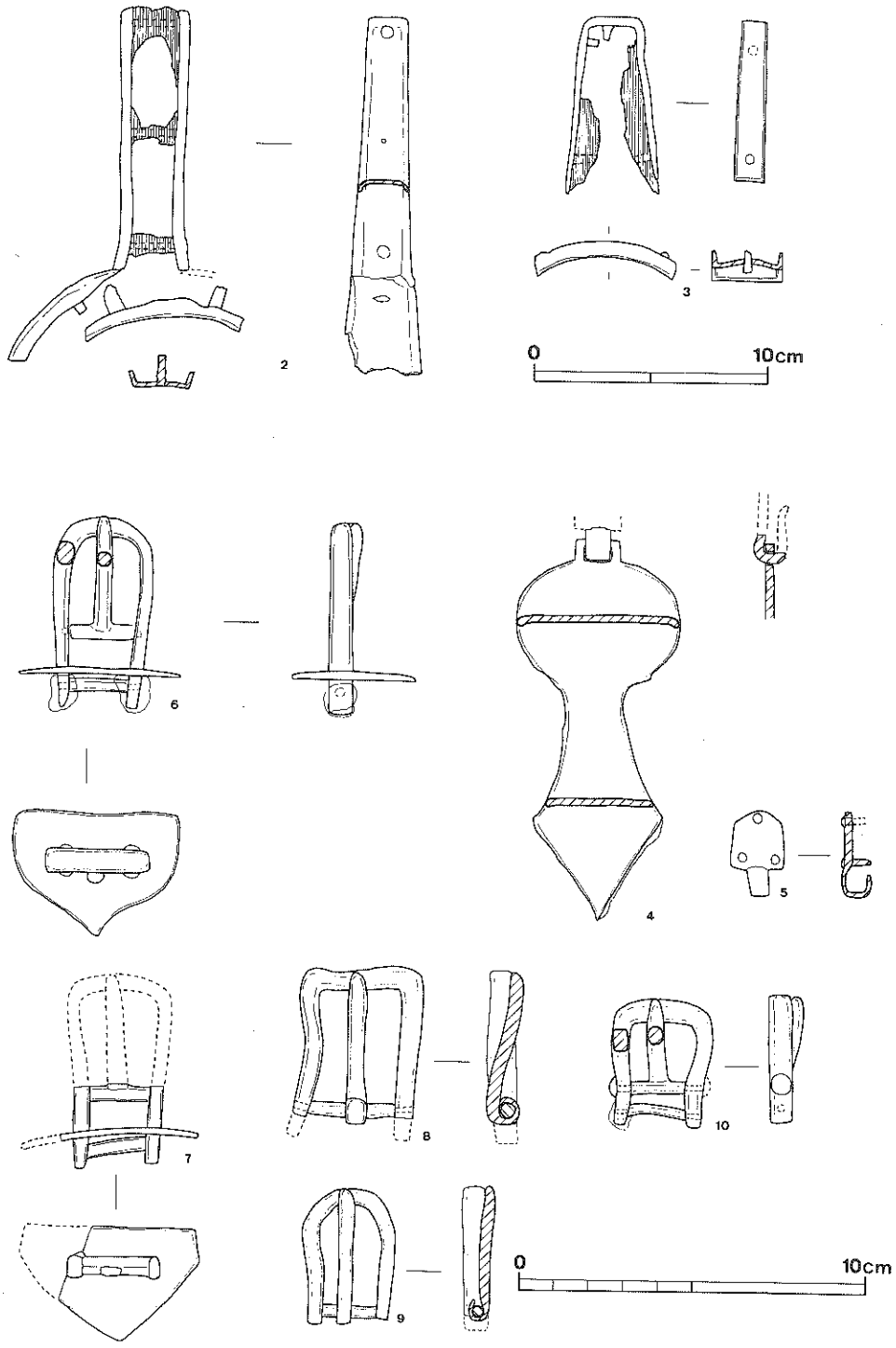
銜は2連で断面円形を呈する。いずれも欠損しており全長は不明である。引手は長さ10.8cm、引手壺は長さ6.7cmを測る。

剣菱形杏葉(第100図4)　剣菱形杏葉は1点のみ出土している。全長10.9cm、偏円部幅4.7cm、剣菱部長さ6.6cm、最大幅3.7cmを測る。剣菱部における最大幅の位置は、最大幅を境に下部と上部の比が4：6となっている。この杏葉も縁金や鋲は確認できない。方形立聞を持ち、釣舌金具の一部が遺存している。

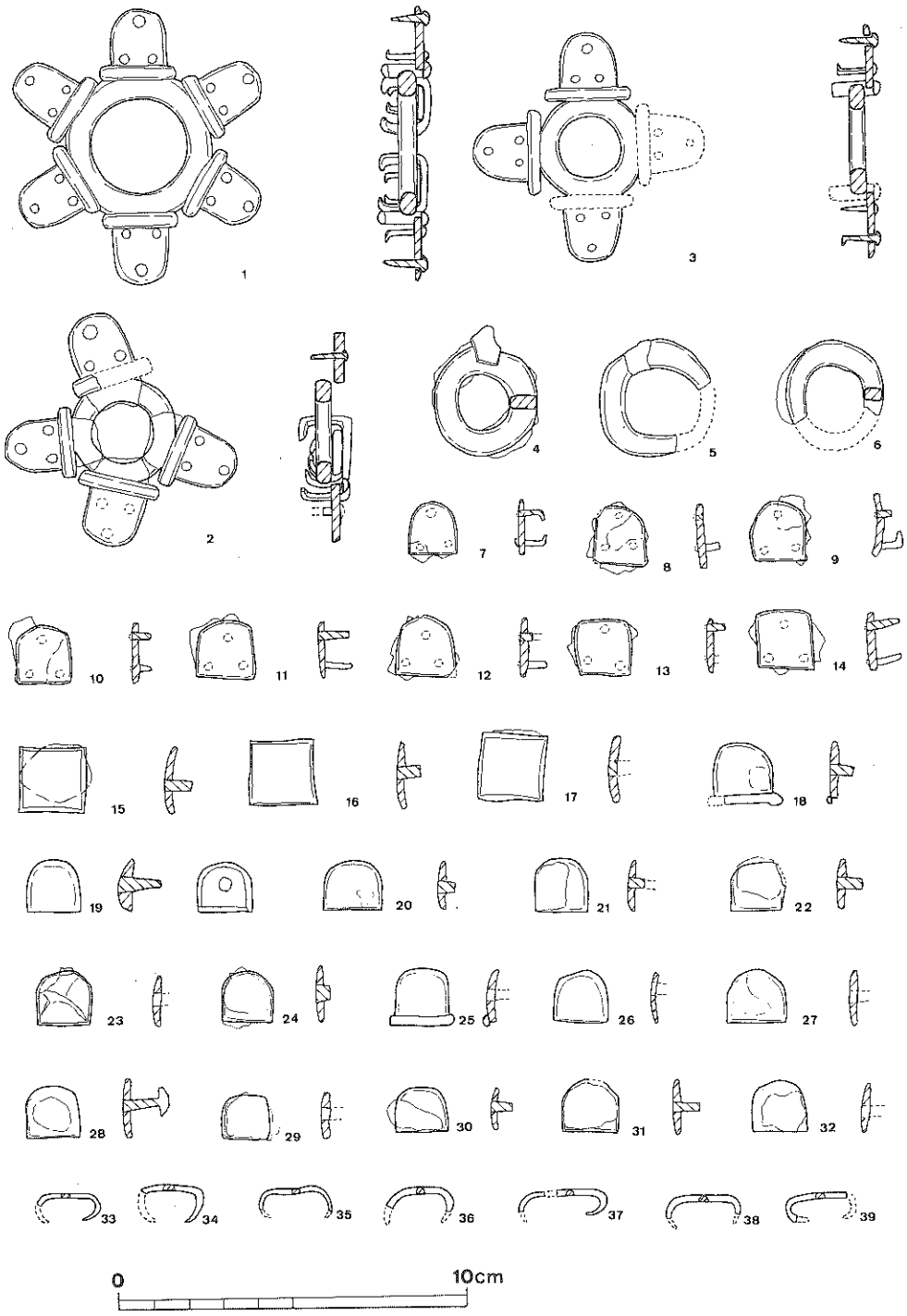
鞍金具(第100図7・8)　鞍金具は2点出土している。栗形の座金具を持ち、鉸具の2本の足で後輪に装着する固定式のものであるが、座金具の形態はそれぞれ若干異なっている。7はわずかに内湾する上縁部から下向し、大きくカーブして突出部に至る。突出部もわずか



第99図　轡実測図



第100図　馬具実測図(1)



第101図　馬具実測図(2)

に内湾する。座金具の幅4.8cm、長さ3.5cm、鋲具長さ5.5cm、幅2.9cmを測る。鋲具の足の部分には有機質が付着している。8は座金具の一部と鋲具の先端を欠損している。座金具は7のようなカーブを持たず五角形に近い形状を示す。長さ3.3cm。

木心鉄板張輪鐙(第100図2・3)　木心鉄板張輪鐙は2点出土している。いずれも部分的に鉄板を張るものであるが、形態は異なる。2は柄の両側面と輪の内面・外面に鉄板を張るものである。踏込部は欠損している。柄は3ケ所で留金を通し、木質部と固着させる。留金部には木質が遺存する。柄の長さ11.3cm、幅2.8cm～3cm、鉄板の幅は上端部1.7cm、下端部2.6cmを測る。輪の鉄板は幅3.3cmを測る。

3は「コ」の字状の鉄板で柄の両側面と頂部を覆うものである。木製壺鐙の金具に類似する。側面で2ケ所、頂部1ケ所に鋲が打たれ木質部に固着する。鋲の部分を中心に木質が遺存している。柄の長さ7.7cm、幅2.6cm～4cm、鉄板の幅は上端部で1.1cm、下端部で1.3cmを測る。輪の大部分を欠損しているため全体の形状は不明であるが、輪の内面に張る鉄板の一部が遺存している。幅3cm。

環状雲珠(第101図1)　1点出土している。直径4.4cmの円環に6脚の爪形の足を付したものである。爪形足金具は3本の鋲が付く。責金具は1条である。足金具は長さ1.8cm、幅1.5cmを測る。責金具は幅0.4cm。

環状辻金具(第101図2～14)　環状辻金具は5点出土している。このうち足金具が付いた状態で出土したものは2点である。基本的には環状雲珠と同様であるが、4脚の足金具を持ち、円環は直径3cmの小型のものになる。円環の断面はやや偏平な楕円形を呈する。2の辻金具には革と思われる有機質が付着している。この2点以外では、円環が3点、足金具が10点以上あるが、足金具で図示し得たものは8点である。円環はいずれも正円にはならず、また革と思われる有機質が付着したものもある。足金具には爪形のもの(7～9・12)と爪形と方形の中間的な形態のもの(10・11)、ほぼ方形を呈するもの(13・14)の3種類が認められる。

組合式辻金具(第101図15～39)　組合式辻金具は、中央に方形の座金具を置き、四辺に爪形の足金具を配するもので、方形金具が3点、爪形金具が16点出土している。爪形金具は4組分あるが飾金具になる可能性を考え、ここでは3点以上としておきたい。方形・爪形いずれも鉄地の金具に鋲を打ち、その上から金銅板を覆い、裏面で折り返して固着させたものである。方形金具は一辺1.9cm、爪形金具は幅1.4cm～1.6cm、長さ1.5cm。責金具には文様はない。

鋲具(第100図8～10)　3点ある。方形を呈するものと、楕円形を呈するものの2種類ある。9の足の部分には有機質が付着している。

釣舌金具(第100図5)　爪形の金具を持ち、3本の鋲を打つ。何に付くかは不明である。

J　農工具類

南墳より出土した農工具類は、鉄斧・鎌・鉈・刀子・針がある。出土量は少ない。刀子を除けば、各種とも数本程度である。出土場所はすべて棺内である。以下に順にその内容を説明する。

鉄斧(第102図18・19)　1号短甲左側胴付近より3個が出土し、2個が現存する。いずれも有肩式の袋状鉄斧である。全長8㎝程を測る。通常の鉄斧と比べると、小型である。模造品の可能性が高い。

鎌(第102図20～23)　鉄斧と同じく1号短甲左側胴付近より出土したもので、4本がある。いずれも幅1.8㎝程のもので、明らかに模造品と判断できる。先端部を欠失するために全形を窺えないが、20は曲刃鎌の可能性が高い。

鎌の端は、刃に直行して折り曲げられており、柄の引き留めとなっている。柄の痕跡を留める。刃と柄が直角となる直角鎌である。

鉈(第102図16・17)　鉄斧と同じく1号短甲左側胴付近より出土したもので、2本ある。

16は、頚部が屈曲し耳かき状の刃部をもつ鉈である。柄(茎)は、平造りされる。一部に木質が付着する。

17は、刃部は16と似るが、頚部は直線的である。破片で現存する。

刀子(第102図1～3・11・13～15)　7本出土している。

1～3は、刀身長4.5㎝の小型の刀子で、両関である。茎に把の木質が遺存する。1は鉄鏃2群上面より、2・3は直刀横より出土している。

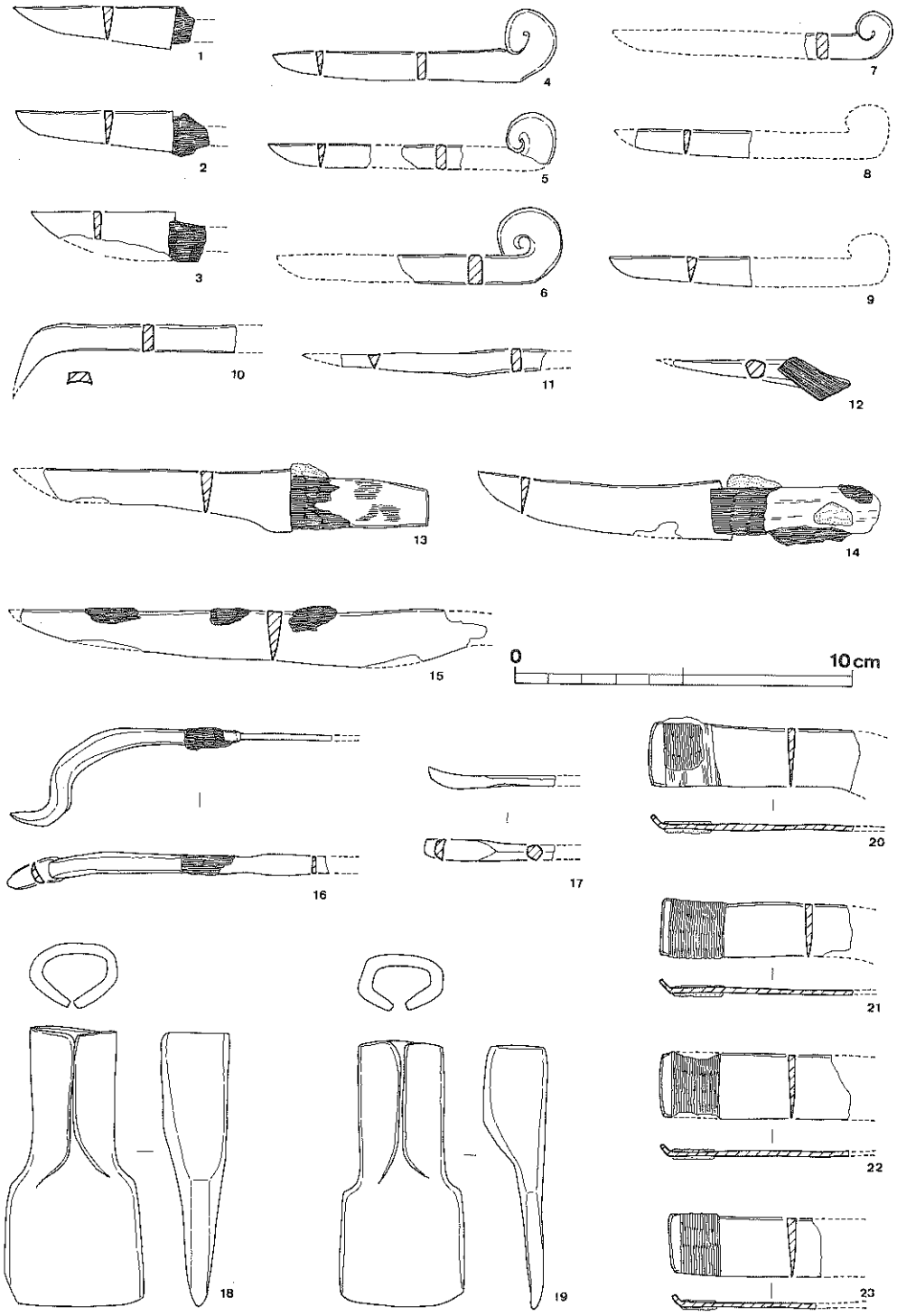
13は、推定全長12.5㎝程の刀子で、切先を欠く。刀身長は推定8.5㎝である。刀身は細身で、関付近で急に幅広となる。茎は平造りされ、把の木質と鹿角が残る。両関である。直刀横より出土した。

14は、全長12.0㎝を測る刀子である。刀身長7.2㎝。峰がやや外反りする。茎は平造りされ、木質と鹿角が付着する。両関である。直刀横より出土した。

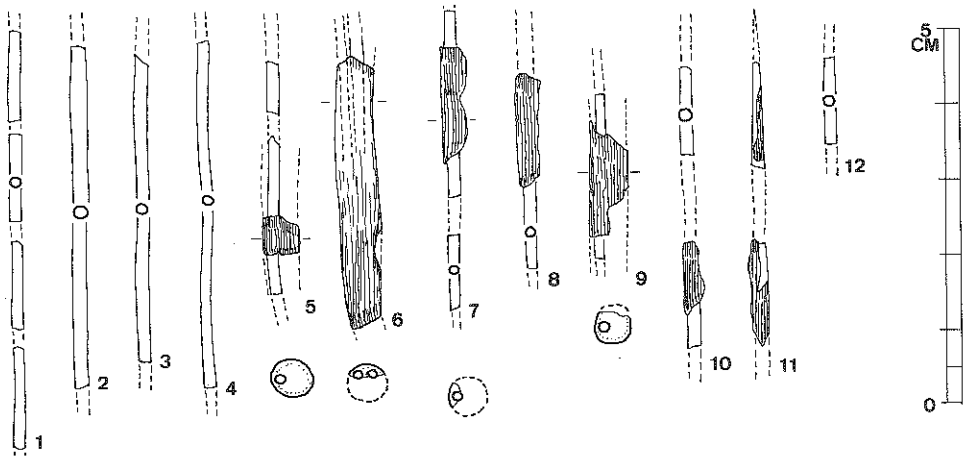
15は、現存長13.5㎝を測る刀子である。明確な関はなく、刃からゆるやかに屈曲して茎となる。茎は欠失する。峰に鞘と思われる木質が付着する。鏡・臼玉等を入れた棺内木箱より出土した。

11は、先尖りの鉄器で、基付近は平造り、先端は断面三角形となる。一応刀子とした。鉄鏃2群上面より出土した。

ワラビ手刀子(第102図4～9)　鉄鏃2群上面より出土しており、現存で8本分が認められる[註64]。旧状を留めるのは、4の1個体のみである。4は、全長8.5㎝を測り、把先端を「ワラビ」の頭状に巻く。



第102図　農工具類実測図



第103図　針実測図

針(第103図)　鉄鏃２群上面より出土した。正確な本数は不明[註65]。８本以上は認められる。現在は、かなり破片化している。直径0.2cm程の断面が丸い細長い鉄針である。５～９の状況を見ると、幾本かは、竹製の針筒に入れられていたと思われる。

不明鉄器(第102図10・12)　鉄鏃２群上面より出土した。

10は、先端を屈曲させるもので、12は先尖りの鉄器である。後者には木質が付着する。用途不明。

他に10と同様なものがもう１本と、先がさらに屈曲するものが１本ある(図版第85)。

4　南墳まとめ

南墳の内容については、既に述べてきたとおりである。ここでは、その内容を再度整理し、二・三の知見をのべたい。

A　墳　丘

墳形と規模　南墳の墳形については、現時点では確定し難い。調査時の判断を優先させれば円墳と把握することが妥当であろうが、方墳の可能性を充分念頭に置くことが必要であると考える。

規模については、円墳とすれば直径34m程となり、方墳とすれば南北28m、東西34mとなろう。

埴輪と葺石　墳丘表面が後世に改変されているため、ともに確認できない。但し、南墳の内容を正当に評価すれば、本来は両者を完備していたと考えた方が良い。

削り出しと盛土　南墳の築造方法は、基本的に北墳と等しく地山の整形と盛土とで行われている。地山は、北墳築造時に切り離された、丘頂自然地形南半部残丘のことである。

B　主 体 部

主体部は墳頂部に1基であり、全長4.18m、幅0.8m程の箱形木棺を直葬する。頭位は東である。主体部は東西方向に置かれており、南北方向に棺を置く北墳と異なる。

副葬品の配置と内容は、棺外に矛と馬具の一部、棺内には甲冑・武器を中心に埋葬されている。配置状況を北墳と比べると、甲冑・鉄鏃類を主に足側に置く点では両者には共通性がある。鏡では両者は全く違っており、北墳西槨が頭部に鏡を置くのに対して南墳では木箱に入れて足側に置かれていた。但し、鏡が臼玉などの滑石製玉類と伴出する点では共通性がある。馬具一式が、部分を分けて棺内と棺外に置かれている点も注意しておきたい。

C　副 葬 品

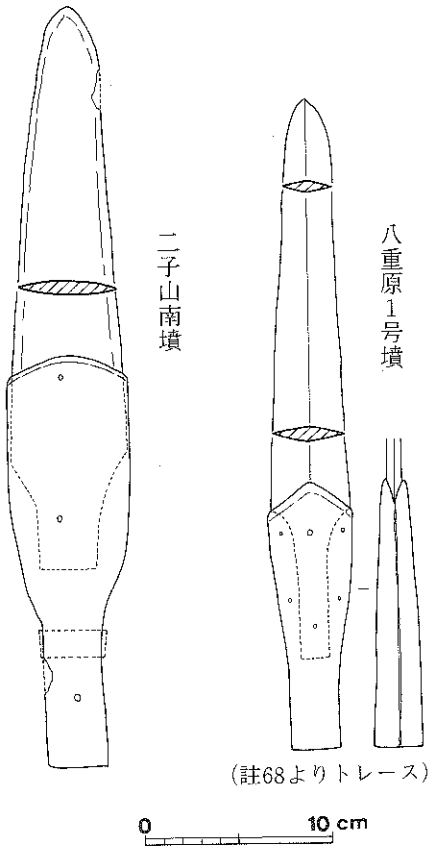
南墳の副葬品には、鏡・玉類・甲冑・武器・馬具・農工具類が認められる。この中で中心を占めるのは、甲冑・武器である。農工具類は量が少ない。甲冑の複数埋葬・武器の豊富さ・馬具の存在・農工具類の少なさの点で北墳との間に差異がある。特に甲冑・武器の豊富さは北墳との極だった差であるとともに、鋲留式甲冑の出現・挂甲の出現という質的な面でも大きな差異が認められる。鉄鏃も、平根式を一部伴うものの、定型化した長頸式を主体としている。

甲冑で注意しておきたいのは、短甲・挂甲が3領に対して冑1領という数の不一致である。挂甲を胴内に収納していた2号短甲でこの状況をやや詳しくみると、ここでは、短甲1領・挂甲1領に対して、衝角付冑1領、頸甲・肩甲1領、籠手2領となる。甲と籠手は数が一致

するが、冑と頸甲・肩甲は数が一致しない。甲冑各種で一式の兵装を身体に装着した場合、ここでは一組しかできないということである。1号短甲を含めても、やはり同様である。この南墳での甲冑の状況は、あくまでも重兵装一式分しか存在しない。5世紀代での甲冑の出土状況を見ると必ずしも甲と冑が一組とはならず、特にその傾向は挂甲に強いが、近くで甲冑を複数出土した滋賀新開1号墳[註66]や久津川車塚古墳[註67]では、甲と冑は複数が組み合う。これらが甲冑数人分の副葬であるとすると、南墳の場合は甲冑1人分での組み合わせの多様さを予想することもあながち無理ではないと思われる。

甲冑については、「考察」に詳細をゆずることとして、以下に出土例が稀な槍身の矛と三環鈴について、少し類例を挙げておきたい。

槍身矛(第104図)　南墳から出土した矛には、身と袋状柄装着部が一体となる通有の矛と伴に、槍身状の身部を別造りの装着部で挟み込むものがある。これを槍身矛と仮称しておきたい。



第104図　槍身矛の類例

この特異な矛の類例として、千葉県君津市八重原1号墳出土例[註68]を知ることができたので、紹介をしておく。

八重原1号墳出土槍身矛は、全長35cm程を測り二子山南墳例より一廻り小さいものの、造り方は全く同様である。すなわち、全長30cm程の茎をもつ槍身状の身部を、全長15cm程の別造りの柄装着部2枚で挟み込んでいる。身部は、南墳例と比べると、やや細身で鎬が認められる点で異なる。装着部は、身部の関から茎を挟み込み、釘留ないし鋲で留めているようである。身部との装着方法は南墳のそれと等しい。

この槍身矛を出土した八重原1号墳は、直径37m程の円墳で、他に鋲留短甲2領や武器類が出土している。年代は5世紀後半であり、南墳と年代的に近い。

三環鈴(第105・106図)　銅環に鈴を複数付ける環鈴には、三環鈴と四環鈴があり、三環鈴は現在、日本で60例程を知ることができる。

環鈴については、既往の研究があり集成や分類

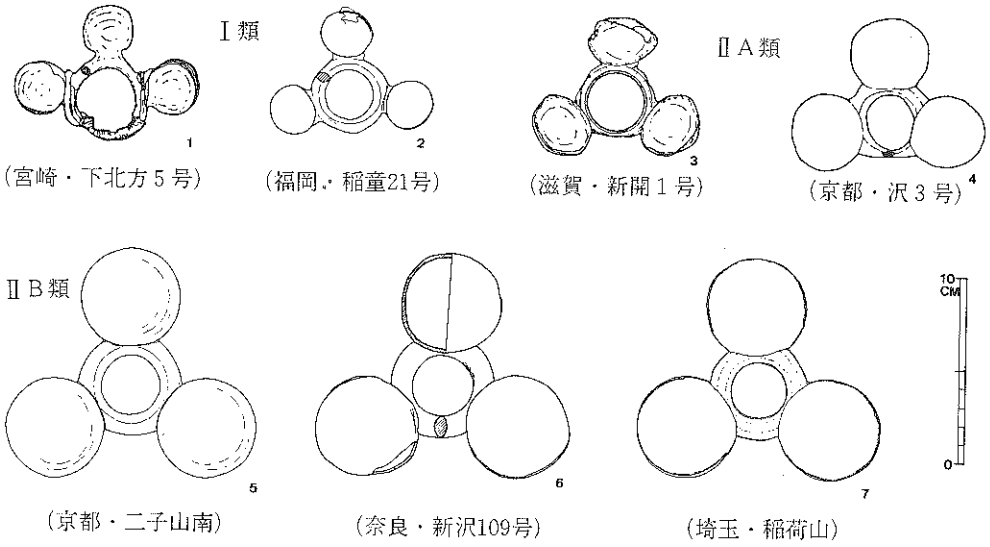
が試みられている[註69]。ここでは、これらの研究をもとに分類と出土位置について若干の私見を述べ、南墳出土の三環鈴の位置づけをしておきたい。

三環鈴をみるとき、その形状の差異は次の３点に集約される。すなわち、環と鈴の取り付け方と取り付け位置と環と鈴の相対的な大きさである。環と鈴の取り付けに関しては、直接環に鈴を取り付けるか、取り付け用基部を有すか(有基式)という差異である。取り付け位置での差異とは、環を三等分する位置に付けるか(均等取り付け)、または不均等に取り付けるかであるが、この場合、鈴の中心点を結んだ三角形が、正三角形か二等辺三角形か、という見方の方が実物の有様に近い。環と鈴との相対的な大きさ比較とは、鈴直径は環直径より小さいか、等しいか、大きいかという点である。

この３点を基に、出土例からその組み合わせを大枠で示すと次のようになる。

- 三環鈴
  - Ⅰ類(有基式)
    - A (不均等取り付け)
      - a (環＞鈴)
  - Ⅱ類(無基式)
    - A
      - a
      - b (環＝鈴)
    - B (均等取り付け)
      - b
      - c (環＜鈴)

上記のように、Ⅰ類はＡとａという要素をもち、Ⅱ類はＡとＢ、さらにⅡＡ類はａとｂ、ⅡＢ類はｂとｃという要素をもつ。それぞれの実例を示しておくと、Ⅰ類は宮崎県下北方５号横穴例(第103図１)・福岡県稲童21号墳例(２)・江田船山古墳例、ⅡAa類は福岡県稲童21号墳例・滋賀県新開１号墳例(３)、ⅡAb類は京都府沢３号墳例(４)、ⅡBb類は、奈良県新



(宮崎・下北方５号)　(福岡・稲童21号)　(滋賀・新開１号)　(京都・沢３号)

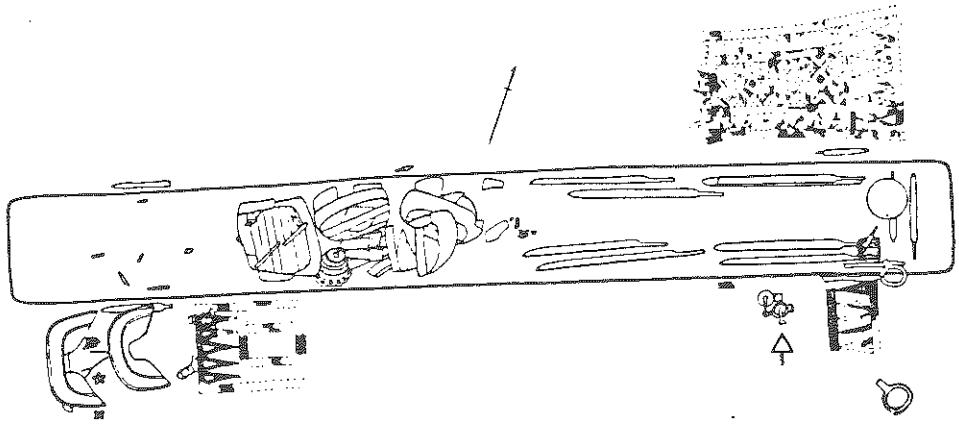
(京都・二子山南)　(奈良・新沢109号)　(埼玉・稲荷山)

第105図　三環鈴分類図(各報告書より)

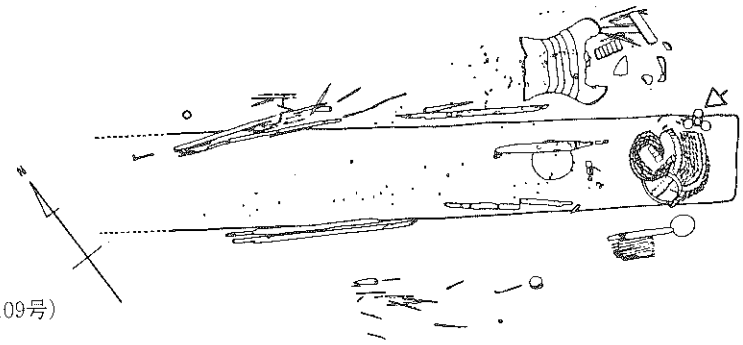
沢109号墳例（6）・埼玉県稲荷山古墳例（7）、ⅡBc類は兵庫県よわせ1号墳例・栃木県雀宮牛塚古墳例などがある。二子山南墳例はⅡBb類となる。

三環鈴の形態の変化は、Ⅰ類→ⅡAa類→ⅡAb類→ⅡBb類→ⅡBc類の順であろうことはほぼ想定できるが、各類が必ずしも時間を追って出土している訳ではない。三環鈴出土古墳の年代は、概ね5世紀前半から6世紀前半の限られた時間幅の中にその中心があり、このことが各類と出土時期とが必ずしも整合しない理由であろう。

但し、各類を地域別に分け、その広がりをみると、Ⅰ類・ⅡAa類・ⅡAb類・ⅡBb類は西日本に主に分布し、ⅡBb類・ⅡBc類は東日本に分布の中心を置く傾向が読みとれる。したがって、三環鈴の伝播は、西から東への動きであったことは確かであり、やや特殊例ではあるが、7世紀前半とされる群馬県観音山古墳[註71]の時期まで東日本では使用されている。ⅡB類



（滋賀・新開1号）



（奈良・新沢109号）

第106図　三環鈴の出土位置図（各報告書より）

のような大ぶりの三環鈴が東日本(特に関東)で盛行するのは、三環鈴のみの問題というよりは、鈴鏡や鈴杏葉などの分布状況に認められる関東における「鈴」に対する嗜好の強さが背景にあると思われる。

次に、三環鈴の出土位置について少し概観しておきたい。

現在、その出土位置が判明している三環鈴は18例程を知ることができる。この中で馬具(棺外副葬)と伴出した例が12例あり、最も多い。馬具の部位での伴出関係を見ると、滋賀県新開1号墳では轡・輪鐙と伴に三環鈴が2個出土しており、埼玉県稲荷山古墳では轡の引手下より出土している。同様に轡と伴う例は栃木県十二天塚古墳や雀宮牛塚古墳などが挙げられる。このように見ると、三環鈴は本来、馬具の一部であったことは確かであり、轡部分か引手もしくは手綱に装着されることがあった部品と理解できる。但し、それは決して普遍的ではなく、かつ馬具として必要不可欠なものではない。

三環鈴は、おそらく環に革帯を巻き垂下させている。Ⅰ類・ⅡA類の最も幅を広くとった環部分が、しばしばすり減りにより細くなるのは、このためであろう。すなわち、Aという要素は、垂下させるための帯装着部の確保が要因と判断できる。Ⅰ類・ⅡA類は、ⅡB類と比べ小さく、三環鈴自体にその意義を持たせたというより、発する「音」が重要な要素であったと考えられる。その意味において、三環鈴は単なる装飾品ではなく、実用性を有す馬具であることが本来の姿と想定できる。

大型化したⅡB類も、馬具として使用されている例が多く、一貫して本来の用途に用いられるが、ⅡB類には環のすり減りを明確に残す例はほとんどない。この現象は、ⅡB類の馬具装着がⅠ類・ⅡA類から変化したと読み取ることができる。Ⅰ類であれⅡB類であれ、常時一定個所に帯が巻かれるならば、必ずすり減りは起る。ⅡB類の埼玉県稲荷山古墳例が轡と伴出したことを考えると、それは装着部位の変化ではなく、装着の方法の変化か装着時間の変化、すなわちすり減りが余りない帯の巻き方への変化か常時装着をしなくなったかであろう。

ここで、注意しておきたいのは、ⅡB類には馬具以外の使用を想定できる例が存在するということである。

二子山南墳では、1号短甲胴内に三環鈴が置かれ、奈良県新沢109号墳では棺内頭部の挂甲に伴って三環鈴が出土した。また、長野県金鎧山古墳・兵庫県よわせ1号墳・大阪府南天塚古墳では、被葬者の装着が想定できる。これらでは、本来馬具の一種であるべき三環鈴が転用されているのである。

このような現象がⅡB類に認められるのは、馬具における三環鈴装着の変化と無縁ではあるまい。

検討不充分な中で余り断定的な意見を述べるべきではないが、おそらくは、ⅡB類の着脱可能な馬具への装着方法が、他への転用という現象を引き起こしたであろうことを想定し、また、その変化の背景にあったのは、ⅡB類における三環鈴の大型化、すなわち発する「音」と供に三環鈴自体の意義が増したことを考えたい。端的にいえば、音を発する実用的な三環鈴から装飾品としての三環鈴への質的変化である。

ⅡB類が関東に盛行するのは、このような三環鈴自体の性格の変化が影響したであろうし、逆に大きく普及できなかったのは、本来は鈴は伴わない鈴杏葉や鈴付鏡板などの鈴付馬具の案出によって、三環鈴の位置が後退したことによるものであろう。

このような三環鈴の我が国での流れを想定できるのならば、二子山南墳出土の三環鈴は、三環としては後出的なものであり、馬具としての用途をはずれ、甲冑に装着された装飾的なものということができよう。

D　年　　代

南墳の報告の最後として、年代を考えておきたい。詳しくは「考察」にゆずることをして、ここでは概括的に述べておく。

南墳の年代を推し測るときに有効な遺物は、甲冑・馬具・鉄鏃であろう。

短甲・衝角付冑は、すべて鋲留式を採用しており、挂甲が伴っている。馬具は、古式のf字形鏡板を持つ轡と小型の剣菱形杏葉を伴う。鉄鏃は、片刃の長頸鏃を主体としている。

このような組み合わせは、一般的に5世紀後葉の中で位置づけられるものであり、他の遺物とも矛盾しない。

（註）

〔1～24頁〕

註1　本書の記述にあたって、遺構については実測図・写真より確認できる状況についてはなるべく記述をし、不明な部分については記述しないか、可能性を示すこととした。遺物については、調査後直ちに実測されたものが数十点程あり、疑問がない限りこの図を使用し、他は整理作業再開後の測図を使った。但し、かつての実測図に疑問があり、それが既に実物でも確認できなくなったものに関しては、その旨を明記することとした。他の疑問点についても、調査時の見解を中心に記述しながら、問題点を指摘するようにした。

註2　巨椋池の古代の形状・大きさについては、近年の周辺部での調査によって、従来の復元案に疑問が提示されつつある。干拓前の池底標高は10～11mとされるが、対岸で調査された木津川床遺跡では標高8m程で古墳時代の集落が発見されている。池は、水量によって範囲が大きく変動する不安定なものであった可能性が高い。

註3　瀬田川が宇治川と名を変えるのは、現在、宇治橋上流2km地点にある天ケ瀬ダムからである。

註4　桐原日桁宮、現宇治神社周辺がその故地と伝える。

註5　『古事記』では、「丸邇之比布礼能意富美の女、名は宮主矢河枝比売」とし『日本書紀』では「和珥臣の祖宮主宅媛」とする。

註6　『古事記』では「宇遅能和紀稚子」とする。稚子は「宇治天皇」とも記されることがある。

註7　大山守の命の母は「品陀真若王の娘高城入姫」、仁徳の母は「仲姫命」。

註8　「この蟹や　何処の蟹　百伝う　角鹿の蟹　横さらふ　何処に到る　伊知遅島　美島に著　鳴鳥の　潜き息衝き　しなだゆう　佐佐那美道を　すくすくと　吾が行ませばや　木幡の道に　遇はしし嬢子　後姿は　小楯ろかも　歯並は　椎菱なす　櫟井の　丸邇坂の土を　初土は　膚赤らけみ　底土は　に黒き故　三栗の　そつ中の土を　頭著く　真火には当てず　眉画き　濃に書き垂れ　遇はしし女　かもがと　吾が見し児ら　かくもがと　吾が見し児に　うただけだに　向ひ居るかも　い副ひ居るかも」

註9　隼上り瓦窯跡（7世紀前半）では、北野廃寺創建瓦の楔形間弁高句麗系軒丸瓦と同笵品が出土しており、正道廃寺でも同文のものが創建瓦として使用されている。この瓦当文は、山城の飛鳥時代の古瓦の状況からみて秦氏に深く関係するものと考えられる。記録からでは、宇治・久世両郡に秦氏の足跡を明瞭に窺うことはできないが、宇治郡の隣り紀伊郡が秦氏本拠の一部であったことと、この瓦の状況からは、7世紀前半に宇治・久世郡域にその勢力が広がっていた可能性は充分あると考えている。

註10　京都府埋蔵文化財調査研究センター「羽戸山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊、昭和57年。

註11　宇治市教育委員会「平成元年度五ケ庄二子塚古墳発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第15集』、平成2年。

註12　同　「寺界道遺跡発掘調査概要」『　　同　　第10集』、昭和61年。

註13　城陽市教育委員会「森山遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財発掘調査概報第6集』、昭和52年。

註14　京都府埋蔵文化財調査研究センター「羽戸山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第2集』、昭和57年。

註15　京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選（二）』、昭和61年。

註16　宮内庁書陵部陵墓課「巨幡墓の境界線崩壊防止工事の立会調査」『陵墓関係論文集』、昭和55年。

註17　宇治市教育委員会「瓦塚古墳発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第11集』、昭和63年。

註18　昭和60年に前方部側で幅12m以上の外濠を検出。『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第10集』、昭

和61年。

註19　藤原氏の入内した娘等20人の墓所として、37地点を管理。木幡は平安期での藤原一門の墓所。明治の陵墓比定時に藤原氏関係墳墓とともに後期古墳120基も陵墓となる。

註20　宇治市教育委員会「隼上り瓦窯跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第３集』、昭和58年。

註21　　同　　『大鳳寺跡発掘調査報告』、昭和62年。

註22　　同　　「岡本廃寺・岡本遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第10集』、昭和61年。

註23　柴田実「宇治古代登窯遺阯」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第14冊』、昭和８年。

註24　「浼浼横流　其疾如箭　修修征人　停驂成市　欲赴重深　人馬亡命　従古至今　莫知杭竿
世有釋子　名日道登　出自山尻　恵滿之家　大化二年　丙午之歳　構立此橋　濟度人畜
卽因微善　爰發大願　結因此橋　成果彼岸　法界衆生　普同此願　夢裏空中　導其苦縁」

点印が原碑文、他は補刻。

註25　宇治郡衙については、『山科郷古図』に見える地名より五ケ庄古川・西田一帯に比定されている。また、同古図には付近に「大津里」という地名を残すことから、郡衙に接していた岡屋津は郡大津の重要な港と推定されている。

註26　太閤堤の一部は、今も宇治川堤防として機能し続けている。

註27　中村徹也「宇治二子山南墳出土の短甲と挂甲」『考古学雑誌第55巻第４号』、昭和45年。

註28　搬出数量は、金属製品約2500点、埴輪整理箱85箱分、地形等測量図９枚、遺構実測図61枚、遺物実測図35枚、その他諸図面28枚である。

〔25～94頁〕

註29　宇治市教育委員会『宇治二子山古墳』昭和43年では、直径42ｍとするが、復元径は40ｍが妥当である。

註30　墳丘斜面では、随所に拳大の河原石が認められたという。

註31　註29報告書では、南墳に規制されたため後に造られた北墳埴輪列が直線的になったと判断しているが、これは、遺物から明らかなように誤解釈である。

註32　埴輪の据え付けについては、明解な解釈は当時の記録にはない。写真に写る布掘状土色変化より判断した。

註33　註29報告書でも、東槨の方が古いことは土層より確認したとしている。但し、工程差なのか時期差なのかについては言及していない。

註34　本調査での北は磁北か真北か記録はない。状況的に前者と思われる。

註35　写真を見る限り、南木口部には粘土がやや内に入り込んでおり、その粘土除去後に鉄斧が見つかっている。この粘土を木口おさえと考えれば、鉄斧は木口板の外に当初より存在したこととなる。

註36　近世陶磁器類が整理箱２箱分出土している。また、中世墓出土品は21頁に図示した。

註37　鉄鏃・刀が保存処理後の実測。他は、出土直後の実測図のため、現状とは形がやや異なる。

註38　鉄斧・鎌の一部を除き、保存処理後の実測図。鉄斧には極端な剝離はなかった。

註39　梅原末治『久津川古墳研究』、大正９年。

註40　鉄斧・鎌の一部を除いて保存処理後の実測図である。

註41　甲冑の実測図は、保存処理前の測図である。冑については、調査後直ちに奈良国立文化財研究所で仮保存処理が実施されていた。

註42　豊中市教育委員会『摂津豊中大塚古墳』、昭和62年。

註43　末永雅雄・森浩一『眉山周辺の古墳』「徳島県文化財調査報告書第９集」、昭和41年。

註44　鉄鏃は保存処理後の実測図、他は出土直後の実測図である。

註45　鎌と鉇の完形品を除き、他は保存処理後の実測図である。

註46　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－２、昭和53年。

註47　註29報告書では、南墳の墳頂・斜面・裾部で円筒埴輪片と裾部で蓋形埴輪が出土したとしている。第59図４・５については、この南墳裾出土の蓋形埴輪の可能性がある。但し、前報告書のいう蓋形が、どのような個体であるのか判然としないため、収納状況より埴輪すべてについては一応北墳のものとした。南墳出土の円筒埴輪については、現状ではいずれを指すのか不明である。

註48　註31参照。

註49　註33参照。

註50　鉄柄手斧については、下記の文献に詳しい。また、本件では中司照世氏からご教示をえた。
久野邦雄「古墳出土鉄斧について」『古代学研究』29、昭和36年。
橿原考古学研究所『和爾上殿古墳』「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告23」、昭和47年。
中司照世・川西宏幸「滋賀県北谷11号墳の研究」『考古学雑誌』66－２、昭和55年。
東潮「東アジアにおける鉄斧の系譜」『古文化論集』上、昭和57年。
宮沢公雄「鉄製柄付手斧について」『帝京大学山梨文化財研究所報告』第１集、平成元年。

〔95～146頁〕

註51　本書は、調査終了後にその概要を報告したもので、整理・検討前のものである。

註52　中世墓の磁器の可能性がある。中世墓の遺物ならば、溝埋没後に中世墓が掘削されたと判断できる。

註53　南墳ネーミングの破片は、現在の埴輪収納品の中に見あたらない。

註54　中村徹也「宇治市二子山南墳出土の短甲と挂甲」『考古学雑誌』第55巻第４号、111頁、昭和45年。

註55　江戸期の染付や陶器片が整理箱１箱分出土している。

註56　吉村和昭「短甲系譜試論」『考古学論攷』第13冊、橿原考古学研究所、昭和63年。

註57　短甲裾廻りが石膏で固定されており、錆着も著しいため、短甲を割りながら取りはずした。

註58　短甲取りはずし時に脱落したようで、本品は短甲に再固定をせず保管している。

註59　註54の報告では、尾錠の存在を報告するが、現品はない。

註60　頸甲前面と左肩甲を石膏取り上げのまま保管する。

註61　手甲小札の一部が、挂甲小札破片品と混乱し、実数把握がむつかしい。

註62　錆化が著しく、旧状はほとんど留めない。

註63　形状的に石突と見てよい。但し、矛と先を同一方向に向けて置かれており、本石突の矛部は出土していないこととなる。

註64　ワラビ手刀子の出土本数は、現状では確認できない。

註65　針については、出土時に破片化しており、正確な本数はわからない。

註66　短甲３、衝角付冑１、眉庇付冑４、頸甲２、肩甲２、脇当、篠籠手、臑当が出土。完全重兵装では１組であるが、３組分の甲冑は保有している。

註67　短甲５、挂甲、衝角付冑５、篠籠手、頸甲、肩甲が出土。５組分の甲冑を保有する。

註68　杉山晋作・田中新史『古墳時代研究－千葉県君津市所在八重原１号墳・２号墳の調査－』、古墳時代研究会、平成元年。

註69　石山勲「九州出土の環鈴について」『古代探叢』、昭和55年。
関西大学「考古学資料図鑑」、昭和48年。
黒田恭正「綾部市沢三号墳出土の環鈴」『京都考古』第27号、昭和57年。
黒田恭正「馬具の出土状態について」『歴史と伝承』、昭和63年。

註70　註69及び下記より転載した。
鈴木博司「新開古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第12冊、昭和35年。
埼玉県教育委員会『稲荷山古墳』、昭和55年。

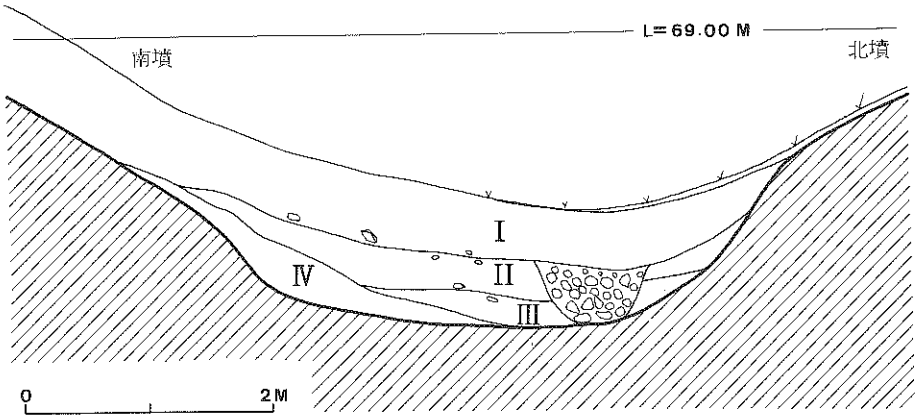
橿原考古学研究所『新沢千塚古墳群』、昭和56年。
註71　群馬県教育委員会『上野国綿貫町観音山古墳発掘調査概報』、昭和43年。

（補記）

南・北両墳間の裾部に堆積した土層について

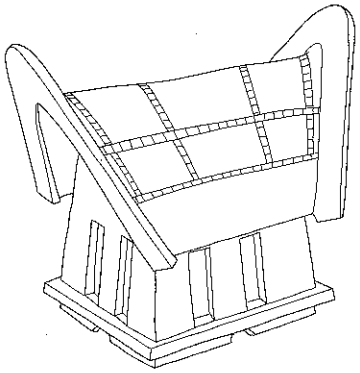
京都府教育委員会 記念物係長　杉　原　和　雄

この古墳群は、二子山の名が示すとおり、中型の墳丘２基が連接しているものである。本文に記述されているとおり、両墳とも、自然地形を利用し、地山を削ることによって成形し上部に盛土を施して、墳丘を仕上げている。両墳間は、当然、鞍部となっているが、地表では、南墳の裾が張り出して見え、各々の裾は明確ではない。この鞍部にトレンチを設定することは、両墳の裾部を確認できるだけでなく、土層の堆積状況によっては、墳丘築造の前後関係も明らかにすることが期待された。下図は、トレンチの西壁の地層図である。表土下に上からⅠ層（暗褐色土）Ⅱ層（黄褐色土）Ⅲ層（暗黄褐色土）Ⅳ層（赤褐色粘性土）が堆積し、その下は地山である。裾部は地山を削って整形し、裾間は約３ｍを測る。北墳の埴輪は地山を少し掘り込んで樹立している。層位の示すところ、まずⅣ層が南墳側から流れ込み、埴輪の下半部を埋め、その上に埴輪片を含むⅢ・Ⅱ層が順々にほぼ水平に堆積する。Ⅱ層の上面から溝が切り込まれているので、一定期間ここが地表であったことが判る。その後南墳の盛土であるⅠ層が厚く堆積して現地表となる。23年ぶりに見たこの図は、層位が単純にすぎ、筆者たちの観察がやや甘かったのではというのが実感である。墳頂部からの眺望はすばらしく、雪景色や一面に広がるレンゲ畑の美しかったことが思い出される。



補図　南・北両墳間土層断面実測図

考　　察



Ⅵ 考　　察

1　二子山北墳・南墳出土の甲冑をめぐって

小　林　謙　一

二子山北墳では、西槨から長方板革綴短甲が三角板革綴衝角付冑・革綴頸鎧・肩鎧をともなって出土している。一方、二子山南墳では、２領の短甲が出土している。三角板鋲留短甲は例の少ない前胴に横矧板を用いたもので、鋲留頸鎧・小札肩鎧・革製漆塗草摺をともなっており、短甲内には三環鈴が納められていた。横矧板鋲留短甲は、鉄地金銅張方形蝶番金具をそなえたもので、短甲内には挂甲と横矧板鋲留衝角付冑が納められており、付属具としては鋲留頸鎧・肩鎧・篠籠手がある。以下、二子山北墳・南墳で出土した甲冑との関連で、古墳時代の甲冑をめぐるいくつかの問題点について検討を加えてみたい。

長方板革綴短甲　長方板革綴短甲の年代観や甲冑製作技術における位置づけ等については、従来の研究[註1]により、一応のまとまりをみている。しかしその後、資料が増加しただけでなく、前胴竪上第三段の有無により、長方板革綴短甲のなかに、時期差を認めうるとの指摘[註2]もなされており、議論の余地がまだ残されている。そこで、長方板革綴短甲とそれを出土する古墳について、別の視点から若干の検討を加えてみることにする。

長方板革綴短甲は32の古墳から32領の出土が知られている。すなわち、１古墳あるいは１埋葬施設からの出土は１領に限られているのが現状である。その分布は関東から九州にまでおよんでいるが、そのうちの約半数の古墳は畿内およびその周辺地域にある。また、長方板革綴短甲が古墳から出土する場合、

Ａ：短甲だけ単独で出土するもの

Ｂ：付属具はないが、冑と組み合って出土するもの

Ｃ：冑はないが、付属具として頸鎧・肩鎧をともなうもの

Ｄ：冑と付属具をともなうもの

以上４つの場合がある。なお、長方板革綴短甲にともなう鉄製付属具としては、現在のところ頸鎧・肩鎧に限られている[註3]。したがって、長方板革綴短甲の装備としては、Ｄをもって完全な武装ということになる。二子山北墳の場合は、長方板革綴短甲の装備としては、もっとも完備していることになる。現在のところ、Ａは14例、Ｂは４例、Ｃは６例、Ｄは二子山北墳を含めて８例で、半数以上の例で冑もしくは付属具、あるいはその両者をともなっている[註4]。

長方板革綴短甲の出現時期については、岐阜・長良竜門寺古墳や三重・石山古墳にみられ

るように、中国製の三角縁神獣鏡や碧玉製腕飾類をともなう古墳があることから、遅くとも4世紀末には出現していたと考えられる。一方、下限については、いま少し詳しく検討してみる必要がありそうである。つまり、長方板革綴短甲を出土する古墳の副葬品のなかに、時期差を示すいくつかの特徴的な遺物があり、そこに新古の二相を認めることができるのである。古い様相を示す副葬品としては、石釧等の碧玉製腕飾類、あるいは中国鏡がある。これに対し、新しい様相を示す副葬品としては、須恵器、馬具、長頸鏃あるいは鋲留甲冑などがある。これらを手がかりにして、長方板革綴短甲を出土する古墳を二つのグループにわけることができる。古いグループは、奈良・池ノ内5号墳、三重・石山古墳、岐阜・長良竜門寺古墳などで、これらは竜門寺古墳を除き、短甲のみの出土である点が注意される。他の多くは、新しいグループに属し、短甲装備の内容には、既述したA～Dのいずれもがある。そのなかには、新しい要素と指摘されている竪上第三段を有する長方板革綴短甲を出土する古墳も含まれている。副葬品の内容が比較的明らかな大阪・岡本山A3号墳では須恵器、大分・岬1号墳では曲刃鎌、U字形鋤先、細根式鉄鏃が共伴しており、竪上第三段を有することが、長方板革綴短甲において時期的に新しい要素であることを裏付けている。

冑と組み合う例は12例ある。長方板革綴短甲と組み合う冑としては、本来的には長方板革綴衝角付冑と考えられるのであるが、この冑は宮崎県東諸県郡国富町塚原地下式横穴A号出土のわずか1例しかなく[註5]、しかも、それは三角板革綴短甲と組み合っている。実際の組み合せとしては、9例までが三角板革綴衝角付冑で、残る3例は福井・天神山7号墳の竪矧細板革綴衝角付冑、宮崎・浄土寺山古墳の三角板革綴眉庇付冑、奈良・兵家12号墳の小札鋲留眉庇付冑となる。そのなかで、竪矧細板革綴衝角付冑、三角板革綴眉庇付冑は、眉庇付冑の影響を受けて製作された可能性が考えられるものである。小札鋲留眉庇付冑をともなう例も含めて、これらを出土する古墳は、副葬品の内容などからみても、時期的に降って矛盾するものではない。上述してきたような例からは、長方板革綴短甲が5世紀中葉前後まで防禦具として機能していた可能性が考えられるであろう。

これに対し、三角板革綴短甲は、現在のところ、長方板革綴短甲の倍以上の60を超す古墳から80例近い出土が知られている。その半数以上が畿内およびその周辺地域での出土である点は、長方板革綴短甲の場合と同じであるが、例は少ないが、1古墳あるいは1埋葬施設から複数出土することがある点で、長方板革綴短甲と少し異なる。ただ、それも畿内およびその周辺地域にほぼ限られるといってよい状況である。三角板革綴短甲は三角板革綴衝角付冑と組み合って出現したと考えられ、また、三角板革綴短甲を出土した古墳の副葬品の内容から、その出現は長方板形式より若干遅れるとみられる。

冑と短甲の組み合せについてみると、三角板革綴衝角付冑は長方板革綴短甲、三角板革綴

短甲のいずれとも組み合っている。また二子山北墳、大阪・豊中大塚古墳、徳島・恵解山2号墳[註6]で出土している三角板革綴衝角付冑は、竪眉庇をさらに前方に折り曲げ、そこに三角形の装飾をつけるという共通の特徴を有している。おそらく同一の技術系譜にあり、ほぼ同時期に製作された可能性が高いと考えられる。ところが、短甲は二子山北墳が長方板革綴式であるのに対し、他の2古墳は三角板革綴式である。一方、2例しかない竪矧細板革綴衝角付冑の場合、福井・天神山7号墳出土例は長方板革綴短甲、石川県能美郡辰口町茶臼山9号墳出土例[註7]は三角板革綴短甲と組み合って出土している。これらの事実は、両革綴短甲が平行して存続していたことを示すものである。

ところが、既述したように長方板革綴短甲は、ほとんどが革綴冑、それも三角板革綴衝角付冑と組み合うのに対し、三角板革綴短甲の場合は、革綴冑と鋲留冑が、ほぼ同じ割合で組み合っている。長方板形式が横矧板形式に系譜的につながる可能性を否定するものではないが、この点において、両革綴短甲の存続期間の下限に若干ずれが生じる可能性が認められるのである。長方板革綴短甲の古いグループに冑がともなわないことは、三角板形式が長方板形式より出現がやや遅れることを暗示するものであり、したがって、長方板革綴短甲が冑をともなうのは、やはり新しい様相といえるのであろう。

上述してきたような事実からは、両形式の革綴短甲は5世紀前半を中心に平行して存続しているのであるが、その出現時期に差があるだけでなく、その盛行期間にも若干の差を認めることができるであろう。

短甲と付属具　宇治二子山北墳・南墳で出土した短甲には、冑だけでなく、頸鎧・肩鎧をはじめとする付属具がともなっている。挂甲も含めて、甲冑を出土する古墳は、北は東北から南は九州まで広く分布しており、その数は約600基に及ぶ。これには、甲冑を出土したと伝えるものまで含まれているため、甲冑形式などの内容の明らかなものとなると、古墳の数は約470基、短甲約450領、挂甲約130領となる。そのなかで、冑をともなう例は、短甲の約45％、挂甲の約25％、なんらかの付属具をともなう例は、短甲の約35％、挂甲の約15％となり、冑や付属具をともなう甲が限られたものである点が注意される。さらに、冑と付属具を装備したものとなると、短甲では30％、挂甲では10％に満たない。冑や付属具が出現した以降にも甲を単独で出土する例がかなり認められるので、このような甲冑装備の内容の差は、時期差に基づくものではない。また、挂甲については、6世紀以降、関東の古墳から集中的に出土し、地域的に偏在しているだけでなく、短甲と同一に扱いにくい側面があるので、ここでは短甲に限って論を進めることにする。[註8]

短甲は、全出土量の約1/3が畿内、約1/4が九州で出土し、それに次ぐ畿内周辺（近江・丹波・播磨・紀伊など）や関東での出土は1/10にも満たない。ところが、冑や付属具を備えた短甲

の出土例は、これと必ずしも同じ傾向を示すものではない。冑や付属具をともなう短甲の出土点数についてみると、やはり畿内に多く約130例の半数以上を占める。畿内に次ぐ九州が約1/6、畿内周辺が約1/10、北陸、山陽、中部以東ではそれぞれ数例しかない。一方、各地域ごとでの比率をみても、畿内では出土短甲の半数近くが冑と付属具をともなっているのに対し、畿内周辺や北陸では約1/3、次いで四国・山陽となり、九州では約1/6となる。もっとも、この現象には、ほぼ畿内に集中するといえる甲冑の大量副葬の内容が、基本的には短甲に冑と付属具がともなっているという事実も反映しているのであるが、その点を差し引いてもなお、そこには量的な面ばかりでなく、質的な違いも指摘できるのである。また、革綴短甲と鋲留短甲にわけてみても、畿内の優位性は動かしがたいのであるが、畿内周辺や山陽などでは革綴短甲において冑や付属具をともなう例が比較的多いのに対し、北陸では鋲留短甲の例が革綴短甲の例の倍以上を占めている。さらに、関東・甲信越では、すべて鋲留短甲との組み合せになる。このような畿内を中心とする分布状況からも、甲冑が配布された背後には、やはり政治的配慮の存在したことがうかがえるであろう。

（こばやし・けんいち、奈良市教育委員会・文化課長）

(註)

註1　野上丈助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」(『考古学研究』14－4　1968)
　　小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統」(『考古学研究』20－4・21－2　1974)

註2　吉村和昭「短甲系譜試論－鋲留技法導入以後を中心として－」(橿原考古学研究所紀要『考古學論攷』第13冊　1987)

註3　鉄製付属具ではないが、三重・わき塚1号墳や岡山・月の輪古墳では、革製漆塗草摺が出土している。有機質を素材とするものは、古墳の副葬品としては残りにくいため、その普及については慎重に検討していかなければならない。

註4　鋲留甲冑・挂甲も含めた複数の甲冑を出土し、甲冑の確実な組み合せが判別しにくいものがある。その場合、出土状態を重視し、次に鉄板結合方法の違いなどを一応の基準とした。後述する甲冑装備の内容に関して検討した場合も同様である。

註5　田中茂「国富町塚原地下式横穴A号出土遺物－長方板革綴衝角付冑他－」(『宮崎考古』第3号　1977)

註6　森浩一編『眉山周辺の古墳－恵解山古墳群・節句山古墳群－』(『徳島県文化財調査報告書』第9集　1966)

註7　辰口町教育委員会『茶臼山9号墳現地説明会資料』　1989

註8　挂甲の場合、基本的には付属具をともなわずに用いられた可能性も考えられる。奈良時代のことになるが、『東大寺献物帳』の記載によれば、短甲が付属具等も含めて1具と数えられるのに対して、挂甲はそれだけで、つまり冑や付属具をともなわずに1領と数えている。また、襟付短甲はそれ自体が付属具をともなっているといえる。挂甲も必然的に草摺をともなうものであるが、襟付短甲と同一に扱うことはできない。

長方板革綴短甲出土古墳一覧表

古　墳　名	墳　形	内部主体	共伴甲冑・付属具	主な副葬品	文献
群馬県太田市大字鳥山小字八幡 鶴山古墳	前方後円墳	竪穴式石室	横矧板鋲留短甲2 小札鋲留衝角付冑 小札鋲留眉庇付冑	刀・剣・斧・鎌・刀子・石製模造品・盾隅金具・ツキヒガイ	3
長野県松本市本郷浅間桜ケ丘古墳	円　墳	竪穴式石室	三角板革綴衝角付冑 頸鎧	勾玉・丸玉・小玉・臼玉・櫛・金銅天冠・刀・剣・矛・鉄鏃	18
静岡県磐田市安久路2号墳	円　墳	粘土槨	三角板革綴衝角付冑	石釧・櫛・刀・剣・刀子	33
岐阜県岐阜市長良竜門寺古墳	円　墳	木棺直葬（礫槨？）	革綴頸鎧・肩鎧	舶載三角縁神獣鏡・五獣鏡・舶載方格規矩鏡・勾玉・管玉・丸玉・小玉・棗玉・臼玉・滑石勾玉・石釧・櫛・刀・鉄鏃・斧・鎌・刀子・錐・針・鑿・毛抜様鉄製品・砥石	16
石川県羽咋市柴垣町円山1号墳	円　墳	箱形石棺		刀・剣・刀子	22
福井県福井市篠尾町天神山7号墳 第1主体部	円　墳	粘土槨 割竹形木棺	竪矧細板革綴衝角付冑 革綴頸鎧・肩鎧	仿製鏡・竹櫛・勾玉・平玉・金製垂飾付耳飾・刀・剣・矛・鉄鏃・胡籙・鏃袋・弓・盾・斧・ピン状鉄器	29 34
福井県遠敷郡上中町堤・下吉田向山第1号墳	前方後円墳	横穴式石室 …… 副葬用施設 木箱直葬	三角板革綴短甲2	仿製内行花文鏡・鋸歯文鏡・勾玉・管玉・ガラス小玉・琥珀玉・金製垂飾付耳飾・漆塗竹櫛・金銅製三輪玉・刀・剣・矛・槍・鉄鏃・刀子・鉸具・盾隅金具／刀・槍・矛・鉄鏃・銀製金具	33
三重県上野市才良石山古墳東槨	前方後円墳	粘土槨		鏡・勾玉・管玉・滑石小玉・棗玉・琴柱形石製品・櫛・刀・剣・銅鏃・鉄鏃・斧・鉇・鍬・扶・弓・靫・盾・巴形銅器・石製模造品（刀子・斧・鑿・鉇・鎌）	5 13
三重県名張市新田字女良塚 わき塚1号墳	方　墳	木箱直葬	三角板革綴衝角付冑 革綴頸鎧・肩鎧 革製漆塗草摺？	仿製四獣鏡・滑石双孔円板・滑石臼玉・漆塗櫛・剣・鉄鏃・斧・鍬・鎌・鋸・鉇・錐・刀子	23
滋賀県栗太郡栗東町安養寺　椿山古墳	帆立貝式古　墳	前方部粘土槨	頸鎧・肩鎧	刀・剣・鉄鏃・斧・鍬・槍・革製漆塗盾	7 11

古　墳　名	墳　形	内部主体	共伴甲冑・付属具	主な副葬品	文献
滋賀県栗太郡栗東町安養寺 新開第1号墳南遺構	?	木棺直葬	三角板革綴短甲 三角板鋲留短甲 菱形矢羽根形板鋲留短甲 三角板革綴衝角付冑 竪矧細板鋲留眉庇付冑2 小札鋲留眉庇付冑2 革綴頸鎧2・肩鎧2 脇当?・篠籠手・臑当	仿製神獣画像鏡・ 黒漆塗竹櫛・管玉・ 小玉・刀・剣・槍・矛・ 石突・鉄鏃・漆塗盾・鑿・ 鉇・金銅製帯金具・ 金銅製鉸具・ 金銅製鏡板付轡・ 鞍金具・ 木心鉄板張輪鐙・ 三環鈴・馬鐸・ 銀製飾金具・ 十字形蛇行鉄器	10
京都府宇治市宇治山本二子山北墳西槨	円　墳	粘土槨	三角板革綴衝角付冑 革綴頸鎧・肩鎧	本報告書参照	
京都府八幡市八幡石不動古墳南粘土槨	前方後円墳	粘土槨 割竹形木棺		舶載画文帯神獣鏡・ 碧玉石釧・碧玉管玉・ 滑石棗玉・ガラス小玉・ 刀・剣・刀子・鍬	6 19
奈良県桜井市池ノ内池ノ内5号墳第1主体	円　墳	組合式 木棺直葬		変形獣形鏡・石釧・ 滑石勾玉・滑石棗玉・ 滑石切子玉・滑石臼玉・ 櫛・刀・鉄鏃・斧・刀子	21
奈良県橿原市川西町新沢166号墳	円　墳	木棺直葬	頸鎧	馬具(轡・鏡板・飾金具) 鉄鏃・須恵器	26
奈良県北葛城郡当麻町大字兵家 兵家12号墳	円　墳	箱式木棺 直　葬	小札鋲留眉庇付冑 革綴頸鎧・肩鎧	碧玉管玉・滑石臼玉・ 石棒状石製品・ ガラス小玉・剣・鉄鏃・ 刀子・斧・鎌・鉇・砥石・ 須恵器	24
大阪府富田林市宮町3丁目 鍋塚古墳	円　墳	土　壙		鉄鏃・(鏡・石釧・石製刀子・有孔石製品の出土を伝える)	17
大阪府藤井寺市道明寺盾塚古墳	帆立貝式 古　墳	粘土槨 割竹形木棺	三角板革綴短甲 三角板革綴衝角付冑 頸鎧・肩鎧・頼当	仿製獣形鏡・石釧・ 碧玉勾玉・碧玉管玉・ 硬玉棗玉・銅釧・銅環・ 竹櫛・鈇子・筒形銅器・ 刀・剣・槍・鉄鏃・刀子・ 斧・鎌・鉇・鑿・錐・手鎌・ 漆塗盾	35
大阪府和泉市上代町和泉黄金塚古墳西槨	前方後円墳	粘土槨 組合式木棺	三角板革綴衝角付冑 革綴頸鎧・肩鎧	舶載画文帯神獣鏡・ 硬玉勾玉・滑石勾玉・ 碧玉管玉・硬玉棗玉・ 刀・剣・銅鏃・鉄鏃・鞍	4

古　墳　名	墳　形	内部主体	共伴甲冑・付属具	主な副葬品	文献
大阪府堺市旭ケ丘中町4丁 七観古墳第二槨	円　墳	木棺直葬	三角板革綴短甲 三角板革綴衝角付冑2 鋲状鉄製品3 (革製衝角付冑2) 革綴頸鎧・肩鎧2 …… 三角板革綴短甲3＋ 三角板鋲留短甲 三角板革綴衝角付冑4 竪矧細板鋲留衝角付冑 三角板革綴頸鎧2 革綴頸鎧2・肩鎧 襟状鉄製品・草摺懸板	槍・鉄製柄付手斧・ 金銅製帯金具 …… 素環頭大刀・刀・剣・矛・ 鉄鏃・斧・鉇・刀子・轡・ 鐙具	1 12
大阪府高槻市岡本山 A3号古墳	円　墳	木棺直葬		刀・鉄鏃・漆塗盾・ 須恵器・土師器	28
大阪府豊中市桜塚4丁目 大塚古墳第2主体東槨	円　墳	木棺直葬	三角板革綴襟付短甲2 三角板革綴衝角付冑2 革綴頸鎧・肩鎧 革製漆塗草摺	仿製方格規矩獣文鏡・ 竪櫛・刀・剣・蛇行剣・ 槍・刀子・盾	31
兵庫県小野市王子町 王塚古墳	円　墳	竪穴式石室 割竹形木棺	三角板鋲留短甲 小札鋲留眉庇付冑 肩鎧	仿製六獣鏡・ 碧玉製三輪玉・刀・槍・ 矛・鉄鏃・刀子	8
鳥取県鳥取市古郡家字 上ノ山 古郡家1号墳第3主体	前方後円墳	礫　床 箱式棺		仿製素文鏡・漆塗竹櫛・ 剣・鉄鏃・刀子・鉇・錐・ 針・土師器壺	14
岡山県岡山市門田操山 旗振台古墳北粘土槨	方　墳	粘土槨 割竹形木棺	三角板革綴衝角付冑 頸鎧・肩鎧	刀・剣・槍・鉄鏃・ 針状鉄器・漆膜	15
岡山県総社市井尻野 佐野山古墳	?	箱式石棺	三角板革綴衝角付冑	管玉・小玉・櫛・剣・ 鉄鏃・刀子・鉇	30
岡山県久米郡棚原町飯 岡字倉見 月の輪古墳	帆立貝式 古　墳	礫　床 粘土槨 割竹形木棺	革綴頸鎧・肩鎧 革製漆塗草摺	仿製珠文鏡・碧玉勾玉・ 碧玉管玉・刀・剣・刀子・ 鑿・鉇・鉄鏃・銅鏃・胡籙	9
山口県山口市大字吉敷 字庄下 天神山第1号古墳	円　墳	竪穴式石室	革綴頸鎧・肩鎧	刀・剣・鉄鏃・斧・鉄鋌・ 石製模造品(斧・鎌・鍬)	25
香川県綾歌郡綾南町大 字羽床下 津頭東古墳第4主体	円　墳	粘土槨		仿製四獣鏡・剣・鉄鏃・ 鍬	20
福岡県福岡市西区今宿 青木 鋤崎古墳第3号棺	前方後円墳	横穴式石室 箱形木棺		仿製四獣鏡・刀・矛・斧・ 鎌・刀子	27
大分県豊後高田市香々 地町　岬1号墳	円　墳	竪穴式石室		剣(鹿角装)・曲刃鎌・ U字形鋤先・鉄鏃	
宮崎県延岡市大貫町 浄土寺山古墳	帆立貝式 古　墳	粘土槨 割竹形木棺	三角板革綴眉庇付冑	竹櫛・刀・剣・蛇行剣・ 矛・鉄鏃・斧・鑿子	2

Ⅵ 考　　察

1：末永雅雄　「七観古墳とその遺物」『考古学雑誌』第23巻第5号　1933
2：鳥居龍蔵　『上代の日向延岡』　1935
3：尾崎喜左雄　「群馬県太田市鶴山古墳」『日本考古学年報』1（昭和23年度）　1951
4：末永雅雄・嶋田暁・森浩一　『和泉黄金塚古墳』　1954
5：小林行雄　「三重県名賀郡石山古墳」『日本考古学年報』3（昭和25年度）　1955
6：梅原末治　「山城に於ける古式古墳の調査」『京都府文化財調査報告』　第21冊　1955
7：小林行雄　「滋賀県栗太郡椿山古墳」『日本考古学年報』5（昭和27年度）　1957
8：藤沢長治　「播磨国加東郡王塚古墳」『日本考古学年報』5（昭和27年度）　1957
9：近藤義郎編　『月の輪古墳』　1960
10：西田弘・鈴木博司・金関恕　「栗東町安養寺古墳群発掘調査報告　新開古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第12冊　1961
11：滋賀県教育委員会　『滋賀県遺跡目録』　1961
12：樋口隆康・岡崎敬・宮川徙　「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』第27号　1961
13：小林行雄　『古墳時代の研究』　1961
14：古郡家古墳群調査団　「古郡家1号墳」『ひすい』85－94　1961・1962
15：鎌木義昌　「旗降台古墳」『岡山市史』古代篇　1962
16：楢崎彰一　『岐阜市長良竜門寺古墳』『岐阜市文化財調査報告書』第1輯　1962
17：井藤徹　『鍋塚古墳発掘調査概要』『大阪府文化財調査概要』　1966
18：原嘉藤・金谷克巳・大場磐雄　『信濃浅間古墳』　1966
19：京都大学文学部　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部　1968
20：松本豊胤　『古墳その2　茶臼山と津頭東』『香川県文化会館資料室別品目録』　1970
21：奈良県立橿原考古学研究所　『磐余・池ノ内古墳群』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第28冊　1973
22：古岡康暢　「柴垣古墳群」　『羽咋市史』（原始古代篇）　1973
23：森浩一・森川桜男・石部正司・堀田啓一　「三重県わき塚古墳の調査」『古代学研究』第66号　1973
24：奈良県立橿原考古学研究所　『北葛城郡当麻町兵家古墳群』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第37冊　1978
25：山口市教育委員会　『天神山古墳』『山口市埋蔵文化財調査報告』第8集　1979
26：奈良県立橿原考古学研究所　『新沢千塚古墳群』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第39冊　1981
27：福岡市教育委員会　『鋤崎古墳　1981～1983年調査概報』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第112集　1984
28：森田克行　「岡本山A3号墳」『昭和56・57・58年度　高槻市文化財年報』　1985
29：福井県立博物館　『第3回特別展　遺跡は語る－ここ20年の発掘成果から－』　1985
30：近藤義郎　「佐野山古墳」『岡山県史』第18巻　考古資料　1986
31：豊中市教育委員会　『摂津豊中大塚古墳』『豊中市文化財調査報告』第20集　1987
32：上中町教育委員会　『向山古墳群第二次調査現地説明会資料』　1988
33：磐田市埋蔵文化財センター　『安久路2・3号墳の写真集』　1989
34：中山鎮弘　「天神山7号墳」『日本古墳大辞典』　1989
35：池田市立歴史民俗資料館　『倭の五王とその時代』　1990

2　宇治二子山北墳の埴輪

川　西　宏　幸

問題の所在　埴輪研究で編年をめざすばあい、まず円筒埴輪をとりあげ、その分析に重点をおく方法が有効である。円筒埴輪は形態が単純で全形が復原しやすく、かつ存続が長期にわたって時間の経過を鋭敏に反映しているからである。もちろん、編年研究でも形象埴輪の存在を無視してよいわけではないし、形象埴輪の編年が進捗の度を加えつつあることは衆知のところである。ただ、編年にとりわけ精細さが要求されるときには、円筒埴輪に依拠すべきであり、また、本古墳のように形象埴輪の遺存状態が悪く、種類さえ認定しがたいときにも、円筒埴輪が俎上にのせられることになる。

しかし、対象を円筒埴輪に限定したとしても、抽出される問題は、むろん編年だけにとどまらない。そのひとつとして、製作に携わった工人に関することがあげられる。劣悪な遺存状態にある資料上の制約を考慮するならば、本古墳の埴輪で工人集団の実態を復原するところまではとうてい至らない。ただ、工人の保持した製作上の特色といえるものがあったのかどうか、円筒埴輪をとりあげこの点にも検討を加えようと思う。

いまこれらの問題点を念頭におき、円筒埴輪の特徴を概括すると、まず外面調整の方法として、

方式	1次調整	2次調整
A	タテハケ	B種ヨコハケ
B	タテハケ	ナ　デ
C	タテハケ	省　略
D	ナ　　デ	省　略

の4種が看取され、外面調整は、大別すると、これらのいずれかの方式に該当する。ただし精細にみると、調整面のごく一部にヨコハケやナデを加えた個体が若干ある。

調整の方法を部位にわけて観察すると、最下段の外面にはA～Dの4方式が、いっぽう中間段や最上段ではA・Cの両方式がそれぞれみとめられる。しかし、最下段調整にDの方式をとったばあい、中間段や最上段には、同じ方式か、さもなければ、1次調整にナデ、2次調整にB種ヨコハケを施す方式をとるはずである。それと視認できる例はみあたらないけれども、調整面がB種ヨコハケに被われ1次調整の技法の種類が観察できない破片のなかに、該当するものが含まれているはずである。

最下段が全高の半ば以上残存し、それゆえに外面調整の方式をほぼ誤りなく認定できる円筒埴輪20本の最下段について、方式別のうちわけを示すと、それぞれ、A方式のものは4本、

B方式のものは１本、C方式のものは10本、D方式のものは５本を数える。また、技法の如何を問わず、２次調整の有無のみを基準にして大別するならば、２次調整まで加えるA・B各方式の個体は合算して５本、１次調整にとどまるC・D各方式の個体は合算して15本を数えることになる。土中に埋置される最下段は、製作にあたって入念な配慮が怠られがちな部分であるが、２次調整の省略された個体が検出数の2/3を占めるこの結果については、のちに論評することにしたい。

タガの縦断面は整った台形を呈し、形態上の変異の幅が小さい。底径は20～22cm、最下段のタガの高さは16～18cmをはかり、いずれの寸法も画一的である。ほぼ底径が一摟手つまり拇中指咫の長さにあたり、最下段が拇人指咫の長さにあたることになるわけである。タガで区切った中間部の段幅は11～13cmをはかり、最上段の幅もまたこれに近い。

スカシ孔は同段に２個あり、対向する位置に１個ずつ配されている。円孔が大半を占め、ごく一部の個体に方孔がみられる。全形を復原しうるほど破片がそろっていないので、孔の配列は確定できない。ただ、同じ宇治市域に所在する広野町寺山金比羅山古墳の円筒埴輪と各部の寸法がほぼ等しいのでこれを参照するならば、本古墳のものは５段に復原され、一対の孔を第２・第４の各段に同向で配していたことになる。

埴輪の焼成方法を推定するには、外面における黒斑の有無がほとんど唯一の、かつ有力な手がかりになる。本古墳の円筒埴輪は外面に黒斑がみられる。また、それが外面の対向する位置にあり、あるいは一方に限られるという付着状態の相違があることも知られる。円筒埴輪にとどまらず、黒斑は形象埴輪の外面にも観察される。このような黒斑の有無は、焼成法の根本的な相違に起因しており、有黒斑の製品は野焼き、無黒斑の製品は窖窯によったと推定される。その点で、本古墳の埴輪の焼成は野焼きであったとみられる。

ところが、窖窯焼成によると思われる個体が形象埴輪の一部に混在しており、この点が注意をひく。すなわち、家形埴輪の１個には黒斑がみとめられず、須恵質に近いうえに、黒斑を有する残りの家形埴輪と較べて胎土の精良さがきわだっている。これは窖窯焼成によったとみて誤りない。また、靫とおぼしい破片については断定するところまで至らないが、窖窯で焼成した可能性を考えたい資料である。通有のばあい有黒斑品と無黒斑品とは１古墳の埴輪のなかには混在せず、このことがまた焼成法に相違のあったことを推定する根拠のひとつにもなっているのであるが、形象埴輪の一部に窖窯焼成のものを含む本古墳の埴輪の様相は、通有の例に反するようにみえる点で、問題にされてよい。この点についてもまた、後述することにしたい。

編年上の位置について　以上概括した円筒埴輪の特徴からみて、本古墳の埴輪は私案のⅢ期にあたることになる。しかし、形象埴輪の一部に窖窯焼成品を含むことは、編年上の位置

付けに微妙な影響を与えずにはおかない。すなわち、出土した形象埴輪がことごとく原位置から脱落しているので、窖窯焼成品の樹立期は、野焼き品とならぶ初葬時であってもよいし、追葬時であったと推測してもさしつかえないからである。想像を混じえるならば、埴輪の樹立を欠くとみられている南墳にも、実は若干の形象埴輪が樹立されており、問題の窖窯焼成品がその一部であった可能性も皆無とはいえない。

このことはまた、北墳の営造時期にも問題を投げかけることになる。窖窯焼成品の樹立が北墳の初葬時であったとすると、本古墳の営造は、Ⅲ期の埴輪の存続期間のなかにあって、次のⅣ期にあたる窖窯焼成の埴輪の製作をすでに開始していたときに求められる。それに対し、追葬時であったとすると、本古墳の営造がⅢ期の埴輪の存続期間に入る点は変わらないが、追葬を行っているあいだに、窖窯焼成法への転換を果たしたことになる。また、窖窯焼成品が南墳に伴なった可能性まで考慮にいれたばあいには、本古墳の営造はⅢ期の埴輪の存続期間内にあり、窖窯焼成法への転換は北墳の営造から南墳の営造に至る間に求められるのである。

ところで、窖窯焼成法の採用は畿内のなかにあっても、地域ごとで年代にいくぶんのずれがみとめられる。しかし、このずれは半世紀を超すほどの大きさではなく、5世紀中葉という年代幅のなかにほぼおさめうる程度のものであろうと思うが、なお地域ごとでつぶさに検証されなければならないばあいがある。そこで、山城における窖窯焼成法の採用時期の問題について、紙幅を借りて推考を進めてみようと思う。これは、北墳の営造時期に直結する問題でもあるが、同時に、山城一円を通覧すると、窖窯焼成法の採用を境に古墳の小型化が著しく、その点で、政治上の変動にかかわる、ないがしろにできない問題でもある。

さて、山城のなかで出土埴輪がⅢ期の古墳とⅣ期の古墳とをそれぞれとりあげ、第1表として表示した。これらの古墳のなかで、副葬品の内容が判明し、それによって営造時期の考定が可能なものといえば、Ⅲ期の欄では長岡京市勝竜寺恵解山古墳、宇治市広野町寺山金比羅山古墳、城陽市平川車塚古墳が、さらにⅣ期の欄では宇治市五ケ庄瓦塚古墳、城陽市平川青塚古墳、相楽郡木津町市坂上人ケ平7号墳があげられる。副葬品の内容が判明している古墳は以上にとどまり数少ないが、いっぽう埋葬施設の形態が知られている古墳も多くはない。

古墳編年の指標としては、埋葬施設よりも副葬品の研究成果の精細さの方に期待できるので、副葬品の面から営造時期の考定を進めることにしたい。

さて、5世紀における副葬品の変遷のなかで、鋲留式の甲冑や曲刃鎌がはじめて副葬品の一部に加わるのは、埴輪の焼成に窖窯を採用したⅣ期の開始と期を同じくする。ところが、平川車塚古墳では、三角板革綴短甲に加え竪矧細板鋲留・小札鋲留各式の衝角付冑が出土し、滑石祭器のなかに曲刃鎌を模したものが知られている。[註1] 二子山北墳では、初葬とみなされて

第1表　山城における中期埴輪の編年略表

期	古　　墳　　名
Ⅲ	鏡山　今里車塚　カラネガ岳　恵解山　二子山北　金比羅山　平川車塚　丸塚　山道　美濃山王塚　七ツ塚3　内田山A2
Ⅳ	桜谷3　宇治瓦塚　梶塚　芭蕉塚　青塚　赤塚　宮ノ平1　七ツ塚4　上人ケ平5　上人ケ平7　上人ケ平8

いる東槨出土の小型鎌のなかに曲刃式らしいもの1個が含まれ、追葬の西槨から長方板革綴短甲が出土している。この点からいえば、同古墳の埴輪に当初から窖窯焼成品が含まれていたとしいて考える理由はない。

いっぽう恵解山古墳では、出土鉄鏃中にみえる三角形の鏃身に孔を有する型式のものが注目される。この種の鉄鏃形式は特殊な部類に属し、しかも、Ⅳ期の埴輪を有する大阪府藤井寺市野中アリ山古墳に類例をみることは、恵解山古墳の営造がアリ山古墳と隔たらないことを思わせる。ただし、出土鉄鏃の構成に相違があり、アリ山古墳のばあい本形式の鉄鏃が1543本の3/4を占めるのに対し、恵解山古墳のばあいは472本の1割に満たず、かわって前期の伝統をひく柳葉形が7割近くに達する。その点で、恵解山古墳の営造は、出土鉄鏃からすれば、アリ山古墳に近いが、若干にせよそれより遡る可能性が少なくない。したがって、恵解山古墳の営造時に畿内の一部で窖窯焼成がはたして開始されていたのかどうか、なお検討を続けなければならない問題である。

その意味で恵解山古墳の営造時期の推定を保留にしたばあい、窖窯焼成法の採用時期を山城全体として示すことはむつかしいけれども、宇治・城陽市域にあたる東部については、採用に遅帯のあったことを指摘して誤りないであろう。

今度は、Ⅳ期の埴輪を有する古墳の副葬品を検討すると、青塚古墳では三角板鋲留衝角付冑、三角板革綴短甲、長頸式鉄鏃の出土が知られる。衝角付冑の諸形式のなかで三角板鋲留式は出土例がごく限られ、しかも兵庫県多紀郡篠山町東本荘車塚古墳出土品のように形態上も特異なものが含まれるので、営造時期を考定する手がかりとするのはこのばあい妥当でない。長頸鏃は、いわゆる片刃式を代表として形式が統一され、かついっせいに流行の色をみせる時期があり、これが須恵器編年でいえばTK216型式ないしTK208型式の時期にあたる。したがって、青塚古墳の営造時期としては、短甲に三角板革綴式が存続し、しかも鉄鏃に長

頸式の流行が開始されているころ、つまり須恵器編年のTK216型式の時期にあてるのが無難であろうと思う。瓦塚古墳の営造時期は、初葬に伴なう鐙の形態からみると、青塚古墳よりやや新しく編年される。また、上人ケ平7号墳では、長頸鏃や曲刃鎌が出土しており、青塚古墳もしくは瓦塚古墳と隔たらない頃に営造時期が求められる。

ところが、青塚古墳よりも外面調整技法や孔形に古い特徴を有しかつ窖窯焼成による円筒埴輪が、城陽市平川梶塚古墳で知られており、この点で、山城東部における窖窯焼成法の開始は、青塚古墳の営造時期を下限とし、さらに遡ることが想定されなければならない。しかも、平川車塚古墳や二子山北墳が営まれたときには、それぞれの副葬品からみて、すでにわが国で須恵器生産を開始していたとみられるのである。これらの点をあわせ考えるならば、山城東部における窖窯焼成法の採用の遅滞は、いくぶん過大に見つもったとしても、須恵器編年の1型式の経過に相当する程度の年数であったと推定してよかろう。

工人の製作伝統について　北墳に伴なう円筒埴輪の技法上の特徴として、外面の1次調整にナデを用いた個体が少なくない点をまず指摘しうる。この種の外面調整の方式をとる円筒埴輪は、山城では、金比羅山古墳、青塚古墳、瓦塚古墳にみられ、それぞれ検出個体数の1割前後の比率を占める。この種の方式が、二子山北墳にとどまらず、山城東部のⅢ期ならびにⅣ期の円筒埴輪の外面調整にみられることは、これが古墳時代中期全般に及ぶほど長期にわたって存続し、少数ながらも同地において定着していたことを物語っている。ただし、山城東部のなかにあって、平川車塚古墳や梶塚古墳の円筒埴輪には、この外面調整方式の個体は見いだされていないようである。今後の調査を経てもなお検出されず、これを欠くことが確定したばあいには、時間差とは別の要因によってこの有無が説明されなければならない。平川車塚・梶塚両古墳の円筒埴輪は底径がほぼ25～35cmの範囲にあり、15～25cmの間にほぼおさまる二子山北墳、金比羅山古墳、青塚古墳、瓦塚古墳の円筒埴輪よりも総じて大型品である。問題の外面調整方式の個体が総体的に小型の円筒埴輪の古墳にみられ、大型品の古墳で知られていないことも、このばあいには注意されてよいかもしれない。

なお、外面の1次調整にナデ、2次調整にB種ヨコハケの方式を用いた個体が、大阪府藤井寺市国府允恭陵や同堺市百舌鳥西之町ニサンザイ古墳の円筒埴輪のなかに散見され、1次調整にナデを施したことの視認できる個体が同羽曳野市誉田応神陵でも知られている。これらの古墳の埴輪はいずれもⅣ期にあたる。今後検索が進めば、Ⅳ期品のなかでさらに例数が加わることであろうし、Ⅲ期品にも見いだされてよい。

さて、最下段の外面調整に2次調整を欠く個体が、二子山北墳のばあい検出数の半ば以上に達することを先に指摘した。山城東部におけるⅢ期ならびにⅣ期の古墳をとりあげてこれを較べてみると、金比羅山古墳、丸塚古墳、梶塚古墳では10％未満、平川車塚古墳、青塚古

墳では40～50％を占めており、したがって、75％を占める二子山北墳での比率がすこぶる高いことが注意される。

円筒埴輪の粗製化が進み、畿内ではⅤ期に外面全体の２次調整が省略されることからいえば、最下段における２次調整の欠除は、Ⅴ期に近づくにつれて進行したように思われるかもしれない。しかし、山城東部についていえば、最下段に２次調整を欠く個体の多寡は、時間の推移に合致していない。その意味で、二子山北墳の円筒埴輪にこの傾向がとりわけ著しいことについて、時間差ではなく、工人が保持した技法上の特色[註2]として説明されなければならない。

平成元年９月23日稿了

（かわにし・ひろゆき、古代学研究所教授）

（註）

註１　車塚古墳出土の滑石製曲刃鎌模造品は、背部が先端で湾曲するのに対し、刃部が直線をなす。このような形態を呈する滑石製の鎌形品は岐阜県大垣市赤坂町遊塚古墳でみられ、また、鉄製品が大阪府藤井寺市野中アリ山古墳で知られている。この種の鎌が副葬品に加えられるようになったのが、背・刃とも湾曲するまぎれもない曲刃鎌の副葬の開始よりも古くさかのぼるのかどうか、この点に若干の問題を残している。すなわち、アリ山古墳では直刃鎌と真正の曲刃鎌とがこれに伴なって出土しているのに対し、車塚・遊塚両古墳でそれぞれ伴出している滑石鎌形品が直刃式にとどまるからである。また、遊塚古墳の営造時期について、片刃式の鉄鏃やⅢ期の特徴を一部にそなえた円筒埴輪の出土によって、前期末あるいは４世紀後葉とみなしてきた従来の見解を改め、中期に降すべきであろうと思うが、それでもなお、アリ山古墳とのあいだに、時間の隔たりが想定されるからでもある。この問題については後考をまちたいと思うが、いずれにせよ、車塚古墳の営造時期を埴輪編年のⅣ期の一部にあててさしつかえないことは、鋲留衝角付冑の出土によっても知られるところである。

註２　岡山県の造山・作山両古墳ならびに周辺の５世紀代の主要古墳の円筒埴輪が、春成秀爾によって編年されている。その結果によれば、「基底部に横ハケが施されているものは古く、そうでないものは新しい」というが、山城東部においてはこれがあてはまらない。春成秀爾「造山・作山古墳とその周辺」（藤井駿先生喜寿記念会編『岡山の歴史と文化』昭和58年）。

3　宇治二子山南墳の馬具

荒　川　　史

二子山古墳南墳から出土した馬具は、棺内・棺外から分かれて出土しているが、馬具全体を見れば被葬者の使用していたであろう1セットの馬具であることが判断できる。しかし、鐙や鞍に見るように、異なった形態のものが出土しており、おそらくはある一定期間使用される中で、修理や交換が行なわれ、ここに見る馬具のセットになったものと思われる。つまり一定の時間幅が馬具のセットの中に内包されているわけであるが、本稿では二子山古墳南墳の年代観を明らかにすることを目的として、馬具の検討をしていきたい。

轡　轡はｆ字形鏡板付轡であり、古墳時代初期の馬具では最も一般的なもののひとつである。ｆ字形鏡板付轡の編年の指標は、引手の取り付け位置・縁金の鋲数などがあるが、縁金については不明であるためその他の形態的特徴から検討してみたい。

まず引手の取り付け位置であるが、一般的に5世紀代のものは鏡板の外側に引手が取り付き、6世紀代にはいると鏡板の内側に取り付く傾向がある。この点では本例は古式の形態を有している。次に鏡板の形態は、長さ14.8cmと小型で、5世紀代でも中葉前後の古式の様相を呈する。

この2点のｆ字形鏡板付轡の形態的特徴のほかに本例で注意されるのは、引手と引手壺の連結に兵庫鎖を用いる点である。管見に触れるものでは、東京都亀塚古墳例[註1]・埼玉県稲荷山古墳例[註2]・福井県春日山古墳例[註3]等があり、5世紀第4四半世紀から6世紀にかけて見られるようである。また環状鏡板付轡でも、引手と立聞の違いはあるが6世紀前葉を中心とした時期に兵庫鎖を多用する例があり、この時期に兵庫鎖の盛行期があると見てよいと考える。

この3点の編年観を本例にあてると、先述した引手の取り付け位置・鏡板の形態では古式の様相を留めるものの、兵庫鎖を使用する新しい要素も認められることから、5世紀後葉の時期と見るのが妥当と考えられる。

杏葉　杏葉は剣菱形杏葉である。剣菱形杏葉についても、ｆ字形鏡板付轡同様、先学の編年的研究が行なわれており、金銅を被覆する際の技法の変化や剣菱の突出部の変化などが見られる。坂本美夫の編年によれば[註4]、本例の剣菱の突出率は0.4となり、Ⅱ期もしくはⅢ期（5世紀後半）の年代が与えられよう。また、全長が10.9cmと小型である点も古式の様相を示す点と思われる。

鞍　鞍金具では、編年的要素として3点があげられる。ひとつは座金具の形態、次に鉸具形態であるか円環形態であるか、そして鞍を鞍に装着する鋲脚の形態である。まず座金具の形態では栗形のものから円形・楕円形のものに主流が移るようである。また6世紀にはいる

と、四角形や五角形の形態も登場するようである。次に鉸具と円環の関係では、まず鉸具形態のものが出現し、6世紀にはいると円環形態のものが登場する。鋲脚の形態では、鉸具の2本の足を鋲脚とするものが古く、やはり6世紀にはいり、鉸具に細長い鉄板を搦めこれを鋲脚とするものに変化する。

この3点から検討すると、本例はいずれも5世紀代の古式の要素を持っている。しかし、2点のうち1点は、座金具の形態が栗形より五角形に近い形態を持っており、これを新しい要素とも見ることができる。

鐙　鐙は一対分あるがそれぞれ形態が異なる。まず「コ」の字形の金具を持つものの類例としては、奈良県円照寺墓山古墳例[註5]・石光山8号墳例[註6]・新沢千塚510号墳例[註7]などがあげられる。また兵庫県西宮山古墳の壺鐙として紹介されているものを輪鐙と見れば[註8]、この形式は5世紀後半から6世紀前半までのかなり長い期間存続した形態と見ることができる。

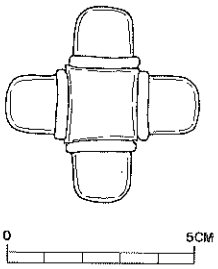
もう一方の鐙については、踏込部の形状などが不明のため明確にし得ないが、柄の頂部が方形を呈する点、頂部から輪に向かって幅が細くなる点など大阪府長持山古墳例等[註9]、小野山節が新式と分類した鐙に類似するようである[註10]。しかし、木質部の両側面しか鉄板を張っていない点や、側面の鉄板が輪に向かって幅が広くなる点は長持山古墳例より後出する要素となるかもしれない。いずれにせよこの2点は5世紀後葉から6世紀前葉の時間幅の中でとらえられるものと思われる。

辻金具　辻金具には環状辻金具と組合式辻金具の2種があるが、ここでは組合式辻金具を取り上げてみたい。組合式辻金具の類例としては、埼玉県稲荷山古墳例[註11]・三重県井田川茶臼山古墳例[註12]・京都府物集女車塚古墳例[註13]・奈良県新沢千塚178号墳例[註14]などがある。5世紀後半から6世紀にかけて見られる辻金具である。責金具に刻みを持つものが多いようであるが、本例では見られない。また1個の爪形金具につく責金具は稲荷山古墳例では1個、井田川茶臼山古墳例・物集女車塚古墳例では2個で、責金具の数が時期差を示すのかもしれない。この点で見るならば、本例は稲荷山古墳例に類似しており、古式の様相を呈する。

馬具の編年　これまで個々の馬具について検討してきたが、5世紀後半代を示す古い要素と、6世紀にその主流が見られる新しい要素が看取できる。しかし総括的に見るならば、馬具のセット関係が崩れていない点などから5世紀後葉、それも6世紀に近い時期と見ることができる。

5世紀後葉から6世紀前葉にかけては、馬具の大きな転換期にあたる。つまり、5世紀代に守られていた馬具のセット関係の崩壊や輪鐙から壺鐙への転換、環状鏡板付轡の登場など馬具の大きな変化のほとんどがこの時期に行われているからである。この変化の要因としては、馬が単に権威の象徴から実用的な道具に変わってきたことや、馬具の国産化などが考え

られよう。5世紀後葉から6世紀前葉は、馬具の形態が最もバラエティーに富む時期でもある。この時期は日本の馬具のあり方が咀嚼され、取捨選択されたのち、6世紀後半の馬具の規格化が行なわれたものと思われる。



第107図　組合式辻金具復元図

二子山古墳南墳の馬具のセットは、埼玉県稲荷山古墳の馬具のセットに類似している。ここで大きく異なるのは輪鐙を採用しているか壺鐙を採用しているかという点であろう。この相違点は両墳の時期差ととらえるべきではなく、セット関係の混乱を反映したものだろう。そして修理・交換をしながらも古式のセット関係を保ち続けた南墳の馬具は、被葬者の性格の一端を表わしているのかもしれない。

（あらかわ・ふみと、宇治市教育委員会）

（註）

註1　大谷　猛「狛江亀塚古墳」『古墳大辞典』1989
註2　埼玉県教育委員会『埼玉稲荷山古墳』1980
註3　松岡町教育委員会『改訂　松岡古墳群』1979
註4　坂本美夫『馬具』1985
註5　千賀　久「奈良県出土の馬具集成」『平群・三里古墳』奈良県教育委員会　1977
註6　奈良県立橿原考古学研究所『葛城・石光山古墳群』1976
註7　奈良県立橿原考古学研究所『新沢千塚古墳群』1981
註8　京都国立博物館『富雄丸山・西宮山古墳出土遺物』1982
註9　小野山　節「日本発見初期の馬具」『考古学雑誌』52-1　1966
註10　註9文献
註11　註2文献
註12　三重県教育委員会『井田川茶臼山古墳』1988
註13　向日市教育委員会『物集女車塚』1988
註14　註7文献

4　宇治二子山古墳とその周辺

杉　本　　宏

宇治二子山古墳の内容については、すでに述べてきたところである。ここでは、その内容を再度整理し、また、宇治二子山の歴史的環境についての私見を少しく述べ、考察の一文にかえたい。

A　宇治二子山古墳の概要

丘陵頂に二基が隣接して築造される宇治二子山古墳(以後二子山古墳)は、北墳が径40mの円墳、南墳が一辺34mの方墳(もしくは円墳)である。

北墳には3基の主体部があり、埋葬の順序は、東槨→中央槨→西槨の順である。東槨と中央槨は盗掘により大半を破壊されているが、いずれも全長5.5m程の長大な割竹形木棺を用い、前者が粘土槨、後者が木棺直葬である。西槨は完存しており、全長3.8mの割竹形木棺を用いた粘土槨である。

出土遺物は、東槨は粘土槨南端に多量な鉄製農工具類が、中央槨には棺内に鉄製農工具類と鉄鏃、棺外に武器が、西槨には棺内に仿製鏡・玉類・短甲と衝角付冑一式・武器・鉄製農工具類、棺外に武器・楯が認められた。東槨には直刃鎌のみを認め、中央槨・西槨には直刃鎌と曲刃鎌が混在する。また、尖根式鉄鏃に注目すると、西槨には長頸化のきざしが認められる。甲冑では、西槨から長方板革綴短甲と三角板革綴衝角付冑が肩甲・頸甲を伴い出土している。盗掘壙からも革綴式短甲片が出土しているため、東槨・中央槨のいずれか、もしくは両方に甲冑の副葬が推定できる。

埴輪は、川西宏幸氏編年Ⅲ期(以後期のみ)に該当するが、家形埴輪の一部に窖窯焼成のものが認められる。

南墳は、中央部に1基の主体部があり、全長4.2mの箱形木棺を直葬している。

出土遺物は、棺内から鋲留式短甲2・鋲留式衝角付冑1・挂甲1が頸甲・肩甲(小札肩甲と板肩甲)・革製草摺・籠手・三環鈴を伴い出土しているのを始め、各種武器・仿製鏡・玉類・少量の鉄製農工具類が、棺外からは、馬具・武器・楯が出土している。鉄鏃は長頸鏃を主体としている。また、北墳と比べ武器・武具類を主体とする遺物の副葬内容や馬具の副葬などに際だった差を認めることができる。

埴輪については、樹立されていた可能性はあるが、確認できない。

遺物の内容から、明らかに北墳が古く南墳が新しい。

年代については、北墳が5世紀中葉という時間幅の中に、南墳が5世紀後葉という時間幅の中にあることを示した。

B　南山城地方の古墳動向

では、このような内容をもつ二子山古墳が、周辺諸古墳と、どのような関係の中で位置づけられるのかを窺う前提として、南山城地方の古墳動向を垣間見ておきたい。

特にここで、南山城地方に限定してその状況を取り扱うのは、地理的状況を大局的に見れば、二子山古墳の存在する宇治川渡河点は明らかに南山城地方の最北端部であるとともに、南約4kmには、当地方の中で最も多くの大型前方後円墳が造られた久津川古墳群(グループ)が存在し、両者は強く関係したであろうことが、想像に難くないからである。

前期の諸古墳　南山城地方の古墳のグループ分けと主要古墳の編年を図示したものが、第108・109・110図である。[注1] 編年試案では、参考のために京都市桃山丘陵の古墳(桃山グループ)と北山城地方の大型古墳を一部取り扱った。

第108図に示したように、南山城地方(宇治を含む)では、当面、大きく7地域での古墳のまとまり(グループ)の存在を仮定しておきたい。

各グループでの前期(概ね4世紀代)の状況を見ると、初頭では、椿井グループで三角縁神獣鏡32面以上を出土した箸墓型の前方後円墳大塚山古墳(180m)が造られており、他グループでは目立った規模の古墳築造はない。

後葉段階になると、富野・久津川・飯岡・大住・男山各グループで70～120m程の前方後円墳や前方後方墳が造られ始め、当段階における南山城地方の地域勢力は、多極的傾向にあったことが推定できる。

久津川グループの台頭　中期(概ね5世紀代)になると、前期での様相は変化し、久津川グループで車塚古墳(180m)・芭蕉塚古墳(120m)に代表される大型前方後円墳が継続して築造されるのに伴い、他グループは造墓を停止するか、もしくは目立った規模の前方後円墳や前方後方墳を築造しなくなる。この傾向は、前述の車塚古墳・芭蕉塚古墳の時期に顕著である。一般的にいわれる、久津川グループの南山城地方支配の一元化である。

久津川グループは、その分布状況から大きく3群に分けることができる。すなわち、大谷川扇状地上に立地する中央群、中央郡周囲の丘陵上に立地する周辺群、中央郡北方丘陵上に散在する北群である。

各郡ごとの開始期は、周辺群が最も早く、庄内式土器・銅製釧等を出土した芝ケ原古墳(25m)が古墳出現期に造られている。また、ほぼ同時期に上大谷古墳群でも小型墳が造られているようである。比較的大型の古墳が造られるようになるのは、前期後半からである。

周辺群の西山古墳群では、前期後半の比較的早い段階で前方後方墳西山1号墳(75m)を成立させ、前期の中で60m級の前方後円墳を含む7基が築造されている。同じく尼塚古墳群では、大型方墳尼塚古墳(40m)を中心に8基の小型古墳が中期前半まで造られている。30m級

の前方後方墳を含む上大谷古墳群(21基)は、古墳時代を通じて造墓活動を継続するが、その中心時期は、やはり前期後半から中期初頭である。北群では、前期末頃に大型円墳の庵寺山古墳(56ｍ)が単独墳として築造されている。

中央群は、グループ内では最も開始が遅く、箱塚古墳をその最初とする。箱塚古墳は、早くに失われ具体的内容は知りえないが、楯形周濠を備えた全長90ｍの前方後円墳で、竪穴式石室・粘土槨から仿製三角縁神獣鏡や画文帯四獣鏡が出土しているところから、中期初頭に比定されている。その後、全長80ｍの帆立貝式前方後円墳丸塚古墳から山城国域最大規模の車塚古墳へ、そして中期後半の芭蕉塚古墳へと大型前方後円墳が中期全般を通じて築造され続けている。また、これら前方後円墳の近くには、山道古墳(40ｍ)・梶塚古墳(50ｍ)・青塚古墳(50ｍ)などの大型方墳が、それぞれの前方後円墳と相前後する時期に築造される特色が指摘できる。

中央群が形成された中期、周辺群では西山・尼塚各古墳群が造墓をほぼ停止しており、かわって、芝ケ原古墳群で11号墳(60ｍ)を始めとする中・大型円墳が造られ始める。また、北群でも、直径40ｍの円墳金比羅山古墳が単独墳として築造されている。

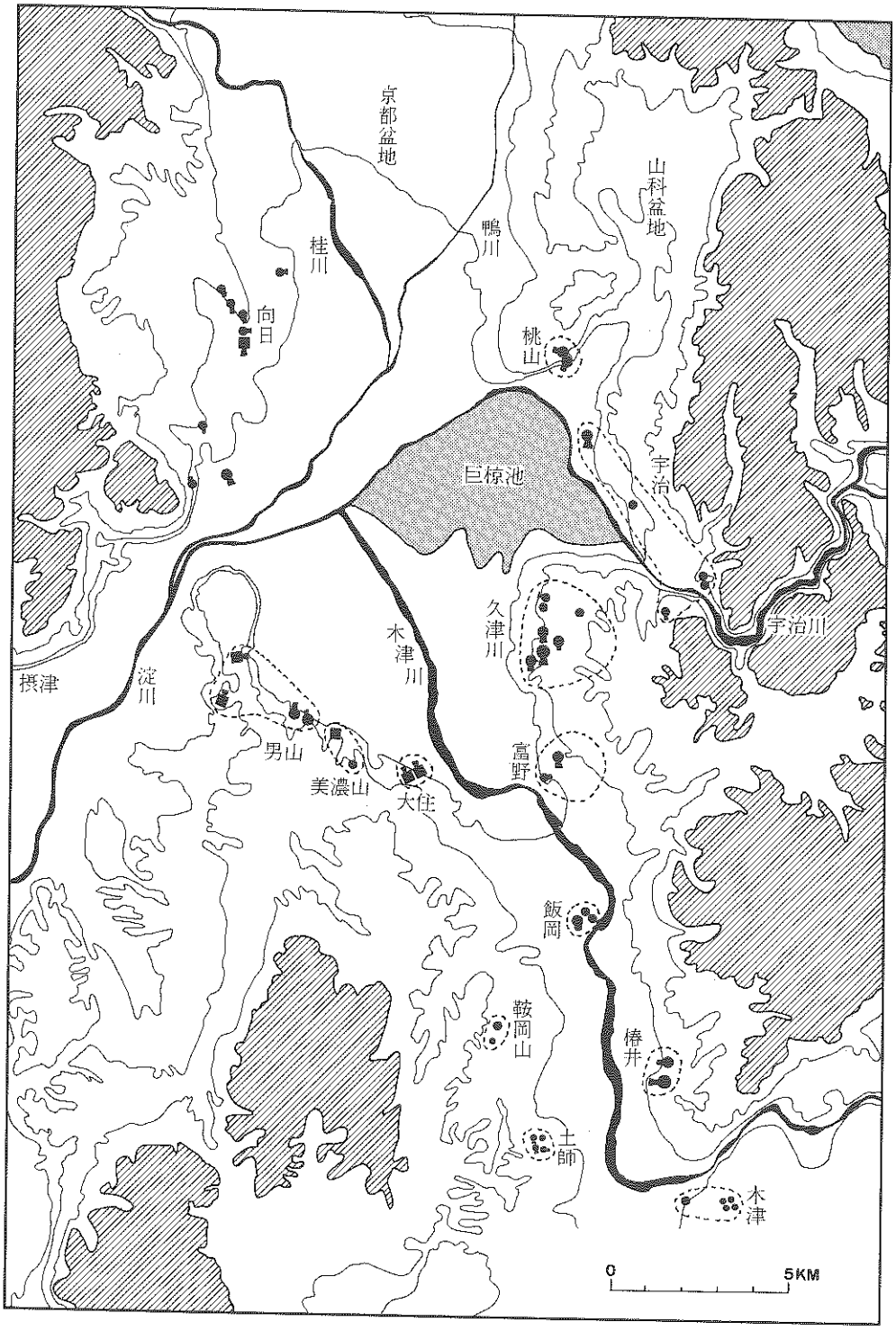
現在、久津川グループでの首長墓の動きは、周辺群の西山古墳群から中央群の大型前方後円墳へと一般的に理解されており、中央群の成立とともに、前期を中心に造墓を行った周辺群諸古墳群は急速に衰退している。また、前方後円墳に至っては、ほとんど周辺群で築造されず、芝ケ原11号墳に代表される円墳が主体となる傾向が看取できる。このような状況は、目を南山城地方全域に広げてもほぼ同様であり、久津川グループ中央群成立が、南山城地方諸グループに強い影響を及ぼしたであろうことが充分理解できるのである。

栗隈大溝の評価　なぜ、久津川グループが中期段階において、大型前方後円墳を中心とする中央群を成立させ得たのか、その理由はまだ充分に検討されていない。しかし、平野部の開発がその背景にあることは、早くから指摘されている。

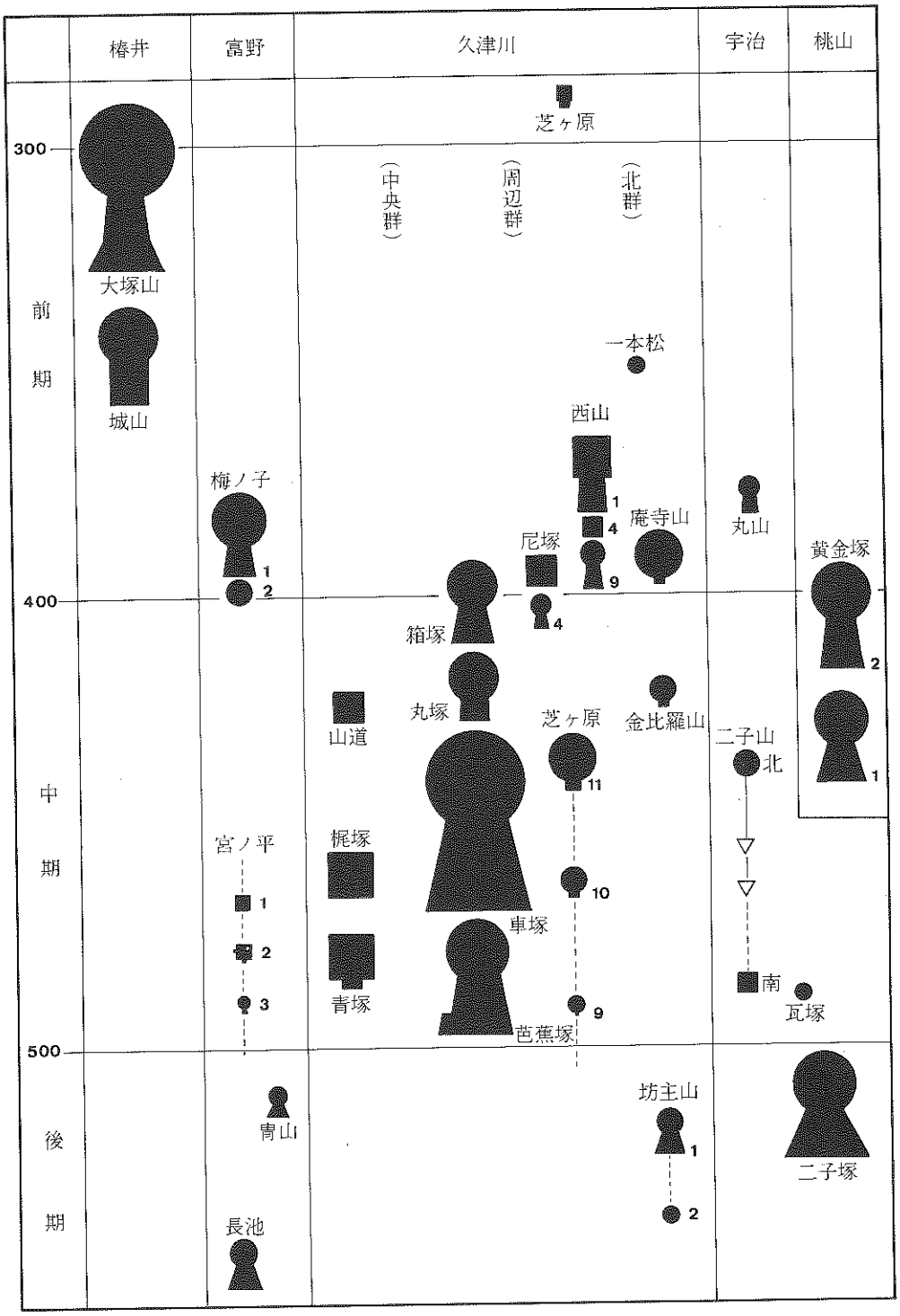
『日本書紀』には、「仁徳紀」と「推古紀」に「栗隈大溝」の開削記事が見える。栗隈とは久津川辺りの古名である。すなわち、この記事が伝えるものは、大規模な灌漑用水開削である。現在、この記事の解釈については、「仁徳紀」が開削を伝え「推古紀」が改修を伝えるという見解と、「推古紀」が開削を伝え「仁徳紀」は創作であるという見解とがある。[註2]

近年の久津川グループ中央群での調査成果を踏まえると、前者の可能性が高い。これは、中央群形成に関しては、その扇状地の中程を流れていた大谷川の流路変更が必須条件であったと判断できるからである。

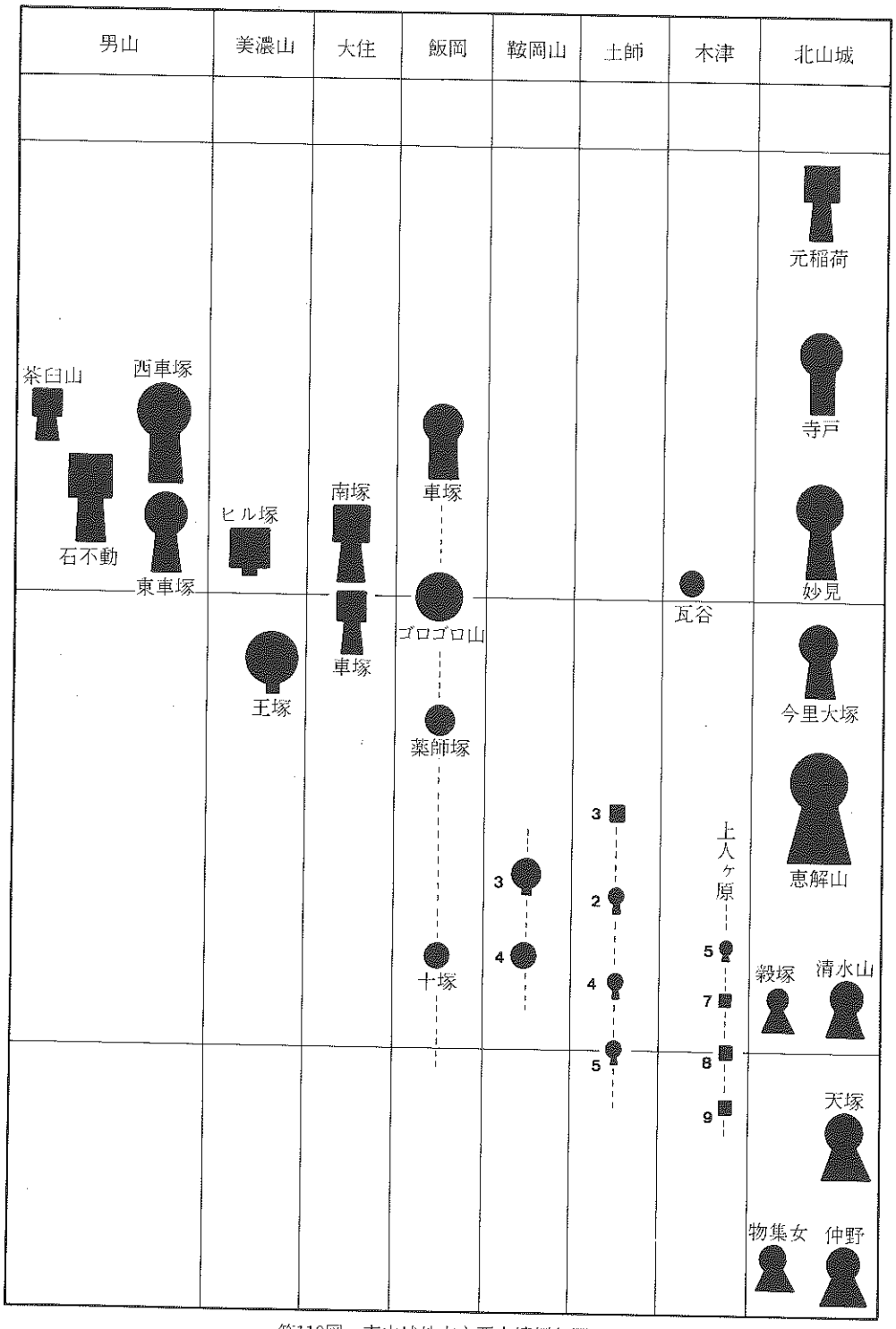
中央群の占地を見ると、谷口部に丸塚古墳・山道古墳が造られており、その西側に車塚古墳が築かれている。大谷川流路は、現在、北側丘陵中腹を西に流れている。現流路は、明ら



第108図　南山城地方古墳分布図



第109図　南山城地方主要古墳編年図(1)

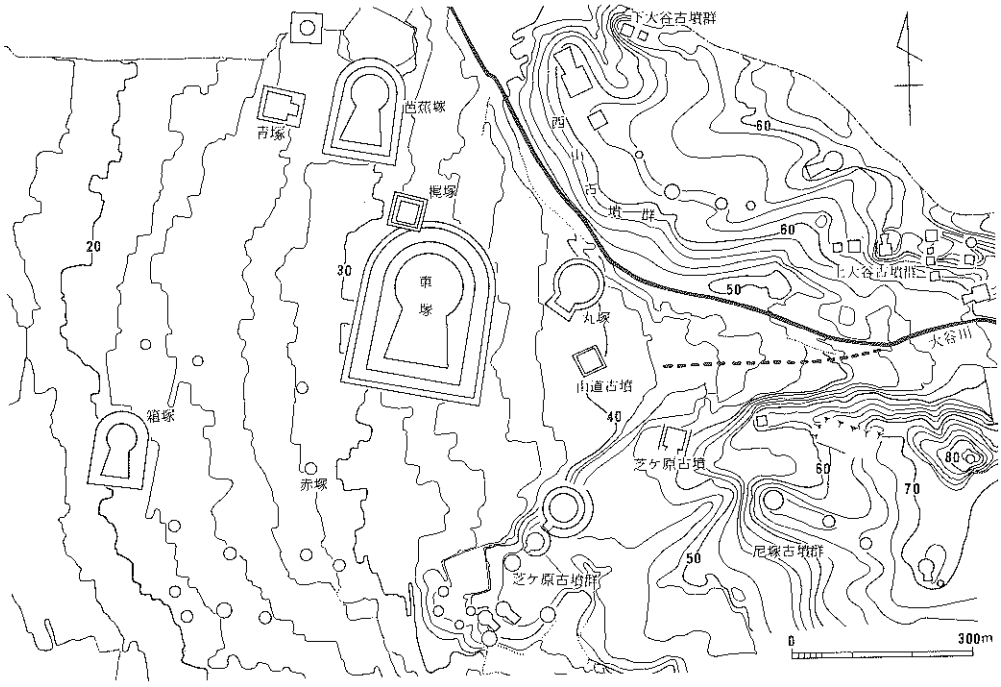


第110図　南山城地方主要古墳編年図(2)

かな人工流路である。地形的に見れば、本来、大谷川は扇状地中央付近を不安定に流れることが自然であるし、車塚古墳南側の平川廃寺下層では、旧流路跡が見つかっている。

このように考えると、谷口部を塞ぐように築造されている丸塚古墳・山道古墳の造営開始時には、大谷川が流路変更されていないと無理が生じることとなる。すなわち、大谷川の流路変更を前提としなければ、中央群の造営はかなり難しいと判断できるのである。丸塚古墳や車塚古墳などの扇状地中央部に立地する古墳の周濠が、大量の土砂によって早くに埋没している事実は、この流路変更に伴う流路の不安定さに起因する洪水の結果であった可能性は高いし、中期後半の青塚古墳や芭蕉塚古墳が、扇状地中央ではなく、より北側に選地されているのは、新流路からの洪水を回避したためであるとも考えられる。

このように、古墳時代において、大谷川流路変更という大規模な治水工事が実施されているならば、同様にその下流にあたる平野部でも水路工事が実施されたであろうことは、充分な可能性をもって推測できるのであって、この一連の治水工事が「仁徳紀」における「栗隈大溝」として『日本書紀』に記載されたとしても不思議ではない。そして、この治水工事による労働力の集中化と平野部での可耕地の拡大化が、山城国最大規模を誇る車塚古墳成立の基礎を準備したと考えるのである。



第111図　久津川グループ分布図(註9に加筆)

C　久津川グループ主要古墳と宇治二子山古墳

このような動向が想定できる久津川グループの主要古墳と、宇治二子山古墳の相対的年代を次に検討することとしたい。

久津川グループの相対年代　まず、久津川グループ主要古墳の新旧関係を埴輪と副葬品から概観したい。

埴輪での中央群諸古墳間の前後関係は、既に指摘がされており[註3]、その成果に周辺群の主要古墳を一部加えると、次のような流れが大枠で考えうる。

（Ⅲ期）　丸塚古墳・山道古墳・芝ケ原11号墳・金比羅山古墳→車塚古墳。

（Ⅳ期）　梶塚古墳→青塚古墳→芭蕉塚古墳。

Ⅲ期の埴輪を用いる古墳の中では、外面２次調整の省略が目立つ点で車塚古墳を新しく置くことができる。梶塚古墳では無黒斑の埴輪が主体を占めつつも少量有黒斑のものが残存している点で、Ⅳ期開始期と判断して良い。青塚古墳と芭蕉塚古墳は共に典型的なⅣ期の埴輪をもつが、後者には硬質埴輪が認められる点は、当期中の新相と見てよいであろう。

次に、副葬品の内容を甲冑、鉄鏃、鎌の順で概観する。

甲冑が出土している古墳は次の３古墳であり、内容を略記する。

（芝ケ原11号墳）　三角板革綴短甲。

（車塚古墳[註4]）　三角板革綴衝角付冑２・竪矧板鋲留衝角付冑１・小札鋲留衝角付冑２、三角板革綴短甲５・挂甲、篠籠手、頸甲、肩甲。

（青塚古墳[註5]）　横矧板鋲留衝角付冑１、三角板革綴短甲１、頸甲、肩甲。

鉄鏃では、車塚古墳出土の尖根式は、いずれも短頸であるのに対し、青塚古墳では、長頸鏃の出現が認められる。但し、青塚古墳の長頸鏃には、長さ18cm以上の定型化したものに伴い、頸部が短いものも存在しており、長頸鏃の一般化間もない頃の様相を示している。

鎌では、確実に曲刃鎌が出現しているのは、梶塚古墳である。芝ケ原11号墳と金比羅山古墳には、直刃鎌しか認められない[註6]。車塚古墳からは、鎌形滑石製模造品が出土している。この内反り峰の鎌形は、直刃鎌でも新しいタイプの模造品である可能性が考えられる。

以上の副葬品の内容を見ると、久津川グループでの主要古墳の前後関係は、埴輪で想定されている古墳の相対年代と基本的に矛盾していないと判断してよい。

久津川グループと宇治二子山古墳　次に前述の車塚古墳・芝ケ原11号墳・金比羅山古墳・梶塚古墳・青塚古墳の埴輪・甲冑・鉄鏃・鎌の内容と、宇治二子山北墳・南墳のそれぞれの内容とを、比較できるものどうしで簡単に対比してみたい。

但し、甲冑については、地板の形状を無視し、革綴式か鋲留式かの点にしぼって、短甲と衝角付冑とで新旧を対比する。

Ⅵ 考　　察

前述にもとづいて、対比すると下記のようになり、さらにこの対比を基に古墳の相対的年代を想定すると、第112図のように整理できる。

(北墳東槨)　A　直刃鎌のみ……芝ケ原11号墳・金比羅山古墳と類似。

　　B　Ⅲ期埴輪調整省略……車塚古墳と類似。

(北墳中央槨)　A　曲刃鎌の存在……梶塚古墳と類似。

　　B　尖根式鉄鏃……車塚古墳と類似。

(北墳西槨)　A　曲刃鎌の存在……梶塚古墳と類似。

　　B　尖根式鉄鏃……車塚古墳より古く、青塚古墳より新しい。

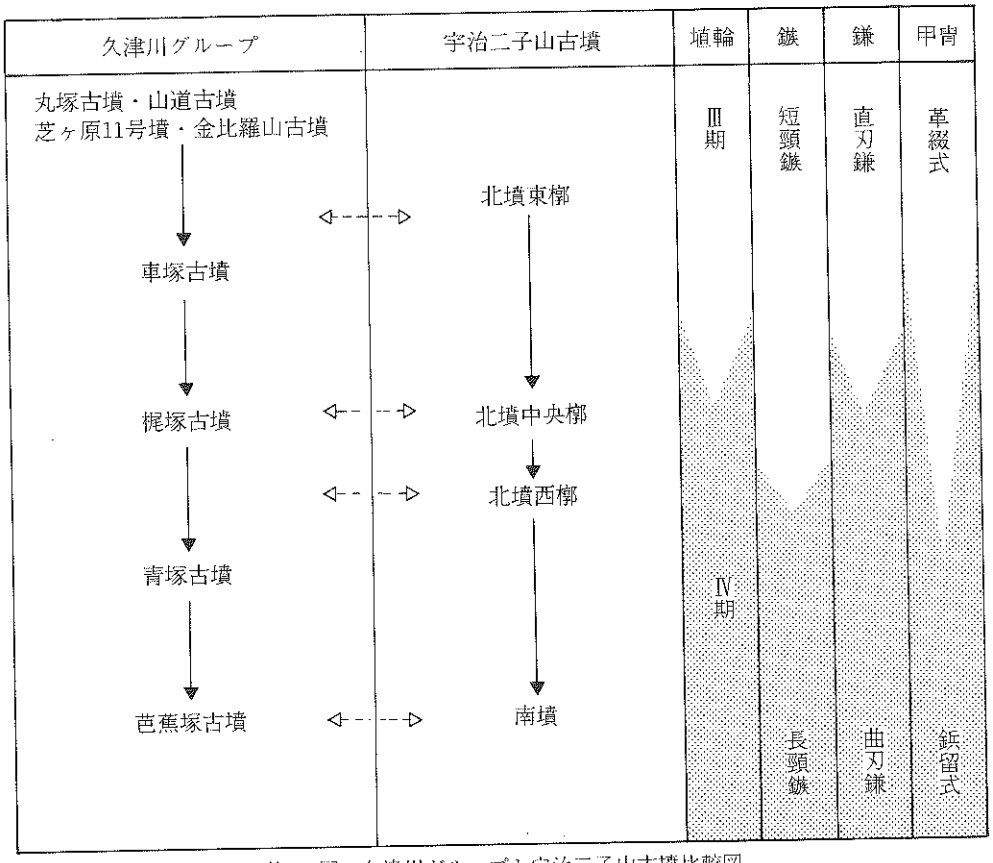
　　C　短甲(革綴)……車塚古墳・芝ケ原11号墳・青塚古墳と類似。

　　D　冑(革綴)……車塚古墳・青塚古墳より古い。

(南墳)　A　長頸鏃……青塚古墳より新しい。

　　B　短甲(鋲留)……車塚古墳・青塚古墳より新しい。

　　C　冑(鋲留)……青塚古墳と類似、車塚古墳より新しい。



第112図　久津川グループと宇治二子山古墳比較図

このように整理すると、二子山北墳は、概ね車塚古墳と同時期と見てよく、中央槨・西槨の追葬は、梶塚古墳頃となる。但し、車塚古墳出土の鎌形滑石製模造品が、峰が内反りするものを模したとすると、同類のものは北墳中央槨において認められるため、北墳初葬である東槨は、車塚古墳より若干遡るとしても良いであろう。

南墳については、甲冑・鉄鏃で対比する限り青塚古墳より新しいと判断してよい。おそらく、芭蕉塚古墳と近接した時期の築造となろう。

実年代では、車塚古墳を従来どおりの5世紀中葉に比定とすると、二子山北墳は5世紀中葉でもやや古い段階となり、追葬の中央槨・西槨は、5世紀中葉の新しい段階となる。南墳は、5世紀後葉の中に位置づけられることとなろう。

このように検討すると、二子山古墳が築造された時期は、久津川グループ中央群が南山城地方の覇権を確立していた時期であったこととなるのである。

D　宇治二子山古墳の性格

宇治二子山北墳・南墳を特徴付けるのは、何といっても多量な武器・武具の副葬である。特に南墳では2領の短甲と共に新来の挂甲を副葬しており、付属武具も完備している。

南山城地方5世紀段階での甲冑出土状況は、車塚古墳で短甲・冑5組と挂甲1を最多として、青塚古墳・芝ケ原11号墳・王塚古墳[註7]・原山古墳[註8]で短甲・冑各1組が出土しているにすぎない。この点から見れば、南墳はその墳丘規模に比べて破格な量の甲冑を副葬しているといって過言ではない。また、馬具については、当地方では初現的な例でもある。大和・河内周辺地域での中規模墳甲冑多数副葬は、滋賀新開古墳例や奈良五条猫塚古墳例などのようにしばしば認められる。この現象が直ちに被葬者の武人的性格を示すか否かは別として、その背景に強力な軍事力を予感することには充分であろう。

また、前述したとおり、5世紀代の南山城地方は、久津川グループ中央群成立とともに他各グループがその規模を減じており、久津川グループ主導の支配体制が強固に貫徹されていたことを窺わせる。宇治二子山古墳が、その副葬品の内容に比べて、中規模円墳ないし方墳の枠を踏み出すことができなかった背景には、この支配体制の影響を想像するに難くない。

このように、宇治二子山古墳の内容と周辺の古墳動向とを見るとき、久津川グループの盟主墳である車塚古墳・芭蕉塚古墳を中心とする勢力に強い影響を受けつつ、なお相対的独自性を保持し続けた宇治の首長、二子山古墳被葬者が浮び上ってくるのである。そして、その独自性を保障したのは、宇治川渡河点の支配であったことはまちがいない。南墳副葬品に、新来の挂甲を身に纏った馬上の武人が、宇治川の渡(わたし)を守る姿を想像するのは、私だけではあるまい。

(すぎもと・ひろし、宇治市教育委員会)

(註)

註１　本編年試案作成については、京都府教育委員会『京都府遺跡地図、第２版、第５分冊』と龍谷大学考古学資料室『南山城の前方後円墳』を基に、最近の各市町村の報告書より知りえた知見を含めて作成をした。

註２　前者の代表的なものとして、吉田晶「大化前代の南山城」『古代国家の形成と展開』昭和51年があり、後者の代表的なものとして、谷岡武雄『平野の開発』がある。

註３　城陽市教育委員会「久津川車塚古墳・丸塚古墳発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集、昭和61年。

註４　古谷毅「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑」『MUSEUM』No.455、昭和63年。

註５　京都府立山城郷土資料館にて調査。

註６　註５と同じ。

註７　三角板革綴衝角付冑・短甲・頸甲・肩甲が出土している。

註８　横矧板鋲留衝角付冑・横矧板鋲留短甲・頸甲・肩甲が出土している。

註９　城陽市教育委員会『城陽市埋蔵文化財発掘調査報告書』第19集、平成元年。

南山城地方主要古墳一覧表

番号	名称	墳形	規模(m)	内部主体	出土遺物	時期
〈山城町〉						
1	平尾城山古墳	前方後円	110	竪穴式石室 粘土槨2	変形方格規矩鏡、鉄剣、勾玉、管玉、臼玉、金銅鐶、釧、土器	前期中頃
2	大塚山古墳	前方後円	180	竪穴式石室	舶載鏡27、鉄刀12、銅鏃5、鉄剣、鉄、刀子13、工具、甲、鏃	前期初頭
〈城陽市〉						
3	西山1号墳	前方後方	75	粘土槨	針状鉄器、土師器(壺・高杯)、円筒埴輪	前期後半
4	2号墳	方	25	粘土槨4	三角縁神獣鏡、四獣鏡、石釧、鉄斧、鉇、鍬、鎌、刀子、剣、銅鏃、鞍残欠	前期後半
5	7号墳	前方後円	60		伝小型中国鏡、石臼	
6	青塚古墳	前方後方	50	粘土槨2	仿製乳文鏡、仿製四獣鏡、三角板革綴短甲、勾玉、管玉、棗玉、ガラス小玉、刀、鏃、刀子、鉇、埴輪(円・朝顔・靫・蓋・家)	中期後半
7	芭蕉塚古墳	前方後円	115		埴輪(円・家)	中期後半
8	梶塚古墳	方	50	竪穴式石室	鍬、鎌、鉇、刀子、鉤状工具、石製模造品(鎌・不明品)、籠目土器、埴輪(円・朝顔・形象)	中期後半
9	車塚古墳	前方後円	180	長持形石棺 小石室付設 (前後両端)	三角縁神獣鏡、画文帯神獣鏡、仿製四獣鏡、勾玉、管玉、小玉、石製模造品(勾玉・刀子・臼玉)、滑石合子、衝角付冑、三角板革綴短甲、刀、剣、槍、鏃、埴輪(円・朝顔・形象)	中期中頃
10	丸塚古墳	前方後円	80		埴輪(円・家形)	中期
11	箱塚古墳	前方後円	90	竪穴式石室(後円部) 粘土槨(前方部)	仿製三角縁神獣鏡、画文帯四獣鏡	中期前半
12	芝ケ原9号墳	円	25		埴輪(円・朝顔・槍・蓋・家・大刀)	中期後半
13	10号墳	円	33	粘土槨1 粘土床1	剣、盾、鏃、針、不明鉄片、鹿角片、埴輪(円・蓋・家・動物)	中期前半
14	11号墳	円	56	粘土槨2	三角縁神獣鏡、剣、鏃、斧、刀子、針、鉇、革綴短甲、滑石刀子、埴輪	中期前半
15	尼塚4号墳	前方後円	37	粘土槨1	碧玉管玉、鉇、刀子、不明鉄器	中期初頭
16	尼塚古墳	方	40	粘土槨	石釧、碧玉管玉、筒形銅器、銅鏃、槍、鉇、刀子、鎌、不明鉄片、土師器壺	前期末
17	宮の平1号墳	方	25		紡錘車、有孔円板、管玉、臼玉、埴輪(円・朝顔・楯・靫・草摺など)	中期後半
18	2号墳	方	29	粘土床 粘土貼	砥石、剣、鏃、斧、不明鉄器、臼玉、埴輪(円・家・盾・大刀・鶏)	中期後半
19	3号墳	円	33			中期
20	梅の子塚1号墳	前方後円	87	粘土槨	土器、埴輪	前期後半
21	2号墳	円	42		埴輪	前期後半
22	長池古墳	前方後円	50	箱形木棺粘土床1 土壙墓(木棺?)2	櫛目文鏡、碧玉管玉、琥珀棗玉、瑪瑙小玉、銀空玉、金環、銀環、鏃、須恵器、土師器	後期中頃

番号	名称	墳形	規模(m)	内部主体	出土遺物	時期
23	冑山1号墳	前方後円	25	片袖式横穴式石室	馬具、刀、鎌、鏃、碧玉管玉、ガラス小玉、須恵器、埴輪(円・家・蓋・靫・鶏・動物・人物など)	後期初
24	上大谷1号墳	前方後方	33			
25	8号墳	前方後方	34	粘土槨？		前期
〈宇治市〉						
26	二子塚古墳	前方後円	110	(横穴式)石室	伝四獣形鏡、埴輪(円・人物)	後期初
27	瓦塚古墳	円	30	礫槨1 木棺直葬1	金・銀製金具、馬具、玉類、鉄鏃、刀子、埴輪	中期後半
28	二子山北墳	円	40	粘土槨2 木棺直葬1	仿製半円方形帯神獣鏡、碧玉勾玉・管玉、 瑪瑙切子玉、ガラス小玉、滑石勾玉(模)、櫛、短甲、楯、鏃、刀剣、矛、手斧、斧、鉇、鎌、埴輪(円・家・草摺・靫)	中期前半
29	南墳	方	34	箱形木棺	仿製四葉文鏡、勾玉、管玉、滑石臼玉・勾玉、短甲、挂甲、衝角付冑、楯、胡籙、鏃、刀剣、矛、刀子、三環鈴、轡、雲珠、辻金具、輪鐙、埴輪(円・蓋)	中期後半
30	丸山古墳	前方後円	40	粘土槨	仿製四獣鏡、刀、剣、鏃、斧、土師器、須恵器	前期
31	坊主山1号墳	前方後円	45	組合式木棺	銅鈴、銅釧、金環、玉類、三輪玉、直刀、矛、鏃、斧、馬具、須恵器(装飾付土器他)、埴輪(円・家・動物・人物)	後期前半
32	2号墳	円	25	箱形木棺2	金環、ガラス玉、土玉、直刀、鏃、須恵器	後期前半
33	金比羅山古墳	円	40	粘土槨1 埴輪円筒棺粘土槨1 埴輪円筒棺3	二神二獣鏡、勾玉、管玉、ガラス小玉、櫛、刀、剣、農工具、円筒埴輪	中期前半
34	庵寺山古墳	円	56	粘土槨	埴輪(蓋・靫・家・円)	前期末
35	一本松古墳	円	35	竪穴式石室	鏡、碧玉管玉、剣、鉇、斧、刀子、異形工具、土師器壺	前期中頃
〈八幡市〉						
36	石不動古墳	前方後円	88	粘土槨2	画文帯神獣鏡、石釧、勾玉、管玉、棗玉、小玉、短甲、剣、刀、鏃、刀子、斧、鉇	前期後半
37	茶臼山古墳	前方後方	50	竪穴式石室内舟形石棺	石釧、刀、鏃、埴輪(円・形象)、和同開珎、金箔	前期後半
38	西車塚古墳	前方後円	120	竪穴式石室 八角堂	三角縁神獣鏡、盤龍鏡、画文帯神獣鏡、仿製六獣鏡、仿製規矩鏡、鍬形石、車輪石、石釧、滑石釧、碧玉合子、勾玉、管玉、ガラス小玉、水晶丸玉、刀、剣、円筒埴輪	前期後半
39	東車塚古墳	前方後円	90	粘土槨(後円部) 木棺直葬？(前方部)	内行花文鏡、三角縁神獣鏡、仿製鼉龍鏡、仿製六神鏡、硬玉勾玉、素環頭大刀、刀、剣、斧、鏃、甲冑	前期後半
40	ヒル塚古墳	方	45	粘土槨2	仿製方格規矩鏡、剣、槍、鉄鏃、埴輪	前期後半

番号	名称	墳形	規模(m)	内部主体	出土遺物	時期
41	王塚古墳	円	60	粘土槨	内行花文鏡、夔鳳鏡、二神二獣鏡、仿製内行花文鏡、仿製規矩鏡、仿製半円方形帯神獣鏡、仿製盤竜鏡、仿製神獣鏡、衝角付冑、短甲、刀、剣、鏃、斧、ガラス小玉	中期前半
〈田辺町〉						
42	大住車塚古墳	前方後方	66			前期末
43	大住南塚古墳	前方後方	71	竪穴式石室	石製品、刀剣	前期後半
44	飯岡車塚古墳	前方後円	90	竪穴式石室	硬玉勾玉、碧玉管玉、ガラス小玉、車輪石、石釧(滑石製を含む)、碧玉合子、剣、刀	前期後半
45	ゴロゴロ山古墳	円	60			中期
46	薬師山古墳	円	38			中期
47	十塚古墳	円	25	竪穴式石室	神人車馬画像鏡、神人歌舞画像鏡、仿製一神四獣鏡、刀剣(鹿角装)、轡、杏葉、鏡板、勾玉、管玉、小玉	中期後半
〈精華町〉						
48	鞍岡山3号墳	円	40		仿製鼉龍鏡、円筒埴輪	中期
49	4号墳	円	30			中期
〈木津町〉						
50	瓦谷古墳	円	34	粘土槨2	仿製鏡、短甲、剣、鉄鏃	前期末
51	上人ケ平1号墳(市坂)	円	20			中期
52	吐師七ツ塚1号墳	前方後円	40		石製模造品(鏡・斧頭・刀子)、伝埴輪	中期前半
53	2号墳	前方後円	40	木棺直葬	四獣形鏡、ガラス玉、馬鐸、直刀	中期前半
54	3号墳	方	31		埴輪(円・朝顔・家・靫・楯・短甲)	中期
55	4号墳	前方後円	42		埴輪(円・形)	中期後半
56	5号墳	前方後円	29	竪穴式石室	円筒埴輪	中期末～後期初

※京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第2版第5分冊をもとに作成。

付載　宇治二子山古墳出土金属器の保存科学処理

橋　本　清　一

宇治二子山古墳出土金属器の保存科学処理は、1983年(昭和58)より1987年(昭和62)までの5年間で行い、総数約200点を処理した。

A　処理前の状態と処理方針

主な金属製品としては、半円方形帯神獣鏡・四葉文鏡・三環鈴・衝角付冑2・短甲3・挂甲小札・鉄製武器類・鉄製農工具類・馬具類がある。

鏡・三環鈴・矛先・鉄柄手斧・直刀・剣・鉄斧及び馬具の一部については、出土後の劣化が激しく、肉眼的にも明瞭な錆の進行や割れが激しく、更に一部には破片や粉状にまで劣化が進んでいるものがあり、放置すると形を大きく損う恐れがあった。

また、大部分のものは、土中に埋もれている間に、原形を損うような錆がこぶ状に生じていた。短甲・冑については、土圧による変形や、各部分がバラバラになり原形を留めていなかった。

このような状態であったため、保存科学処理の基本方針として、錆の安定化や脱塩及び水分の除去、原形を損っている状態で付着した土・砂やこぶ状の錆の除去と、変形した金属器を原形に復元すること、欠損部を樹脂の充填で復元を行い、全点について樹脂を減圧含浸して防錆・強化し、接着・充填部の古色仕上げをすることとした。

B　保存科学処理作業

(脱塩と乾燥)　金属器の錆を進行する一つの因子と考えられる塩化物の濃度を知るために、オリオン社のイオンメーターを使用して、塩素イオン濃度を測定した。試料は、13本の鎌の表面の錆を使用し、純水の中に入れて加熱し数分毎に測定した。結果は、痕跡程度であったため、脱塩処理を基本的には行わなかったが、1987年に関しては、水酸化リチウム法による脱塩処理作業を実施し、メタノールで洗浄し、充分に自然乾燥を行った。

(錆取り・接着・充填・復元・古色付け)　金属器の内部の割れ目や原形に近い状態を知るために、奈良国立文化財研究所遺物処理室の文化財用X線透過装置を使用し、撮影フィルムを参考にしながら、ニッパー・ヤスリ・カッターナイフ・ミニグラインダーを使用して錆を除去した。割れたり折れている金属器については、エポキシ系樹脂接着剤のアラルダイトを使用した。欠損部の充填には、増量剤を付加したボンドオールを使用した。金属器表面の精密な仕上げとして、ホワイト社製精密噴射加工機を使用した。接着・充填部の古色仕上げとしては、当初は市販の顔料を使用したが、途中から同一金属器の錆を使用する方法に変更した。短甲3領のうち1領(南墳2号短甲)は、取り上げ時の石膏で強固に包まれていたために、

振動を与えず石膏を取り外すのにかなりの時間を要した。また、短甲の上部が破片となり胴内に落ち込んでおり、それらが錆でくっついていたため、その取り外しも苦労をした。この短甲については、破片化した部品を接着し、欠損部を充填しながら全体的なバランスを保ちつつ復元を行うこととした。

なお、毎日の作業終了後は、定温乾燥機に入れて乾燥を続けた。

（樹脂含浸） 金属器減圧含浸装置に鉄器を入れ、約40mmHgで約８時間、非水系アクリルエマルジョン樹脂パラロイドNAD-10の30％液の減圧含浸を２～４回行い、充分に自然乾燥を行った。

なお、青銅器は、ベンゾトリアゾール液で前処理し、ベンゾトリアゾールを混ぜたアクリル樹脂を溶剤で溶かした液に充分に浸すことを数回くり返した。

C　保存科学処理後の金属器の取扱い

金属器は、金属器自体の構造と組織の個々の違いの他に、土中における種々な物理的化学的変化を、千数百年間にわたってその影響を受けてきた上に、発掘調査という行為によって外部との急激な環境変化による大きな変化を受けるものが多い。

そのため、現在で考えられる方法のうち、技術的条件・施設・設備の度合によって上述の方法で保存科学処理を実施した。

しかし、現段階では、どの程度の時間幅の中で保存処理済遺物の安定を保つことができるのか、明確な回答を出すことは不可能である。したがって、保存処理済遺物については、その後の取扱いに留意する必要が生じる。

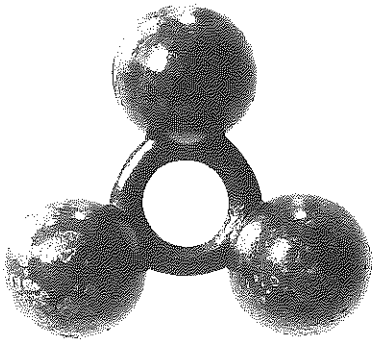
理想的保管施設の建設を別とするならば、まず、素手による取り扱いは慎むべきであり、保管に関しては、空調された収蔵庫において、低湿度が保持できるような容器に入れることが保存処理済遺物の長期安定性につながるものと考えられる。

今回の宇治二子山古墳出土金属器の保存科学処理は、保存の第１段階として土中環境からの切り離しとして実施されたものと位置づけるのが良く、今後は、未来へと受け継がれてゆく文化財として、普段の管理努力が必要となる。

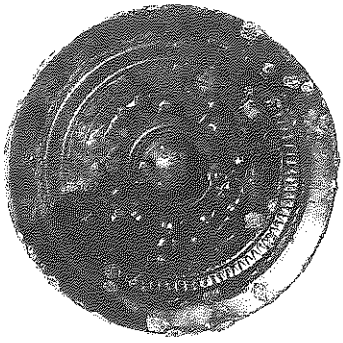
今回の保存処理は、唯一最終のものではなく、あくまでも永い文化財保存への道程の第１歩にしかすぎない。そして、将来、再修理を実施するであろう時には、より高い技術力において実施できることを望みたい。

（はしもと・せいいち、京都府立山城郷土資料館）

（処理前）　　（処理後）



(1)三環鈴

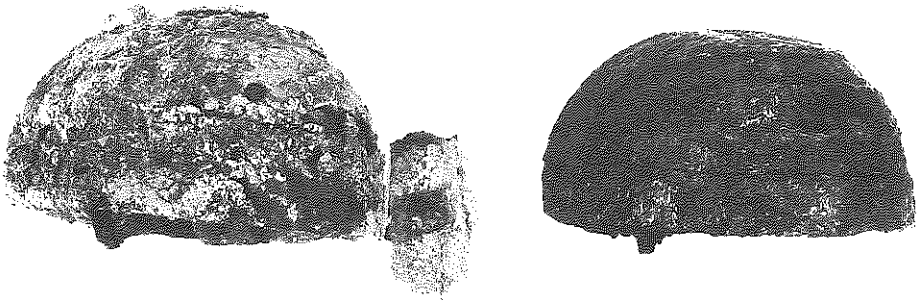


(2)半円方形帯神獣鏡

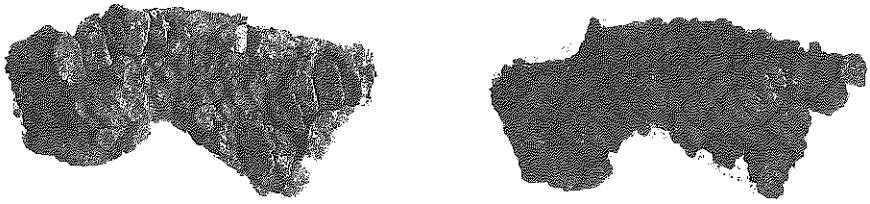
(3)四葉文鏡

第113図　保存処理前と保存処理後(1)

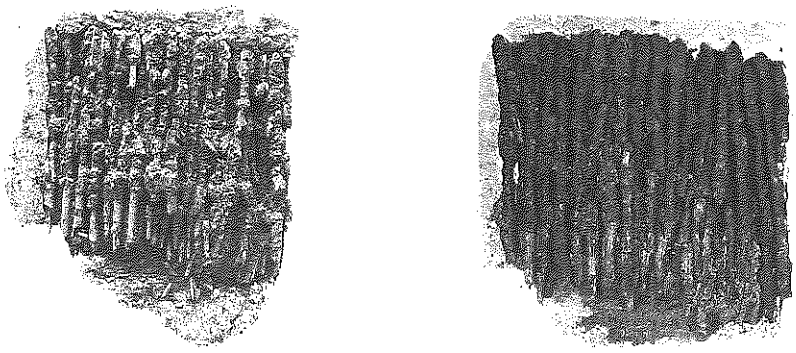
（処理前）　　（処理後）



(1)横矧板鋲留衝角付冑



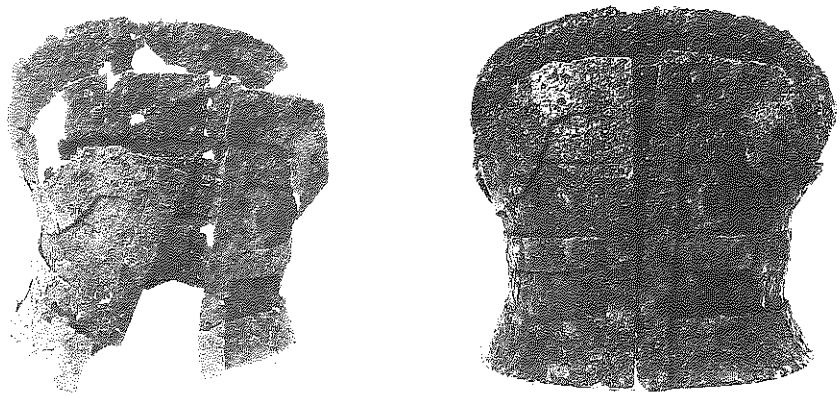
(2)肩甲の小札



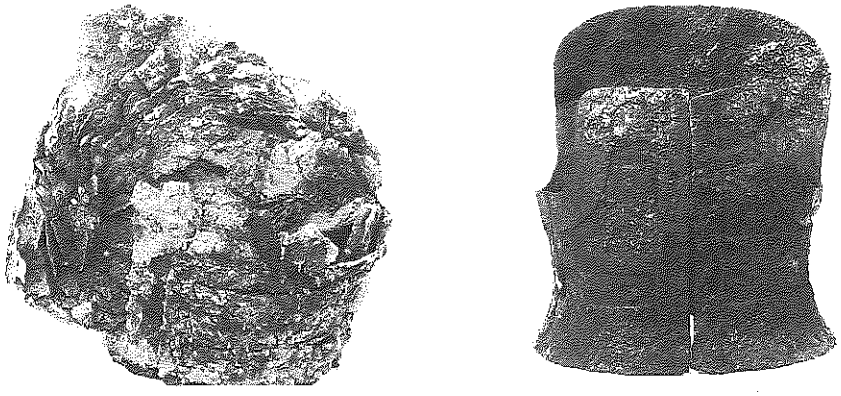
(3)鉄　鏃

第114図　保存処理前と保存処理後(2)

（保存処理前）　　（保存処理後）



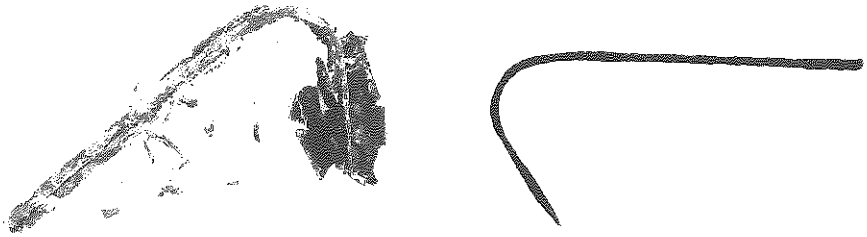
(1)北墳 短甲



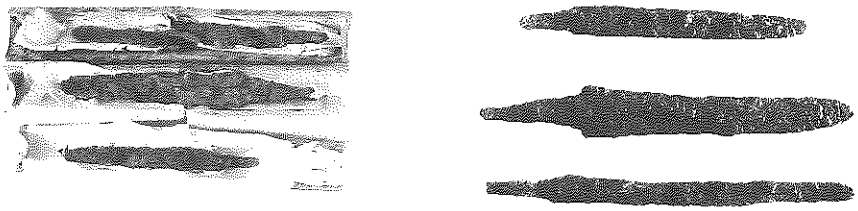
(2)南墳２号 短甲

第115図　保存処理前と保存処理後(3)

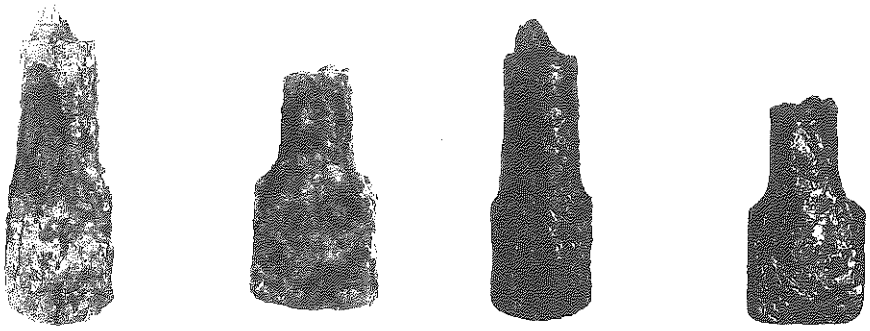
（保存処理前）　　（保存処理後）



(1)鉄柄手斧



(2)剣



(3)鉄　斧

第116図　保存処理前と保存処理後(4)

付表　報告遺物一覧表

北墳中央槨

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第24図1	図版第39(1)	矛	棺外		n 1
〃 2	〃	刀	〃	破片	N108
〃 3	〃	剣	〃	〃	n 3
〃 4	〃	槍	〃		n 2
第26図1		鉄鏃	棺内	平根式A	N29
〃 2		〃	〃	〃	N88
〃 3	図版第39(2)	〃	〃	〃	N85
〃 4	〃	〃	〃	〃	N106
〃 5		〃	〃	〃	N107
〃 6	図版第39(2)	〃	〃	〃	N95
〃 7		〃	〃	〃	N50
〃 8	図版第39(2)	〃	〃	〃	N97
〃 9	〃	〃	〃	〃	N30
〃 10	〃	〃	〃	〃	N43
〃 11	〃	〃	〃	〃	N87
〃 12		〃	〃	〃	N49
〃 13		〃	〃	〃	N84
〃 14		〃	〃	〃	N81
〃 15		〃	〃	〃	N42
〃 16		〃	〃	〃	N91
〃 17	図版第39(2)	〃	〃	〃	N96
〃 18	図版第40(1)	〃	〃	〃	N102
〃 19	〃	〃	〃	〃 Ba	N85
〃 20	〃	〃	〃	〃	N39
〃 21	〃	〃	〃	〃 A	N92
〃 22	〃	〃	〃	〃 Bb	N89
〃 23		〃	〃	〃 A	N41
〃 24	図版第40(1)	〃	〃	〃 Ca	N37
〃 25	〃	〃	〃	〃 Cb	N93
第27図26		鉄鏃	棺内	平根式Ca	N31
〃 27	図版第40(1)	〃	〃	〃	N44
〃 28	〃	〃	〃	〃	N40
〃 29		〃	〃	〃	N82
〃 30	図版第40(1)	〃	〃	〃	N108？
〃 31	〃	〃	〃	〃	N86
〃 32	図版第39(2)	〃	〃	〃 D	N48
〃 33	〃	〃	〃	〃	N47
〃 34		〃	〃	〃	N83
〃 35	図版第39(2)	〃	〃	〃	N33
〃 36		〃	〃	〃	N98
〃 37		〃	〃	〃	N46
〃 38		〃	〃	〃	N45

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第27図39		鉄鏃	棺内	平根式D	N36
〃 40	図版第40(1)	〃	〃	〃 E	N34
〃 41	図版第40(2)	〃	〃	尖根式A	N99
〃 42	〃	〃	〃	〃	N90
〃 43	〃	〃	〃	〃	N80
〃 44	〃	〃	〃	〃	N94
〃 45	〃	〃	〃	〃	N104
第28図1	図版第41(1)	鉄斧	棺内	有肩式	N19
〃 2	〃	〃	〃	無肩式	N20
〃 3	〃	〃	〃	〃	N15
〃 4	図版第41(2)	〃	〃	小型有肩式	N 2
〃 5	〃	〃	〃	〃	N24
〃 6	〃	〃	〃	〃	N 7
〃 7	〃	〃	〃	〃	N12
〃 8	〃	〃	〃	〃	N 3
〃 9	〃	〃	〃	小型無肩式	N 4
〃 10	〃	〃	〃	〃	N60
〃 11	〃	〃	〃	〃	N59
〃 12	〃	〃	〃	小型無肩式	N66
〃 13	図版第42(2)	鋤先	〃	曲刃	N14
〃 14	図版第42(1)	鎌	〃	曲刃	N56
〃 15	〃	〃	〃	直刃	N 6
〃 16	〃	〃	〃	〃	N57
〃 17	〃	〃	〃	〃	N11
〃 18		〃	〃	〃	N73
〃 19		〃	〃	不明	N69
〃 20		〃	〃	直刃	N10
〃 21		〃	〃	鈍角	N68
〃 22	図版第42(1)	〃	〃	直刃	N71
〃 23	〃	〃	〃	小型曲刃	N55
〃 24		〃	〃	〃	N72
〃 25	図版第42(1)	〃	〃	小型直刃	N51
〃 26	〃	〃	〃	小型曲刃	N28
第29図1	図版第43(2)	鉋	棺内	破片	N63
〃 2	〃	〃	〃	〃	N27
〃 3	〃	〃	〃	〃	N64
〃 4	〃	〃	〃	〃	N74
〃 5		〃	〃	〃	
〃 6	図版第43(2)	〃	〃	〃	N53
〃 7	〃	〃	〃	〃	N77
〃 8	〃	〃	〃	〃	N52
〃 9	〃	鑿	〃	〃	N61
〃 10	図版第43(1)	〃	〃	〃	N25
〃 11	〃	〃	〃		N22

付表　報告遺物一覧表

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第30図1	図版第42(2)	錐	棺内		N95
〃 2	〃	〃	〃	破片	N109
〃 3		〃	〃	〃	〃
〃 4	図版第42(2)	〃	〃	〃	〃
〃 5	〃	〃	〃	〃	〃
〃 6		〃	〃	〃	〃
〃 7	図版第42(2)	〃	〃	〃	〃
〃 8		〃	〃	〃	〃
第31図1	図版第42(2)	刀子	棺内		N1？
〃 2	〃	〃	〃		N9
〃 3	〃	〃	〃		N76
第32図1	図版第44(1)	鉸具	棺内		N1？
〃 2	〃	〃	〃		〃

北墳東槨

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第33図1	図版第45(1)	鉄斧	棺外	無肩式	N201
〃 2	〃	〃	〃	〃	N202
〃 3	図版第45(2)	〃	〃	〃	N203
〃 4	図版第45(1)	〃	〃	〃	N262
〃 5	〃	〃	〃	〃	N263
〃 6	〃	〃	〃	〃	N264
〃 7	〃	〃	〃	有肩式	N247
〃 8	〃	〃	〃	〃	N294
〃 9	図版第45(2)	〃	〃	〃	N205
〃 10	〃	〃	〃	〃	N225
〃 11	図版第45(1)	〃	〃	〃	N230
〃 12	図版第45(2)	〃	〃	〃	N235
〃 13	〃	〃	〃	〃	N244
〃 14	〃	〃	〃	〃	N276
〃 15	〃	〃	〃	無肩式	N245
〃 16	〃	〃	〃	有肩式	N275
第34図1	図版第46(1)	鎌	棺外	直刃	N296
〃 2	図版第46(2)	〃	〃	〃	N301
〃 3	〃	〃	〃	〃	N204
〃 4	〃	〃	〃	小型直刃	N274
〃 5	図版第46(1)	〃	〃	〃	N261-6
〃 6	〃	〃	〃	〃	N303
〃 7		〃	〃	不明	N265
〃 8	図版第46(2)	〃	〃	小型直刃	N302
〃 9		〃	〃	不明	N228
〃 10	図版第46(2)	〃	〃	小型直刃	N272
〃 11		〃	〃	不明	N241
〃 12		〃	〃	〃	N307

挿図番号	図版番号	名　　称	出土位置	備　　考	出土番号
第34図13		鎌	棺　外	不　明	N 300
〃　14	図版第46(1)	〃	〃	〃	N 261- a
〃　15	〃	〃	〃	小型直刃	N 267
〃　16	図版第46(2)	〃	〃	直　刃	N 299
〃　17		〃	〃	〃	N 260
〃　18	図版第46(2)	〃	〃	〃	N 260 ?
〃　19		〃	〃	直刃鈍角	N 290
〃　20	図版第46(1)	〃	〃	〃	N 269
〃　21	図版第46(2)	〃	〃	〃	N 297
〃　22	図版第46(1)	〃	〃	〃	N 298
〃　23	〃	〃	〃	〃	N 310
〃　24		〃	〃	鈍　角	N 309
〃　25		〃	〃	〃	N 226- 1
〃　26	図版第47(2)	鋤　先	〃		N 273
〃　27		手　鎌	〃		N 224
〃　28		〃	〃		N 257
〃　29		〃	〃		N 258
〃　30		〃	〃		N 222
第35図 1	図版第47(1)	鉋	棺　外		N 252
〃　2	〃	〃	〃		N 246
〃　3	〃	〃	〃		N 253
〃　4	〃	〃	〃		N 226- 3
〃　5		〃	〃		N 237
〃　6	図版第47(1)	〃	〃		N 219
〃　7	〃	〃	〃		N 216
〃　8	〃	〃	〃	破　片	N 270
〃　9	図版第48(1)	鑿	〃		N 291
〃　10	〃	〃	〃		N 282- b
〃　11	〃	〃	〃		N 251
〃　12	〃	〃	〃		N 234
〃　13	〃	〃	〃		N 284
〃　14	図版第48(2)	〃	〃		N 277
〃　15	〃	〃	〃		N 282- a
〃　16	〃	〃	〃		N 248
〃　17	図版第48(1)	〃	〃		N 249
〃　18	図版第48(2)	〃	〃		N 292
〃　19	〃	〃	〃		N 278
〃　20	〃	〃	〃		N 287
〃　21	〃	〃	〃	斜　刃	N 238
〃　22	図版第48(1)	〃	〃	〃	N 208
〃　23	〃	〃	〃	〃	N 286
〃　24	図版第27(2)	錐	〃		N 285
〃　25	〃	〃	〃		N 279
〃　26	〃	〃	〃	破　片	N 250
〃　27		〃	〃	〃	N 232

付表　報告遺物一覧表

挿図番号	図版番号	名　　称	出土位置	備　　考	出土番号
第35図28		錐	棺　内	破　片	N 210
〃　29		〃	〃	〃	N 231
〃　30		〃	〃	〃	N 233
〃　31		〃	〃	〃	N 239
第36図 1	図版第27(2)	ヘラ状工具	〃		N 240
〃　2	〃	〃	〃		N 255
〃　3	〃	〃	〃		N 206
〃　4	〃	〃	〃		N 213
〃　5	〃	刀　子	〃		N 254
〃　6	〃	〃	〃	剣　形	N 256

北墳西槨

挿図番号	図版番号	名　　称	出土位置	備　　考	出土番号
第37図	図版第49	鏡	棺　内	仿製半円方形帯神獣鏡	
第38図 1	図版第50(1)	勾　玉	〃	碧玉製	WJ22
〃　2	〃	〃	〃	〃	WJ 1
〃　3	〃	〃	〃	〃	WJ 3
〃　4	〃	〃	〃	〃	WJ20
〃　5	〃	〃	〃	〃	WJ21
〃　6	〃	〃	〃	〃	WJ 2
〃　7	〃	管　玉	〃	〃	WJ10
〃　8	〃	〃	〃	〃	WJ 5
〃　9	〃	〃	〃	〃	WJ 7
〃　10	〃	〃	〃	〃	WJ 6
〃　11	〃	〃	〃	〃	WJ 8
〃　12	〃	〃	〃	〃	WJ 9
〃　13	〃	〃	〃	〃	WJ18
〃　14	〃	切子玉	〃	瑪瑙製	WJ 4
〃　15	〃	〃	〃	〃	WJ ?
第39図 1 ～ 5	図版第50(2)	ガラス小玉	〃	空　色	
〃　6 ～15	〃	〃	〃	紺　色	
第40図	図版第51	小型勾玉	〃	滑石製	
〃　1 ～67	〃				
第41図	図版第51	臼　玉	〃	滑石製	
第43図	図版第52	衝角付冑	短甲内	三角板革綴式	
第44図	図版第52	鍬	〃	衝角付冑付属	
第45図	図版第54	頸　甲	棺　内		
第46図	図版第56(1)	肩　甲	〃	頸甲付属、右肩	
第47図	〃	〃	〃	〃　　左肩	
第48図	図版第55	短　甲	〃	方形板革綴式	
第49図		楯	棺　上	漆膜残る	

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第50図 1	図版第57	直刀	棺内		WI37
〃 2	〃	〃	〃		WI40
〃 3	〃	剣	〃		WI39
〃 4	〃	〃	〃		WI38
第51図 1	図版第56(2)	槍	棺外		W 1
〃 2	〃	〃	〃		W 3
〃 3	〃	短刀	〃		W 2
第52図 1	図版第58(1)	鉄鏃	棺内	平根式A	WI 6
〃 2	〃	〃	〃	〃	WI 7
〃 3	〃	〃	〃	〃	WI 8
〃 4	〃	〃	〃	〃	WI20
〃 5	〃	〃	〃	〃	WI22
〃 6	〃	〃	〃	〃	WI23
〃 7	〃	〃	〃	〃	WI21
〃 8	図版第58(2)	〃	〃	尖根式B	WI17
〃 9	〃	〃	〃	〃	WI10
〃 10	〃	〃	〃	〃	WI19
〃 11	〃	〃	〃	〃	WI18
〃 12	〃	〃	〃	〃	WI 9
〃 13	〃	〃	〃	〃	WI11
〃 14	〃	〃	〃	〃	WI15
〃 15	〃	〃	〃	〃	WI12
〃 16		〃	〃	〃	WI16
〃 17	図版第58(2)	〃	〃	〃	WI13
第53図	図版第59(1)	鉄柄手斧	棺内		WI36
第54図 1	図版第59(2)	鎌	棺内	直刃	WI14
〃 2	〃	〃	〃	曲刃	WI25
〃 3	〃	鉄斧	〃	無肩式	WI 4
第55図 1	図版第69(1)	鉈	棺内		WI30
〃 2	〃	〃	〃		WI32
〃 3	〃	〃	〃		WI31・33
〃 4	図版第60(2)	鑿	〃		WI34
第56図 1	図版第60(2)	刀子	棺内	鹿角装	WI 3 -33
〃 2	〃	〃	〃		WI29
〃 3	〃	〃	〃		WI 5
〃 4	〃	〃	〃	鹿角装	WI26
〃 5	〃	〃	〃		WI35
〃 6	〃	〃	〃	鹿角装	WI24

埴輪

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第57図 1	図版第61(1)	円筒埴輪	埴輪列	復元	NO.20
〃 2	図版第61(2)	〃	〃	〃	不明

付表　報告遺物一覧表

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第58図3		円筒埴輪	埴輪列	基部	NO.16
第58図4		〃	〃	〃	NO.22
〃 5		〃	〃	〃	NO.23
〃 6	図版第63(1)A	〃	〃	〃	NO.21
〃 7		〃	〃	〃	NO.4
〃 8		〃	〃	〃	NO.10
〃 9	図版第62	〃	〃	〃	NO.12
〃 10		〃	〃	〃	NO.13
第59図11		円筒埴輪	埴輪列	基部	NO.14
〃 12	図版第62	〃	〃	〃	NO.15
〃 13	図版第63(1)B	〃	〃	〃	NO.25
〃 14		〃	〃	〃	NO.24
〃 15	図版第62	〃	〃	〃	NO.17
〃 16	〃	〃	〃	〃	NO.18
〃 17		朝顔形埴輪	流土中	口縁部	Aトレンチ
第60図	図版第63(2)	家形埴輪	流土中	切妻式	Aトレンチ
第61図1	図版第64(1)	家形埴輪	流土中	柱片	Aトレンチ
〃 2	〃	〃	〃	屋根片	
〃 3	〃	〃	〃	柱片	
〃 4	〃	形象埴輪	〃	不明	Aトレンチ
〃 5	〃	蓋形埴輪	〃		〃
〃 6	〃	草摺形埴輪	〃		〃
〃 7	図版第64(2)	靫形埴輪	〃	朱彩	〃
〃 8	〃	〃	〃	〃	〃
〃 9	〃	〃	〃	〃	〃
〃 10	〃	〃	〃	〃	〃
〃 11	〃	〃	〃	〃	〃
〃 12	〃	〃	〃	〃	〃
〃 13	〃	〃	〃	〃	〃
〃 14	〃	〃	〃	〃	〃
〃 15	〃	〃	〃	〃	〃

南　墳

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第72図	図版第65	鏡	棺内	四葉文鏡	
第73図	図版第66	三環鈴	1号短甲内		
第74図1・2	図版第67	硬玉勾玉	棺内		
〃 3～26	〃	碧玉管玉	〃		
〃 27～29	図版第68(2)	滑石製勾玉	〃		
第77図	図版第69	衝角付冑	2号短甲内	横矧板鋲留	
第78図		鎧	2号短甲内	衝角付冑付属	

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第79図1号	図版第70	短甲	棺内	三角板横矧板併用鋲留	TⅠ(1号)
〃 2号	図版第71	〃	〃	横矧板鋲留	TⅡ(2号)
第80図		蝶番		2号短甲	
第82図1～8	図版第72(1)	挂甲小札	2号短甲内	A類	
〃 9～16	図版第72(2)	〃	〃	B類	
第83図17～21	図版第73(1)	挂甲小札	2号短甲内	C類	
〃 22～32	図版第73(2)	〃	〃	D類	
第84図	図版第74(1)	頸甲	棺内	1号	
〃 1～5	図版第74(2)	肩甲小札	〃	〃	
第85図	図版第75(1)	頸甲	棺内	2号	
第86図1～12	図版第75(2)	肩甲	棺内	2号	
第87図13～30	〃	肩甲	棺内	2号	
第88図1～12	図版第76(1)	籠手	棺内	1号	
〃 13～21	〃	手甲小札	〃	〃	
第89図1	図版第77(2)	籠手	棺内	2号、石膏取り上げ	
〃 2～7	図版第77(1)	〃	〃	〃	
〃 8～18	図版第77(3)	手甲小札	〃	〃	
第90図1	図版第78	橋金具	棺外		I 22
〃 2	〃	〃	〃		I 23
第91図1		直刀	棺内		
〃 2	図版第80(1)	剣	〃		I 30
〃 3	〃	〃	〃		I 26
第92図1	図版第79(1)	矛	棺外		I 21
〃 2	〃	〃	〃		I 24
〃 3	〃	石突	〃		I 22
〃 4	図版第79(2)	槍身矛	〃		
第94図1	図版第81(1)	鉄鏃	棺内	平根式G	I 31-F
〃 2	〃	〃	〃	〃 G	I 31-V
〃 3	〃	〃	〃	〃 H	I 31-E
〃 4	〃	〃	〃	〃 F	I 31-D
〃 5	〃	〃	〃	〃 Ca	I 31-H
〃 6	〃	〃	〃	〃 Cb	I 31-I
〃 7	〃	〃	〃	〃 Ca	I 31-G
〃 8	〃	〃	〃	〃 Cb	I 31-K
〃 9	〃	〃	〃	〃 Ca	I 31-S
〃 10	〃	〃	〃	〃 Ca	I 31
〃 11	図版第81(1)	〃	〃	〃 Cb	I 19-N
〃 12	〃	〃	〃	〃 Cb	I 31-J
〃 13		〃	〃	長頸式Aa	I 31
〃 14		〃	〃	〃 Aa	〃
〃 15		〃	〃	〃 Aa	〃

付表　報告遺物一覧表

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第95図1～17	図版第81(2)	鉄鏃	棺内	長頸式Aa	I 32
第96図18		鉄鏃	棺内	長頸式Ba、石膏取り上げ	I 32
〃 19～23		〃	〃	〃	〃
〃 24		〃	〃	〃 Bb	〃
〃 25		〃	〃	〃 Cb	〃
〃 26		〃	〃	〃 Ac	〃
第97図1		鉄鏃	棺内	長頸式Ab	I 33
〃 2～6		〃	〃	〃 Ca	〃
第98図	図版第80(2)	胡籙金具	棺内	金銅張り	
第99図	図版第82(1)	轡	棺内	I字形鏡板付	
第100図2	図版第83(1)	木心鉄張輪鐙	棺外		I 2
〃 3		〃	〃		I 23
〃 4	図版第83(2)	剣菱形杏葉	〃		I 3
〃 5		釣舌金具	不明		
〃 6	図版第83(2)	鞍金具	棺外		I 4
〃 7	〃	〃	〃		S－1
〃 8	〃	鈴具	〃		不明
〃 9	〃	〃	棺内		不明
〃 10	〃	〃	棺外		不明
第101図1	図版第82(2)	環状雲珠	棺外		I－1
〃 2	〃	環状辻金具	棺内		不明
〃 3	〃	〃	棺外		I－6
〃 4～6		〃	棺内		
〃 7～32	図版第84(1)	組合式辻金具	〃		
〃 33～39		〃	〃		
第102図1	図版第85(2)	刀子	棺内		I 32-32
〃 2	〃	〃	〃		I 32-19
〃 3	〃	〃	〃		I 32-41
〃 4	〃	ワラビ手刀子	〃		N 32-17,20
〃 5		〃	〃	破片品	I 32
〃 6	図版第85(2)	〃	〃	〃	I 32-5
〃 7	〃	〃	〃	〃	I 32-30
〃 8		〃	〃	〃	I 32
〃 9		〃	〃	〃	I 32
〃 10	図版第85(2)	刀子	〃		I 31-11
〃 11		不明鉄器	〃		
〃 12		〃	〃		
〃 13	図版第85(1)	刀子	〃		I 25
〃 14	〃	〃	〃		I 24
〃 15	〃	〃	〃		不明
〃 16	図版第84(2)	鉈	〃		I 19-d
〃 17		〃	〃		

挿図番号	図版番号	名称	出土位置	備考	出土番号
第102図18	図版第84(2)	鉄斧	棺内		I 19-d
〃 19	〃	〃	〃		I 19-n
20	〃	鎌	〃		TI182-1
〃 21	〃	〃	〃		TI38
〃 22	〃	〃	〃		TI81
〃 23	〃	〃	〃		TI82-2
第103図1～12		針	棺内	破片品	I 32

あ と が き

二子山古墳の整理作業を再開し、本書に至るまで8年余りが過ぎた。昭和58年10月20日、透きとおるような秋空の日、京都大学考古学研究室で初めてすべての遺物を一同に目にした時の感動を今も忘れることはない。

そして、この膨大な遺物と薄茶けた多数の実測図を前に、「はたしてできるのだろうか」という不安と「是非ともやりとげねば」という相反した思いが錯綜し続けた8年でもあった。

思い入れだけで、この遺物群を保存処理し、実測し、そして整理・執筆という気の遠くなるような作業を、緊急調査のあい間をぬいながら続けるのは、正直なところ苦痛であった。しかし、何とかここまでやり遂げることができたのは、時には夜遅くまで黙々と実測・整図作業を手伝ってくれた多くの補助員諸君と、陰で常に支えていただいた上司の方々、また同僚諸氏の助力のたまものである。感謝したい。

そして何よりも、本書刊行と整理作業の再開にご尽力いただいた関係各位を始め、昭和43年の春遠い二子山古墳上で発掘調査に汗をし精密な記録を作成された方々や、大学紛争の中で整理作業を継続された方々に対して、衷心よりの感謝とお礼を申しのべたい。

本書がかかる多くの方々のご厚情とご努力の結果として刊行ができたことを明記し、そして日本の古墳研究に寄与できることを喜びとして、本書のおわりとしたい。　（杉　本）

昭和43年初春、二子山古墳にて

UJI-FUTAGOYAMA BURIAL MOUND EXCAVATION REPOART

ENGLISH SUMMARY

CONTENTS

I List of Color Plates

II List of Plates

III Summary

I List of Color Plates

1-1	Air View of Uji:	Seen from north
1-2	Uji River and Uji Bridge	
2	Tanko-cuirass and Beared Helmet:	West Coffin of the North Mound
3	Tanko-cuirasses and Beared Helmet:	South Mound
4	Bronze Mirror and Beads:	West Coffin of the North Mound
5	Bronze Mirror and Beads:	South Mound
6	Ancient solder	

II List of Plates

1-1	Air View of Uji:	Seen from north
1-2	General View:	1989 shot
2	Air View of the Site:	1982 shot
3	General View:	1968 shot
4	View of Mounds:	1968 shot
5-1	View of North Mound	
5-2	View of South Mound	
6, 7, 8, 9	North Mound:	Row of "Haniwa" Cylinders
10, 11	North Mound:	View of Three Coffin
12	North Mound:	Seen from south, Central Coffin
13	North Mound:	Interior of the Central Coffin, showing the Arrangement Remains
14	North Mound:	Exterior of the Central Coffin, showing the Arrangement of the Iron Spear head and the Iron Lance
15-1	North Mound:	View of the Drainage, Central Coffin
15-2	North Mound:	Central Coffin
16	North Mound:	Seen from north, East Coffin
17-1	North Mound:	East Coffin
17-2	North Mound:	Exterior of the East Coffin, showing the Arrangement of the Iron Tools

18	North Mound:	Lacquered Shield on the West Coffin
19	North Mound:	Seen from north, West Coffin
20-1	North Mound:	Seen from south, West Coffin
20-2	North Mound:	Interior of the West Coffin, showing the Arrangement of the Lacquered combs
20-3	North Mound:	Interior of the West Coffin, showing the Arrangement of the cuirass and Tools and wepons
21	North Mound:	Interior of the West Coffin, showing the Arrangement of the cuirass
22	North Mound:	Interior of the West Coffin, showing the Arrangement of the Tools and Allow Heads
23-1	North Mound:	Interior of the West Coffin, showing the Helmet in the Cuirass
23-2, 3	North Mound:	Interior of the West Coffin, showing the Arrangement of the Bronze Mirror and Beads
24	South Mound:	View of the South Mound
25	South Mound:	Coffin seen from west
26-1	South Mound:	Coffin seen from east
26-2, 27-1	South Mound:	Exterior of the Coffin, showing the Arrangement of the horse Ornaments
27-2	South Mound:	Exterior of the Coffin, showing the Arrangement of the Spearheads
28, 29	South Mound:	Interior of the Coffin, showing the Arrangement of the Cuirass (No. 1) and the horse Ornaments
30-1	South Mound:	Interior of the Coffin, showing the Arrangement of the Lacquerd Tasset behind the Cuirass (No. 1)
30-2	South Mound:	Interior of the Coffin, showing the Bronze Bell into the Cuirass (No. 1)
30-3	South Mound:	Interior of the Coffin, Showing the Arrangement of the Horse Ornaments beside the Cuirass (No. 1)
31	South Mound:	Interior of the Coffin, showing the Arrangement of the Swords and the Beads

32	South Mound:	Interior of the Coffin, showing the Arrangement of the Cuirass (No. 2)
33, 34	South Mound:	Interior of the Coffin, showing the Arrangement of the Gauntlet beside the Cuirass (No. 2)
36, 37	South Mound:	Interior of the Coffin, Showing the Arrangement of the Cuirass (No. 2) and the Allow Heads
38	South Mound:	Exterior of the Coffin, showing the Arrangement of the Lacquerd shield Accessory
39-1	Iron Swords, Spear-head, lance:	Central Coffin of the North Mound
39-2, 40	Allow Heads:	Central Coffin of the North Mound
41	Iron Axe-Heads:	Central Coffin of the North Mound
42-1	Iron Sickles:	Central Coffin of the North Mound
42-2	Iron Spade-Head, Knifes, Drills:	Central Coffin of the North Mound
43	Iron Chisels:	Central Coffin of the North Mound
44	Iron Buckle:	Central Coffin of the North Mound
45	Iron Axe-Heads:	East Coffin of the North Mound
46	Iron Sickles:	East Coffin of the North Mound
47-1	Iron Chisels:	East Coffin of the North Mound
47-2	Iron Spade-Head, Knifes, Drills:	East Coffin of the North Mound
48	Iron Chisels:	East Coffin of the North Mound.
49	Bronze Mirror:	West Coffin of the North Mound
50, 51	Beads:	West Coffin of the North Mound
52, 53	Beaked Iron Helmet:	West Coffin of the North Mound
54	Iron Neck Guard:	West Coffin of the North Mound
55	Iron Cuirass:	West Coffin of the North Mound
56-1	Iron Shoulder Armuor:	West Coffin of the North Mound
56-2	Iron lance, Dagger:	West Coffin of the North Mound
57	Iron Swords, Daggers:	West Coffin of the North Mound
58	Allow Heads:	West Coffin of the North Mound

59-1	Iron Hatchet:	West Coffin of the North Mound
59-2	Iron Axe-Head, Sickles:	West Coffin of the North Mound
60	Iron Chisels, Knifes:	West Coffin of the North Mound
61, 62, 63-1	Cylindrical-Haniwas:	North Mound
63-2, 64	Figured-Haniwas:	North Mound
65	Bronze Mirror:	Coffin of the South Mound
66	Bronze Bell:	Coffin of the South Mound
67, 68	Beads:	Coffin of the South Mound
69	Beaked Iron Helmet:	Coffin of the South Mound
70	Iron Cuirass (No. 1):	Coffin of the South Mound
71	Iron Cuirass (No. 2):	Coffin of the South Mound
72, 73	Iron Scales of the Armour:	Coffin of the South Mound
74-1	Iron Neck Guard (No. 1):	Coffin of the South Mound
74-2	Iron Shoulder Armour (Scale type):	Coffin of the South Mound
75-1	Iron Neck Guard (No. 2):	Coffin of the Couth Mound
75-2	Iron Shoulder Armour:	Coffin of the South Mound
76-1	Iron Gauntlet (No. 1):	Coffin of the South Mound
76-2	Iron Scales of the Gauntlet (No. 1):	Coffin of the South Mound
77-1, 77-2	Iron Gauntlet (No. 2):	Coffin of the South Mound
77-3	Iron Scales of the Gauntlet (No. 2):	Coffin of the South Mound
78	Iron Accessorys of the Shield:	Coffin of the South Mound
79	Iron Spearheads, Butt-End:	Coffin of the South Mound
80-1	Iron Daggers:	Coffin of the South Mound

80-2	Accessory of the Allow Case:	Coffin of the South Mound
81	Allow Heads:	Coffin of the South Mound
82-1	Bit:	Coffin of the South Mound
82-2	Horse-Trappings:	Coffin of the South Mound
83-1	Stirrups:	Coffin of the south Mound
83-2, 84-1	Horse-Trappings:	Coffin of the South Mound
84-2	Iron Axe-Head, Sickles, Chisels:	Coffin of the South Mound
85	Knifes:	Coffin of the South Mound

Uji-Futagoyama burial mound

Excavation Report

III SUMMARY

The Uji-Futagoyama ancient burial mounds are located at Uji City in Kyoto, Japan. Uji-Futagoyama tumuluses consist of two mound tombs and stands the top hill on the right bank of the Uji River.

The archaeological investigatin of these tumuluses was carried out between 19th February 1968 and 24th April by The Board of Education of Uji City and The Party of Uji-Futagoyama tumuluses Investigatin.

Through this excavation, the following facts were revealed.

The North Mound is "En-fun"(Circular Mound) whose diameter was 40 meters and 4.3 meters high. The mound's surface was covered with round stones bigger than hand size. On the top and the lowest tier of the mound, cylindrical and repersentational "Haniwa"(clay objects) stood in a row at at close distance from each other. At the central part of the Mound top were buried three coffins. These coffins were as follows.

1) The Central Coffin was of wooden construction and had almost been destroyed. It had already putrefied. Its inside was colored with pigment. Arrow heads, iron tools and an iron sword were located at the bottom of the coffin.
2) The East Coffin was also wooden and the whole was covered by the thick layered clay. This type of the burial practice is "Nendo-Kaku (clay container). This coffin as well had almost been destroyed and had already putrefied. It measured 6.5 long. It inside was colored with pigment. Iron tools were located outside this coffin.
3) The West Coffin was "Nendo-Kaku" type burial as well, only this coffin had remained undisturbed but had already putrefied. It measured 5.5 long. Its inside was colored with pigment. Iron cuirass, a beaked iron helmet, iron swords, spearheads, iron tools, a bronze mirror, and beads were located at the bottom of this coffin.

The South Mound was "Ho-fun" (Square Mound) with a diameter of 34 meters and 4.3 meters high. On the top and the lowest tier of the mound, cylindrical and representational "Haniwa" stood in a row similar to the North Mound. One coffin had been buried in the central part of the Mound top. This coffin had already putrefied. It measured 6.5 long. It inside was colored with pigment. Iron cuirasses, horse ornaments, a beaked iron helmet, iron swords, iron scales of armour, arrow heads, a bronze mirror, and beads were located at the bottom of this coffin. Iron spearheads and horse ornaments were located outside this coffin.

The North Mound is considered to have been constructed in the middle phase of 5th century. The South Mound is considered to have been constructed in the latter of 5th century. That is to say, both of them belong to the middle phase of the Kofun-period. Judging from the burial articles, these Uji-Futagoyama mound tombs are representative of chieftain tombs in the middle phase of the Kofun period in the Uji area.

END